

博士論文

異文化間交流における文学翻訳の研究—19世紀後半
から20世紀初頭の日本とイギリスにおける「忠臣
蔵」受容を題材として

(Title: A Case Study of Literary Translation in the
Intercultural Context: Reception of *Chushingura* in Britain
and Japan from the Late-19th Century to the Beginning of
the 20th Century)

2019年3月

立命館大学大学院文学研究科
行動文化情報学専攻博士課程後期課程

川内 有子

立命館大学審査博士論文

異文化間交流における文学翻訳の研究—19世紀後半から
20世紀初頭の日本とイギリスにおける
「忠臣蔵」受容を題材として

(Title: A Case Study of Literary Translation in the Intercultural
Context: Reception of *Chushingura* in Britain and Japan from the
Late-19th Century to the Beginning of the 20th Century)

2019年3月

March 2019

立命館大学大学院文学研究科

行動文化情報学専攻博士課程後期課程

Doctoral Program: Major in Informatics of Behavior and Cultures

Graduate School of Letters

Ritsumeikan University

川内 有子

KAWAUCHI Yuko

研究指導教員：赤間 亮 教授

Supervisor : Professor AKAMA Ryo

内容

序章.....	1
1. はじめに	1
2. 討ち入り事件のあらましと「忠臣蔵」という呼称.....	1
3. 近代におけるイギリスを中心とした西洋人の「忠臣蔵」受容.....	4
4. 19世紀から20世紀はじめにかけての西洋人の「忠臣蔵」受容を考察した先行研究.....	6
5. 本研究の目的と構成	9
第1章 西洋人の「忠臣蔵」へのまなざし：開国以前から直後まで.....	13
1. はじめに	13
2. ティチングの著作への反響と日本人の復讐心への関心：1850年代まで.....	14
3. オールコックの「忠臣蔵」の記述.....	20
4. 1860年代の「忠臣蔵」への言及：ジョージ・スミスとルドルフ・リンダウ.....	24
5. おわりに	27
第2章 A.B.ミットフォード <i>Tales of Old Japan</i> 所収 “The Forty-seven Ronins”.....	29
1. はじめに	29
2. ミットフォードの方法.....	30
3. ミットフォードの構想の先駆者ティチングの取り組み.....	33
4. “The Forty-seven Ronins”の内容の新しさ	36
5. <i>Tales of Old Japan</i> 出版直後の反響	40
6. おわりに	43
第3章 F.V.ディキンズの英訳「仮名手本忠臣蔵」.....	45
1. はじめに	45
2. 初版をめぐる <i>Japan Weekly Mail</i> における議論と改訂.....	47
3. 維持された意識.....	49

4. 在日外国人、日本人の間での英訳「仮名手本忠臣蔵」の用途.....	54
5. おわりに	58
第4章 西洋人による「忠臣蔵」受容に対する日本人の反応.....	59
1. はじめに	59
2. 西洋に滞在していた日本人の反応：前田正名と斎藤修一郎.....	62
3. 日本人へ向けた出版物における表象	66
4. キッチンナー元帥来日における「仮名手本忠臣蔵」鑑賞の報道.....	69
5. おわりに	74
第5章 井上十吉の英訳「仮名手本忠臣蔵」と武士道の再定義.....	75
1. はじめに	75
2. 英訳「仮名手本忠臣蔵」初版と第2版の違い.....	76
3. 第2版の Introduction における「武士道」の定義と国内の認識.....	80
4. 第2版出版当時の井上十吉の活動.....	83
5. 「武士道」の語をめぐる海外の認識	86
6. おわりに	92
第6章 ジョン・メイスフィールドの <i>The Faithful</i> の劇評に見えるイギリス人の四十七士観 の変化	94
1. はじめに	94
2. <i>The Faithful</i> の内容：第1次世界大戦の寓意としての検討.....	97
3. <i>The Faithful</i> の劇評	99
4. おわりに	101
結章.....	103

序章

1. はじめに

本論文は、開国を機に本格的な交流が始まった日本とイギリス間の異文化交流の中で、英語で記述されるようになった赤穂浪人の討ち入り事件に関する物語や伝説（以下「忠臣蔵」とする）が果たした役割や、2つの異文化の間でやりとりされることによって生じた「忠臣蔵」の持つ意味の変化について、「忠臣蔵」の受容研究の観点から取り組んだものである。

本章では、まず、「忠臣蔵」の根幹となっている史実としての歴史事件の概要を確認し、本研究で「忠臣蔵」の呼称を用いる根拠について説明する。続いて、近代における外国人の「忠臣蔵」受容について概略をまとめ、主要な「忠臣蔵」受容史の研究の中での位置づけを確認したうえで、本研究が対象とする19世紀から20世紀はじめにかけての西洋人の「忠臣蔵」受容を考察した先行研究をまとめる。最後に、本研究が受容に焦点を当てて英文脈における「忠臣蔵」を取り扱う意義について述べ、本論文の構成を示したい。

2. 討ち入り事件のあらましと「忠臣蔵」という呼称

1701年から1703年（元禄14年から15年）にかけて起こった、赤穂藩主浅野内匠頭長矩の江戸城内刃傷事件に起因する赤穂浪人による吉良邸への討ち入りは、講談、読本、浪花節、テレビドラマや映画など、多様なジャンルに翻案され、今日まで日本人に親しまれている。この討ち入り事件が外国人に向けて紹介されたのは、1820年にフランスで出版されたオランダ人商館長イザーク・ティチング(Isaac Titsing, 1745-1812)による記述が管見の限り最も古いものであったが、当初は西洋人の関心を集める対象とはならず、日本人の国民性を語る現象として注目されるのは、日本が開国した1860年代からのことであった。本節では、歴史事件としての赤穂浪人の討ち入りのあらましをまとめ、それに基づくフィクションも含めて「忠臣蔵」という呼称で呼ばれ、近代において日本人の国民性の象徴と目されるにいたるまでの一連の流れをまとめたい。

討ち入り事件のあらましをまとめると、次の通りである。1701年4月21日（元禄14年

3月14日)、朝廷から幕府の年始の挨拶に対する返礼として遣わされた勅使を迎える江戸城内で、勅使御馳走役を務めていた赤穂藩藩主・浅野内匠頭長矩が式典の運びを指南する高家衆の筆頭・吉良上野介義央に切り付けた。浅野内匠頭は、吉良上野介に浅手を負わせたあと取り押さえられ、城内で刃傷事件を起こした罪により、藩は取り潰し、家名は断絶の上に切腹を仰せつかり、その日のうちに切腹した。一方、応戦して刀を抜くことをしなかった吉良上野介へは、何の咎めもなかった。浅野の家臣である赤穂藩士たちが浅野内匠頭の弟・浅野大学長広が遣わした使者によって事件を知ったのは事件の5日後のことで、さらに、翌日再びもたらされた詳細によって家名の断絶や領地の没収といった幕府の処分が知らされた。最初の知らせがもたらされてより、赤穂藩士たちは評議を開き、処罰に対する対処を話し合っていたが、この中で浅野家家老・大石内蔵助義雄も、大学による浅野家の再興の許しを得ることを第1の目標として粛々と幕府の裁きに従い、それが叶わないときは吉良への仇討を行うという方針に心を固めていった。赤穂城はこうして5月末(4月中旬)には幕府の手へ引き渡され、家臣たちは所属する藩のない浪人となった。結局、浅野家再興の許しは下りず、内匠頭の死から1年10か月が経過した1703年1月31日(元禄15年12月15日)未明、47人の赤穂浪人たちは江戸の本所にあった吉良邸へと侵入し、吉良上野介の首をとり、そのまま高輪・泉岳寺にある内匠頭の墓前へとその首を届け、彼ら自身は、幕府の裁定を待つために4つの藩邸に振り分けられ、処分と大赦の間で議論は紛糾したが、ついに彼らの行いは死に値するとの決定が下り、1703年3月20日(元禄16年2月4日)に切腹して果てた¹⁾。

この事件は、服部幸雄(2011)によれば、平和な時代に起きた物騒な事件として人目を引き、内匠頭の刃傷事件とその処罰の頃からすでに同時代の人々の関心を引いていたという²⁾。討ち入り後、まずは儒家の間でその行いの正当性を問う議論が戦われた。八木哲浩(1989)は、議論の争点は多岐にわたり、その原因が武士社会における大名と家臣の主従関係と幕府の法の遵守との二重構造にあったとし、幕藩体制が崩壊した明治以降にはこの問題が解消されたため、討ち入りを「武士道に従った忠義」としてみることに障害がなくなったと述べて

いる³。また、四十七士は町人たちの間でも全国的に大変もてはやされた。松島栄一は、その理由が艱難辛苦に耐えて準備をし、亡主の恨みを晴らすために個人の幸福や命を犠牲にして目的を遂げたこと、そして、四十七士の多くが身分の低い武士であったことから同情を寄せやすかったという点にあるのではないかと述べている⁴。

人々の関心を受けて、芝居もすぐに反応し、作家たちは、事件の舞台を鎌倉または室町時代に仮託することで、当代のことを題材にしてはならないとする幕府の法の目をすり抜け、舞台に乗せようと努めた。「仮名手本忠臣蔵」の「役名による芸評集⁵」である『古今いろは評林』では、江戸に住んでいた俳人室井其角より大坂の某に宛てた手紙に、「此程の一件も二月四日に片付て、…境町勘三座にて十六日より曾我夜討に致候て、…当時の事遠慮も有べきよしとて三日して相止候。⁶」とあるのをもって、1703年4月1日（元禄16年2月16日）に初演された「曙曾我夜討」を討ち入りに基づいた演劇の始めとしている。しかし、この他に上演を裏付ける同時代の資料がないため、赤間亮(1992)は、大勢での夜討ちや彼らの揃いの装束、討ち入りでの梯子の使用、敵役の工藤祐経が老人であるといった、赤穂浪人の討ち入りを連想させるような曾我ものらしからぬ演出が絵入狂言本から確認できることや、直後に出された幕府の法令などから、上演記録が確認できる前月初演の「傾城阿佐間曾我」が舞台化の始まりであるとした⁷。「忠臣蔵」の総合的な研究である、赤穂市教育委員会市史編纂室編による『忠臣蔵』もこの説に従っている⁸。そののち、1706年（宝永3年）に大坂の竹本座で、『太平記』に世界を移した近松門左衛門の浄瑠璃「碁盤太平記」が上演され、内匠頭を陥れられる塩冶判官に、吉良を塩冶の妻に横恋慕する高師直に、大石内蔵助を塩冶の家臣の大星由良之助にという『太平記』の世界への置き換えもここに成立した。同じ世界を利用した演劇の中でも、1748年（寛延元年）に竹田出雲・三好松洛・並木千柳によって制作された浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」の成功は著しく、以降の討ち入り事件に関する言説の中心となり、討ち入った義士1人1人のエピソードなどといった新たな作品を醸成する世界を提供し続けた。

浄瑠璃作品の題である「仮名手本忠臣蔵」を赤穂浪人の討ち入り事件に関する言説、芝居、

映画などの総称とすることに関しては、江戸時代から始まっていたとする学説が多い。例えば、江戸城内での刃傷事件発生から近代初期における「忠臣蔵」受容までを日本史学の観点から詳細に検討し、現在も「忠臣蔵」受容史研究におけるもっとも重要な研究書の1つである松島栄一『忠臣蔵：一その成立と展開一』もこの立場をとる。松島は、「仮名手本忠臣蔵」の成立以降、赤穂事件に関わる浄瑠璃・歌舞伎を「忠臣蔵」「忠臣蔵もの」と言うようになり、そのうち、赤穂事件そのものも「忠臣蔵の事件」などと呼ばれるようになったと述べている⁹。1980年代までの「忠臣蔵」の日本国内での位置づけの変遷について考察したヘンリー・スミス(Henry D Smith II, 2008)はより詳細にこの変化を解説し、「忠臣蔵もの」の歌舞伎の題に「忠臣蔵」が用いられるようになったのが江戸時代後半であり、明治時代に入ると赤穂事件関連の総称として「忠臣蔵」を用いる傾向に拍車がかかった結果、現代につながる「忠臣蔵」の語の歴史事実とフィクションに対する混用が明治後期から始まったと述べた¹⁰。1つの作品の題をもって赤穂事件に関連するあらゆるものの総称とする現象は、外国人の「忠臣蔵」受容でも同じように確認できる。第2章で扱うA. B. ミットフォード(A. B. Freeman-Mitford, 1837-1915)が討ち入り事件について述べる章に付した題である“Forty-seven Ronins”が普及した結果、1870年代以降、現代にいたるまで、赤穂浪人の討ち入りに関する総称として機能していることがそれである。

3. 近代におけるイギリスを中心とした西洋人の「忠臣蔵」受容

本論文でとりあげる19世紀から1915年までの西洋人による「忠臣蔵」受容の概要をまとめたい。

西洋人による「忠臣蔵」への言及として最初に確認できるのは、オランダ人商館長イザーク・ティチングの *Mémoires et Anecdotes sur la Dynastie régnante des Djogouns* (1820) (英語版の題は *Illustration of Japan* (1822)¹¹ である。イギリスにおける「忠臣蔵」受容が本研究の考察対象であるため、以下、英語版の題を書名として用いる) である。しかし、これが継続的な西洋人の「忠臣蔵」受容に直接つながることはなく、ラザフォード・オールコック

(Rutherford Alcock, 1809-1897)ら開国後に来日した外国人たちによって 1860 年代に書かれた旅行記などで改めて言及されるようになるまで、約 40 年間、西洋人が話題にすることはなかった。旅行記でなされた「忠臣蔵」についての記述は散発的なものであったため、後の記述にとって参考となる文献は、イギリスで出版されたミットフォードの *Tales of Old Japan*(1871)に収録された“The Forty-seven Ronins”を待たねばならない。*Tales of Old Japan* は、まずイギリス国内で大好評を得て英語圏では広く読まれ、その後、ドイツ語やイタリア語へも翻訳された。厳密な意味での翻訳は、1875 年に出版された F.V.ディキンズ(Frederick Victor Dickins, 1838-1915)による「仮名手本忠臣蔵」の英訳が初めてだが、1870 年代前半には、すでに在日外国人を读者として発行されていた英字新聞や雑誌にも、ミットフォードの記事を参照した「忠臣蔵」を主題とした記事や「仮名手本忠臣蔵」の梗概などが掲載されるようになっていた¹²。西洋人による日本研究を主眼とした初めての学術団体である日本アジア協会(The Asiatic Society of Japan)の正式な発足が 1874 年であったことを考えると、当時日本に居住していた西洋人の間には、本格的な日本研究に先駆けて、「忠臣蔵」に対する関心がすでに存在していたことが分かる。

こうした西洋人の間で行われている受容に、日本人として最も早くふれたのは、幕末から明治初期にかけて日本から送り出され西洋諸国に滞在していた留学生たちであった。パリに留学していた前田正名(1850-1921)は「忠臣蔵」の翻案である *Yamato*(上演はパリ万博の前後を含んだ 1877-1879 年、出版は前田の帰国後、『日本美談』(1880)として日本語で行われた)を書き、ボストン大学で学んでいた斎藤修一郎(1855-1910)は、美術商であったエドワード・グリーイ(Edward Greey)と共同で為永春水の『いろは文庫』の英訳 *Loyal Ronins*(1880)を発表した。留学生たちに少し遅れて、日本国内の日本人へ向けた書籍や新聞報道でも、日本におけるナショナリズムの高揚や日清戦争、日露戦争を背景に、西洋人の中で「忠臣蔵」が知られている事実が言及されるようになっていった。この時期の日本人による英訳には、井上十吉による「仮名手本忠臣蔵」の翻訳(1894)がある。

この時期には、並行して、日本の歴史や精神について解明した研究書が英語で発表される

ようになっており、「忠臣蔵」はこれらの書籍で日本人の特性を象徴するエピソードとして言及されている。こうした書籍の代表的なものは、バジル・ホール・チェンバレン(Basil Hall Chamberlain, 1850-1935)の *Things Japanese*(1890)やラフカディオ・ハーン(Lafcadio Hearn, 1850-1904)の *Japan: an Attempt at Interpretation*(1905)、また、日本人が英語で著述した新渡戸稲造(1862-1933)の *Bushido*(1899)があげられる。これらの日本論、特に新渡戸の *Bushido* の背景には、新興国である日本を警戒した黄禍論が西洋諸国で蔓延していたことが影響していた。

1902年から日本と軍事同盟を結んでいたイギリスでは、西洋諸国での対日感情の悪化を恐れた日本政府の広報外交の努力も行われた結果、この時期から第1次世界大戦の勃発にかけて黄禍論はあくまでいくつもある世論のうちの1つに過ぎず、激化することはなかった¹³。この時期に、イギリスの詩人たちは翻訳や海外公演を通して日本の演劇へ関心を抱き始め、その最も早い成果として制作されたのがジョン・メイスフィールド(John Masefield, 1878-1967)の *The Faithful: a Tragedy in Three Acts*(1915) (以下、*The Faithful* とする)であった。

4. 19世紀から20世紀はじめにかけての西洋人の「忠臣蔵」受容を考察した先行研究

浄瑠璃、歌舞伎、映画、バレエ、オペラにいたる、多岐にわたるジャンルで主題として利用されてきた「忠臣蔵」は、その受容もまた多くの研究の対象になっている。野田正彰(1986)は、「忠臣蔵」は近世から近代までの「日本国民の心情を象徴する」という意味において「国民劇」と呼ぶにふさわしい現象であるとした。そして、その「日本人との係わり」を分析する方法を、「外からの視野」と「仮名手本忠臣蔵」の「テキストそのものに日本人の好む心情」を読み取るテキストの内からのアプローチという2つに大別できると述べた¹⁴。野田によれば、「外からの視野」とは、「忠臣蔵」を「話題にした人々や社会状況の分析」を行うことであるという。野田の定義に従うと、史実としての討ち入りやそれに基づくフィクション一般がどのように扱われてきたのかを問題とする「忠臣蔵」受容史の研究は、1つめの定義

にあてはまる。野田の定義に補足を行うならば、この2つのアプローチは単独で行われることもあるが、1つの論考で両方行いつつどちらかに重心を置くという場合がより多いと思われる¹⁵。

日本国外での受容は、中国語訳である『海外奇談』と『忠臣蔵演義』の問題¹⁶を除くと、本格的な受容が始まったのが開国以降という関係上、近代以降の受容を取り上げた論考で扱われることになる。しかし、近代の「忠臣蔵」受容の類型をまとめた宮澤誠一(2001a)は、2001年の段階では近代を対象とした研究がなく、近世の赤穂事件や「仮名手本忠臣蔵」自体に関する研究と比較すると、近代以降の受容研究自体が周縁的な分野であることを指摘している。宮澤によれば、その原因は、近代の「忠臣蔵」が派生的なものとして重要視されてこなかったことと、近世においてもすでに多様なジャンルにまたがっていた「忠臣蔵」が映画や海外の文献といった領域にまで広がっていったことにより全体像の把握がより困難であることにあるという¹⁷。この指摘から20年ほどが経過した現在でも、個別的な研究は行われてきたものの、近代の「忠臣蔵」受容をめぐる状況に日本国内では大きな変化は見られず、「忠臣蔵」の受容史全体を俯瞰した取り組みの中では、海外における受容はジャポニズムとの関連において言及されるに留まっている¹⁸。

こうした2000年以降の研究成果において、近代化を進めていた日本で「忠臣蔵」が封建時代の負の遺産として忘れられなかった理由は、多様な解釈が可能であった点にあると指摘されてきた。主君への忠義を貫いた結果、徒党を組んで公儀を恐れぬ行為をしたと幕府の裁きを受けることとなった四十七士の行いは、主君への忠誠の物語や忠義を貫くための自己犠牲の物語としても読むことができるが、主君を裁いたより大きな権力への反抗の物語として読むことも可能だからである。近代以降、「忠臣蔵」の意味がどのように変遷してきたのか個々の事例を示しながら検討した宮澤誠一(2001b)は、こうした多様な解釈の可能性のために、それぞれの研究者や作家・知識人の間で激しく揺れるその位置づけを「意味の争奪戦」と表現している¹⁹。スミスは、江戸時代に三大敵討ちと呼ばれた曾我兄弟の敵討ち、伊賀越えの敵討ちの中で、「忠臣蔵」が唯一、第2次世界大戦後も生き残った理由は、主君

への忠義の物語であると同時に幕府への反抗としても解釈でき、国家主義的にも民主主義的にも物語を利用することができるという両義性にあったと述べている²⁰。

海外における「忠臣蔵」の受容は、まずモリス・ベジャール(Maurice Béjart)の *The Kabuki*(1986)の初演に触発されて 1980 年代後半から少しずつとり上げられるようになり、その後、1990 年代以降に本格的に研究の俎上に上るようになった。研究の動向としては、大きく 2つの方向に大別され、享受者である西洋人の側が「忠臣蔵」の何に注目したのかを問うものと、日本の近代思想史の指標として「忠臣蔵」の受容史を考察対象とし、その中で海外での受容にもふれているものがある。異なる方向性から行われた研究に、速川和男(1999)の論考がある。速川は、横浜中央図書館に 1982 年に受け入れされた医学博士であった亀田威夫の旧蔵書を用い、資料紹介の形で、英語でなされた「忠臣蔵」の紹介や翻訳、翻案、および 1990 年代までの学術書の出版の全体像を通時的に示した²¹。

1つ目の方向性にあたる既往研究には、太田昭子(1991)、アーロン・コーエン(Aaron M. Cohen, 2008)、マイケル・エメリック(Michael Emeric, 2017)らのものがある。「忠臣蔵」の海外における受容を問題にした研究の中で体系的なものとしては最も早い太田の論考は、日本に対する西洋人の関心のあり様を反映しているとして「忠臣蔵」の受容に注目している。太田は、紹介や翻訳を行った人々の関心の所在や意図を踏まえて、開国期から 1915 年までのイギリス人が「忠臣蔵」から理解した「「忠義」の精神の解釈」の変容を明らかにした。さらに、論考の結びとして、近代の西洋人による「忠臣蔵」受容が文学作品と日本の愛国心の象徴という 2つの方向へ分化するという全体像を示し、日本国内の「忠臣蔵」受容が後者の方向性での受容を日本人翻訳者が促したことへと結びついている点に日本国内の受容と西洋における受容との接触を看取り、その重要性を提言した²²。コーエンは、第 2 次世界大戦後に「仮名手本忠臣蔵」が西洋人によく知られるようになった基盤が戦前には整っていたことを示すために、19 世紀から戦前までの西洋における「忠臣蔵」受容をとり上げ、物語自体の多義性や幅広い媒体にのせることができる柔軟性に、切腹によるインパクトが加わっていることが「忠臣蔵」の西洋における知名度を支えているとした²³。日本文学の英訳の

黎明期について考察したエメリックは、英訳の登場によって意味を理解しながら読むことが可能になった日本文学に対する英語圏の読者の扱いの変化の例として、ミットフォードの *Tales of Old Japan* とデイキンズの *Chushingura* の装丁や書評に言及した。エメリックは、この 2 書の例から、以前は解読不能な文字や文章から異質性や不気味さを読み取っていた読者たちが、本文が理解できるようになったため、日本らしさがことさら強調された装丁に異国情緒や美的価値を見出すようになったと指摘している²⁴。広告や書評を用いて読者の期待や価値観を読み取ったエメリックの研究は、日本文学の受容において享受者である読者の価値観が作品の意味を決めていたことを明らかにしている点で、まさに受容理論の枠組みに則った受容研究である。

2 つ目の方向性にあたる研究には宮澤誠一(2001b)の論考があげられる。宮澤は、近代における「忠臣蔵」受容を通時的にとりあげる中で海外での受容にも言及し、それぞれの翻訳や紹介がどのような歴史的背景のもとに行われたのかを明らかにした²⁵。宮澤の研究は、欧化と国粹主義への回帰が繰り返される近代日本の精神史と「忠臣蔵」の受容史とのパラレルな関係を提示して見せたものであったが、その中で宮澤が紹介した、明治初期のナショナリズムの高揚と同時に起った大石神社再建の運動がモヅロベールというフランス人の働きかけを契機としたものであったという例²⁶からは、西洋人の中での「忠臣蔵」受容が日本人の受容に直接影響を与える可能性が示されている。

本研究は、上記の先行研究の中でも特に、日本のナショナリズムの高揚が英語圏での受容に与えた影響を指摘した太田論と、日本の近代思想史の問題として「忠臣蔵」を取り上げ西洋人の参与を例示した宮澤論を踏まえている。これらの先行研究で可能性として指摘されていた日本国内と海外の受容との交響を、ここでは、イギリスと日本の 2 か国間に焦点を当て、より詳細な形でケース・スタディとして検証するものである。

5. 本研究の目的と構成

冒頭で、本研究が 19 世紀末から 20 世紀初めにかけての、イギリスとの交流を背景とし

た「忠臣蔵」の受容を研究したものであることを述べた。本研究が、翻訳だけでなく英語で叙述される「忠臣蔵」の受容全体を問題とする理由は、作品の価値や意味の決定における享受者の関与を重視した受容理論を踏まえた研究として、どのように翻訳されたのかだけでなく、ある社会においてどのように受け容れられたのかという問いにまで研究の射程を広げるためである。

『源氏物語』の英語圏における作品受容として英訳を検証した緑川真知子(2010)は、「受容」の語が用いられた源氏物語研究書題目の例をいくつかあげ、それらの本文中での用例における文脈を参照したうえで、「享受」との用法の区別について述べた。緑川によると、2つの語は受けいれるという基本的な意味合いにおいて同じであるものの、「享受」が「受けいれる側の個々人を念頭に置く場合」により多く用いられる傾向にあるのに対し、「受容」は「既存の受容論を意識して展開する場合」に使用される向きがあるという。緑川はさらに、1960年代以降に文学研究に用いられるようになった欧米の受容理論の定義にも踏み込み、辞書的な意味を要約して、それはすなわち読者中心論であるとしている²⁷。文学研究に受容理論がもたらした変化とは、従来の、作品は作者が制作した時点で固定されて1つの作品となるという作者中心主義から、作品²⁸が読者の手に渡る場やそのコンテキストに注目し、作品を享受する側の読者や社会が作品自体の意味や価値の変化に関与する可能性に目を向けたことにある。

その意味では、一面では享受者である翻訳者がその言語圏における作品の受容を決定づけているという点において、受容研究と翻訳研究とは重なる部分が多く、1970年代に登場した記述的翻訳研究におけるギデオン・トゥーリーが提唱したモデルとの類似は特に指摘される場所である²⁹。トゥーリーが提唱したのは、翻訳者は目標文化における翻訳に対する期待である規範からの影響を逃れることができないという概念で、これは今日の翻訳研究に影響を与え続けている。マリア・ティモツコ(Maria Tymozko, 1999)もトゥーリーのモデルを実際の翻訳にあてはめて考察を行った一人である。ティモツコは、19世紀から20世紀にかけてのアイランドの古典的英雄譚の英訳の分析を通じて、翻訳がイギリスによる

文化の植民地化とアイルランド人のそれに対する抵抗のせめぎ合いの場であったことを示した³⁰。

本研究では、「忠臣蔵」を題材とし、メイスフィールドの戯曲 *The Faithful* の劇評に、四十七士を第1次世界大戦期のイギリス人として読み解く解釈が表れたことを1915年までの「忠臣蔵」受容を通じた1つの結果として設定した。そして、そこに至る「忠臣蔵」の価値や意味の変化を、翻訳者が身を置いた社会文化的背景の中に位置づけて理解することによって「忠臣蔵」の受容を日本とイギリスのある種の共同作業として捉えなおすことを目指している。

本論は、大きく3つのパートに分けることができる。第1章から第3章にかけては、イギリス人が自分たちの文化圏にいる読者へ向けて「忠臣蔵」の受容を促した例を扱い、第4章と第5章では、それに対する日本人の反応と日本国内の「忠臣蔵」の位置づけを反映した英訳を検討する。第6章では、イギリスでの新たな理解とつながるまでを扱う。

第1章では、西洋人によって「忠臣蔵」に日本人の国民性を知るための手がかりとしての役割が付与された過程について、オールコックの *The Capital of the Tycoon*(1863)やそれ以前の記述を中心として考察する。第2章、第3章においては、それぞれ、ミットフォードの *Tales of Old Japan* における記述、デイキンズの「仮名手本忠臣蔵」の英訳を、成立の背景やその反響を用いて分析することによって1870年代における「忠臣蔵」の受容の手段、役割、用途の変化について明らかにする。第4章および第5章では、日本人が関わって西洋諸国での「忠臣蔵」の受容を促した例について、特にイギリスとの関係に注目しながら考察する。第4章では、西洋人の中での「忠臣蔵」受容に対する日本人の反応と、日本国内における「忠臣蔵」の位置づけへの影響について考察する。第5章では、1894年に初版が出版され1911年に大きな改訂を加えて第2版が出版された井上十吉の「仮名手本忠臣蔵」の英訳の成立背景を明らかにすることで、日本が自覚的に翻訳を通して日本文化や国民性を喧伝しようとする過程の具体例を示し、日本の新聞メディアにおける「忠臣蔵」の海外受容に対する反応を併せて検討する。第6章では、1915年に発表されたジョン・メイスフィールド

ドの戯曲 *The Faithful* と、この劇を第 1 次世界大戦の寓意とする解釈が存在した事実から、イギリスにおいて日本人の異質性の象徴であった「忠臣蔵」が翻訳などを通じた約半世紀の受容によって、四十七士がイギリス人を仮託できるほどにまで同質性が見出されるようになっていたことを指摘する。結章では、これらの変化について改めてまとめる。

第1章 西洋人の「忠臣蔵」へのまなざし：開国以前から直後まで

1. はじめに

四十七士の討ち入り事件は、開国後、どのようにして西洋人の注目を集めるようになっていたのだろうか。本章では、「忠臣蔵」に言及した西洋人たちが来日する際すでに抱いていた日本のイメージが、彼らの享受者としての姿勢を規定していたものとして検討を進める。

開国以前にも「忠臣蔵」について述べた西洋人の言説には、1822年のティチングのものがあつたが、既往研究においては、イギリスの初代日本公使ラザフォード・オールコックの *The Capital of the Tycoon*(1863)における記述が、西洋人の開国直後の「忠臣蔵」観を示す資料として重要視されている。太田昭子(1991)は、オールコックの記述が、「忠臣蔵」を「幕末明治初期の日本社会を解読する有力な手がかりの一つ」として見なす1860年代の西洋人の代表的な見解であると位置づけた³¹。また、「仮名手本忠臣蔵」が東洋を代表する作品として西洋人に知られるようになった原因を考察した鶴飼政志(2001)は、桜田門外の変が水戸浪人による大老・井伊直弼への復讐として西洋人の間で捉えられ、浪人たちの多くが切腹して自害を遂げた顛末が彼らにとっては不可解であったことが、同様に理解不能な英雄譚であった「忠臣蔵」へ最初の注意を向けさせたとの考えを示した³²。「忠臣蔵」の19世紀から第2次世界大戦にかけての西洋人による記述をまとめたアロン・コーエン(2008)もオールコックの記述の影響力を認めたが、「忠臣蔵」の内容を紹介したが日本社会での受容全体を解き明かすことはしなかったために西洋人の間に誤解を広めてしまったと述べ、オールコックの「忠臣蔵」への関心の理由については言及しなかった³³。

本章では、1860年代に「忠臣蔵」に言及したオールコックをはじめとする西洋人の旅行記の記述を検討し、約40年ぶりに西洋人に注目された「忠臣蔵」が日本文化のある側面を示す代表例として言及されるようになった、過程と理由について明らかにしたい。まず、ティチング以降、「忠臣蔵」に対する言及が見られなかった時期の関心の推移を明らかにし、ついで、既往研究において影響力が大きかったとされるオールコックの記述において「忠臣

蔵」と関連付けられている桜田門外の変の記述の通時的な変化を追うことにより、オールコックが「忠臣蔵」へ向けた関心をより具体的に捉える。また、イギリス人宣教師ジョージ・スミス(George Smith)の *Ten Weeks in Japan*(1861)、フランス語で出版されたスイス来日外交団の一員ルドルフ・リンダウ(Rudolf Lindau)の *Un Voyage autour du Japon*(1863)における記述をとりあげ、1860年代に「忠臣蔵」をとりあげた記述に共通する観点について考察する。

2. ティチングの著作への反響と日本人の復讐心への関心：1850年代まで

Illustration of Japan は、1779年から1784年までオランダ商館長として日本に滞在したイザーク・ティチングが日本の書籍に基づいて日本の歴史や慣習についてまとめたもので、英語、フランス語、オランダ語の3つの言語で原稿を用意していたものの、1812年に彼が没するまでには出版に至らなかった。生前に出版交渉を行っていたフランスの編集者オーギュスタン＝ニコラス・ネプブー(Augustine-Nicolas Nepveu)が一度は散逸した原稿を取りまとめ、これが2人のフランスで活躍する東洋学者によって整理され1820年にフランス語版が出版され、ロンドンの出版社アッカーマン(Ackerman)がこのフランス語版からの翻訳をフレデリック・ショーベル(Frederic Shorbel)に委託し、英訳は1822年に出版された(以下、これを英語版と呼ぶ)。ティチングの赤穂浪人の討ち入り事件に関する記述の内容や彼の著書の構想については第2章で詳しくふれるため、本節では割愛する。ここでは、この英語版が1822年にイギリスで出版された際に受けた反響、および、イギリスと日本が正式な交流を持つ以前の1840年代から1850年代にかけてのティチングの影響力について確認する。過去に出版された日本関係書籍の焼き直しが盛んに行われたこの時期の主要な日本に関する著作としては、*Manners and Customs of Japanese*³⁴(1841)と *Japan: an Account*³⁵(1852)を用いる。

Illustrations of Japan の出版直後に文芸雑誌に掲載された書評からは、この本が、読者たちの謎に包まれた国であった日本に対する好奇心を刺激し、日本を実際に訪れ国民性や文

化をよく知る人物による貴重な報告として受け止められていたことがよく分かる。例えば、最盛期の1823年には週4,000部以上が発行されていた³⁶大衆向けの文芸週刊誌 *The Literary Gazette* の書評者は、「M.ティチング氏の本は非常に興味深いため、我々の書評も連載にならざるを得ない(M. Titsingh's work is so curious, that it demands a continuation of our notice)³⁷」と、先行するオランダ商館関係者たちの著作よりも非常に高く評価し、4号にわたる大部の書評を連載した。書評は全体として、非キリスト教国である日本とヨーロッパ社会との差異に注目した論調のものが多かった。アメリカ文学の取り扱いをイギリスでいち早く行ったことで知られる、大衆を読者層とした廉価な文芸雑誌 *The Eclectic Review* の書評では、「中国や日本の権力者たちは、自分たちの半未開の国民に比べるとヨーロッパ人たちの方がはるかに力があって洗練されていることを、よく分かっている(the authorities of China and Japan are well aware, that Europeans are at once more powerful and more accomplished than their own semi-civilized subject)³⁸」と、冒頭の部分で述べている。この書評は、ティチングが紹介した数ある歴史事件の中から、早くも赤穂浪人の討ち入り事件に関心を寄せている点が注目に値する。書評者は、本文中で並べて収録されていた、長崎の有力町人と佐賀鍋島藩士との間に起きた同時期の仇討事件である深堀事件ではなく、赤穂浪人の討ち入り事件についての記述を選んでその全体を引用した。そこでは、深堀事件が学問を奨励した綱吉政権下に起きた出来事で、「日本人の獰猛な性質の衝撃的な実例(a striking illustration of ferocious habits of the nation)」を提供するものであると述べている。知識層や富裕層向けの雑誌ばかりでなく、*The Literary Gazette* や *The Eclectic Review* といった大衆的な雑誌にも書評が掲載されていたものの、4つ切り版という非常に大きな型でカラー図版入りの美しい装丁で出版されたことや書評でも豪華本(a luxury book)³⁹としての風格を称賛するコメントが付いていることから、出版社側が想定した読者は富裕層にあったのではないかと考えられる。

しかし、出版直後には好評を博した *Illustrations of Japan* も、日本が開国する頃までには批判的な意見も寄せられるようになっていた。出版から20年ほどが経過した1841年に、

オランダ商館関係者らの著作を匿名のイギリス人著者がまとめなおした *Manners and Customs of Japanese* が出版された。この本は、ロンドンでトラベル・ライティングや旅行案内書を得意分野としていた大手出版社ジョン・マレー(John Murray)から 1841 年に初版が出され、同年にニューヨークのハーパーズ&ブラザーズ(Harper& Brothers)からも出版されており、1852 年、1855 年にそれぞれロンドン、ニューヨークで同じ出版社から再版が相次いでいることから、読者を得ることに成功し、イギリス、アメリカ両国で影響力も持った書籍であったことがわかる。大森実・篠田佐多江によって行われた原典に関する詳細な調査によって、バスク(Busk)というイギリス人女性が先行するヨーロッパ言語による日本関係の 11 の著作からテーマに沿って記述を組み合わせ、1 冊の本としてまとめ上げたものであったことが明らかになっており、ティチングの本もこれら参考文献の 1 冊であった⁴⁰。著者のバスクは、自身の参考文献である *Illustrations of Japan* に対し、典拠の信用性や内容の面白さについて徹底的に厳しい評価を下している。本文中 2 度にわたり、ティチングの本の編集を引き継いだ学者ハインリッヒ・ユリウス・フォン・クラプロート(Heinrich Julius von Klaproth)の言を引いてティチングの日本語能力の不足に言及し、次のように、日本語資料に拠ったとする看板の怪しさを指摘した。

表記された翻訳者のティチングは、ほんの少ししか日本語を知らず、彼の翻訳は実は、日本人の通詞たちの不完全なオランダ語の知識によって作られたのだ

it is considered that the ostensive translator, Titsingh, was very little acquainted with Japanese; that his translation was in fact made by native interpreters with their imperfect knowledge of Dutch⁴¹

また、内容についても決して高くは評価しておらず、「例えば、日本人の執念深い精神や融通の利かない節操といった、いくつかの気質や儀礼の国家的な特異さを非常によく例証している (strongly exemplify some national peculiarities both of mind and manners; for instance,

the vindictive spirit and inflexible constancy of the Japanese)」ためにこの「読めたものではない年代記(unreadable annals)⁴²⁾」からもいくつか逸話を集めざるを得なかったと述べた。

1850年代のイギリスでは、アメリカが積極的に日本に開国の働きかけを行うことに呼応して日本に対する関心が盛り上がり、需要に反して不足している日本に関する情報を、すでに英語訳が出されていたオランダ商館関係者たちの著作の再版や改訂版の出版によって補っていたという⁴³⁾。今あげた *Manners and Customs of Japanese* もそうした書籍の1つである。開国前のイギリス人が抱いていた日本人のイメージの形成に、こうした過去の著作の焼き直しを果たした役割は大きい。*Manners and Customs of Japanese* が、酷評しておきながら不本意にもティチングの本から記事を引用することにした事実は、日本のイメージとして、「日本人の執念深い精神や融通の利かない節操」といった「国家的な特異さ」が欠かせないものであったことを示している。日本文化を描写する際にヨーロッパ文化と比較し、特異性に焦点をあてる手法は、古くは16世紀に来日したルイス・フロイスの頃から行われてきたことで、フロイスの『日欧文化比較』においても、日本人の不可解な性質として、殺人を行うことや死刑執行への日本人の抵抗のなさが複数回取り上げられていた⁴⁴⁾。また、復讐を好むというイメージも、1727年にロンドンで出版されたエンゲルベアト・ケンプファー (Engelbert Kaempfer) の *The History of Japan* の記述にまで遡ることができる。

日本人は、大胆さと呼ぶべきか英雄像と呼ぶべきか私には判じかねる何かを持たないわけではない。その英雄像というのは、彼らが敵に征服されたり圧倒されたりした時や、自分に対する蔑視や侮辱に報いる力がないと悟った時、不屈の禁欲主義でもって、良心の呵責なく自分自身に暴力の手を下すという彼らの命の軽視のことだ。

The Japanese are not wanting something, which I don't know, whether I shall call it boldness, or Heroism; I mean, such a contempt of their life, that when they have been subdued and conquer'd by an enemy, or when they find it out of their power to revenge some scorn or injury done to them, they do not scruple, with an undaunted stoicism, to

lay violent hands upon themselves…⁴⁵

この部分は、引用元が明記されないまま、チェンバレンの *Things Japanese* において、日本人とは「大胆、壮烈、復讐心が強い、名誉に執着する (Bold,…… heroic,…… revengeful,……desirous of fame)」人々であるというより端的な形で、ケンプファーの発言として取り上げられている⁴⁶。チェンバレンがケンプファーの記述を引用したのは、日本人の国民性に関する代表的な西洋人の発言をまとめた箇所であり、日本人イメージの形成におけるその影響力の大きさが分かるだろう。また、オランダ商館員ヨハン・フレデリック・ファン・オーフェルメール・フィッセル(Johan Frederik van Overmeer Fisscher)も、1833年に出版された *Bijdrage tot de Kennis van het Japansche Rijk* において、「英雄劇にあつては、特に国民性として復讐心が強いことがよく現れているが、しかしそれだけでなく常に気高い勇気と関連付けられていることが多い⁴⁷」と、演劇を根拠に、日本では復讐が英雄的行為として称賛されていると指摘した。このフィッセルの記述は *Manners and Customs of Japanese* にも引用され、他にも、1850年代に横行した先行する著作の焼き直しにおいても頻繁に引用されていた。

1852年に出版されたスコットランド人の文筆家チャールズ・マクファーレン(Charles MacFarlane)の *Japan: an Account* は、著者が一度も日本を訪れたことがないまま執筆される、こうした同時期の著作を代表するもので、初版はアメリカとイギリスで出版され⁴⁸、1856年にはイギリスで海賊版まで出された⁴⁹。マクファーレンは、ブスク同様、フィッセルが日本の演劇には復讐心の強さが現れていると述べた部分を引き、日本の演劇は概ね素晴らしいと言えるが、「悪魔のような復讐の熱情や刑罰や拷問を見ることを好む点など、好ましからざる国民性 (the unfavourable features of the national character; such as a demoniacal passion of revenge, and a fondness for witnessing punishments and tortures)」が時々垣間見えると述べており、ここでも演劇の内容に基づいて、復讐を好む日本人というイメージが再生産されていた。また、別の箇所でも、次のような導入を加えて *Illustrations*

of Japan から深堀事件の記述を引用している。

この国民性の大きい欠点—名誉にかかわる問題への過敏とも重なっているが—は、復讐の渴望と狂気であるように思われる。この熱狂はまた、…劇作家たちに大いに主要な題材を提供し、また、よく知られた物語の数々にも描かれているようである。

the great defect of the national character — though coupled with a keen sense of the point of honour, — appears to be the thirst and madness of revenge. This passion, …, also furnishes great staple materials for their dramatists and other writers; and it seems to be illustrated in numerous popular stories.⁵⁰

マクファーレンが日本人の国民性の欠点としてここで言及している復讐への熱狂や名誉への過敏は、1858年に日本を訪れたエルギン卿の使節の一員であったローレンス・オリファント (Laurence Oliphant) の著書 *Narrative Of The Earl Of Elgin's Mission* (1859) においても言及されている。オリファントは、日本人はほとんどの点で優れているものの、「彼らは、悪名高いほど復讐心が強く、迷信深く傲慢で、自分の名誉に過剰に固執し、しばしばこれを守ったり不名誉を報いるために、残酷になったり容赦がなくなったりもする。(They are notoriously vindictive, superstitious, haughty, exceedingly tenacious of their honour, and often cruel and unsparing in their mode of protecting or revenging it.)⁵¹」と述べた。オリファントの本は、のちにアーネスト・サトウ (Earnest Satow) が感銘を受けて日本赴任を志すようになったことで知られているが、出版された当時、3,150部の初版がただちに売り切れたほど⁵²、イギリスで非常によく読まれた。

本節では、赤穂浪人の討ち入り事件を日本人の執念深さの象徴的な例とする解釈が早くから存在したことや、1840年代から1850年代まで、実際に日本を訪れたことのない著者によってオランダ商館関係者たちの著作のまとめ直しが繰り返し行われたことによって、日本人が復讐や名誉に執着するというイメージが定着していたことを明らかにした。また、

この時すでに、国民性を演劇や物語から読み取る行為が批判なく、当然のものとして受け入れられていたことにも注目したい。本節でとりあげたような著作を通して日本に関する知識を得たオールコックやスミスが、どのような経緯を経て「忠臣蔵」に注目するに至ったかについて、次節以降で検討する。

3. オールコックの「忠臣蔵」の記述

ラザフォード・オールコックは、1844年から1859年まで福州、上海、広東といった中国の開港都市の領事を歴任したあと、1859年に日本総領事として着任し、公使へと昇格し、1864年まで江戸および横浜に滞在した⁵³。本章でとりあげる「忠臣蔵」に関わる記述は、彼が一時帰国中の1863年にロンドンで出版された2巻本の *The Capital of the Tycoon* の上巻、第17章の1860年3月24日に起きた、水戸藩浪人たちによる大老井伊直弼の暗殺事件である桜田門外の変の詳細な説明の後に、章をまとめる形で配されている。オールコックがなぜここで「忠臣蔵」に言及したのかについては、先行研究においていくつか仮説が示されている。佐野真由子(2003)は、事件から月日が経過し、全容を知るようになったオールコックが「日本人の死生観」について考えるに至り、以前から知っていた、公使館のごく近くに埋葬されている「忠臣蔵」を思い出したとし⁵⁴、コーエンは、領事館が四十七士の墓地がある泉岳寺の近所であったこと、1861年に大坂で歌舞伎を鑑賞した経験がオールコックの記述の契機となっていたのではないかとオールコックの個人的な体験に執筆の動機を求めているが、桜田門外の変の全容の把握よりも前に「忠臣蔵」のことを知っていたとする点で両者の見方は共通している。本節では、*The Capital of the Tycoon* における「忠臣蔵」に関する記述の内容を確認したあと、桜田門外の変についてのオールコックの記述を2つ確認し、オールコックが「忠臣蔵」へ向けた関心についてより具体的に理解したい。

桜田門外の変に関して、オールコックは1860年4月2日付で外相ジョン・ラッセルへ詳細な報告をもたらし、1861年には、ラッセルへ知らせた内容をもとに *Edinburgh Review* に掲載された“*Japan and the Japanese*”という論考の中で、事件に関するあらましをまとめたもの

を発表している。これらの時点では、赤穂浪人の討ち入り事件に関する言及はまだ見られない。事件から3年後の1863年に出版された *The Capital of the Tycoon* 第17章の記述では、浪人たちの襲撃の様子や切腹、さらに事件の真相に関するオールコックの解釈など、あとでとりあげる *Edinburgh Review* の記事の内容をほぼそのまま踏まえ、唯一異なっているのは、以下の書き出しに続いて、「忠臣蔵」への言及を書き加えている点である。

奇妙な歴史だ—真実なら奇妙だし、でっち上げだとしてもそう変わりない。後者の場合、英雄像や勧善懲悪の一般的な概念は、芝居の演目や絵本、そしてよく知られた物語の基礎を形作る数多の伝説や慣習の形で例示されているのだから、なおさらよく例証されているかもしれない。

A strange history — strange if true, and scarcely less so if invented. Not less but more illustrative, perhaps, in the latter case, of the popular idea of heroism and poetic justice, as these are, moreover, exemplified in a hundred legends and traditions, which form the staple of their theatrical pieces, their picture-books, and their popular tales.

この書き出しからは、オールコックが「忠臣蔵」に言及する理由が、「英雄像や勧善懲悪の一般的な概念」つまり日本人の善悪観を、従来の日本関係の著作で行われてきたように、芝居や物語から分析して示すことにあったことがわかる。彼が説明した「忠臣蔵」の討ち入り事件のあらましは次のようである。大君の「評議会(Council)」の1人に恨みのある小大名が復讐に失敗し、そのまま自邸に戻って切腹して果てた。この際、大名は、秘書官に自分の血に塗れた短刀を渡しながらか、今際の願いとして自分の無念を晴らすよう命令した。大名の仇によって城や財産は奪われ、彼の忠実な47人の家臣団も解散させられたが、彼らは機が熟すのを待ち、深夜に強襲し、亡き主君の仇の首を打って復讐を果たすや、切腹した。これに続けて、日本人の英雄像に関するオールコックの考えという、書き出しで示されたこの記事の本題が述べられる。オールコックは、西洋人としては犯罪にしか見えない行為を大人た

ちが諳んじ、持てはやしていることや、それを聞きながら子供たちが育つことを考えると、大老の暗殺事件や公使館の襲撃が発生する土壌がすでに整っているように思われると述べ、西洋との善悪の基準の違いを見出していた。前世紀の歴史事件である「忠臣蔵」がいまだに英雄譚として人々の心に生き続けているのを見出したオールコックの衝撃は、次のように記されている。(下線は稿者。)

彼らは全員、これがそうだと説明を受けた江戸のある墓地に埋葬された。彼らは今日まで、勇敢で忠実な日本のあらゆる者たちの心に、真の英雄像の型として生き続けているのだ！この物語が私に対して物語られたように…

They were all buried in one cemetery in Yeddo, which was pointed out to me, and they live to this day in the hearts of all brave and loyal men in Japan as types of true heroism!

As this story was recited to me,…

下線を施した部分からは、討ち入り事件から 150 年以上経過しても浪人たちの墓地が忘れ去られていないこと、人々が自由に事件についての物語を語るのをオールコック自身が見聞し、体験したことが、コーエンが指摘するように、日本の英雄像の典型や善悪観の基礎として「忠臣蔵」に注目したきっかけであったことが分かる。そして、「この物語が私に対して物語られた」という部分は、オールコックの「忠臣蔵」に関する記述はティチングの *Illustrations of Japan* からではなく、日本人が話して聞かせた内容をもとにしたものであったことを示している。*The Capital of the Tycoon* の本文中には *Illustrations of Japan* に言及している例がいくつか見られるため⁵⁵、オールコックがティチングの説明を読んでいなかったとは考えにくく、ここでは、オールコックが書籍を通じた知識よりも実体験の方を優先したと考えられる。

オールコックが桜田門外の変を通して西洋人と日本人との善悪観の違いを意識したのはいつだったのであろうか。ラッセルへ送られた第一報の時点では、オールコックは、井伊

直弼が死亡したことや事件の詳しい事情についてはまだ聞かされていない。この手紙において、オールコックは、浪人たちは自己犠牲をいとわず、覚悟を決めていたが、かと言ってがむしゃらに暗殺を行ったわけではなく、雪が降る薄暗い朝の江戸城外という、襲撃の時間や場所などの選択から、戦略的な犯行であったと分析している。そして、事件後、捕縛されそうになった2人の浪人が「ハラキリ」して果てたと述べた。このとき、オールコックは、「ハラキリ」について、「法のためといえども、立派にこれをやり遂げた者に邪魔だてしたり干渉したりしてはならない、名誉にかかわる事柄である (it being a point of honour never to interrupt or interfere, even for the ends of justice, with a man so honourably engaged)⁵⁶」と定義している。この時、オールコックの関心は、犯人が水戸浪人であったことから、事件が内戦に発展するのかどうかという点にあり、桜田門外の変と外国人襲撃とは関連付けられていない。

事件から1年以上経過し、オールコックの事件への理解も深まったあとに発表された *Edinburgh Review* の記事⁵⁷では、自己犠牲をいとわず用意周到という浪人たちの像には変化がないが、ラッセルへの手紙と比較すると、襲撃の描写はより具体的かつドラマチックなものになっている。そして、西洋人には理解しがたい日本人の英雄像や善悪観について考え始めたのも、ラッセルへの手紙以降この記事が書かれるまでの1年間ほどのことではなかったかと考えられる。この記事において、水戸浪人たちの犯行は「彼らの主君の恨みに報いるため(to avenge the wrongs of their chief)」であり、この事件の結果、水戸公は権力の座に返り咲き、所領も取り戻した、という事件の真相に関する考えも述べられ、オールコックが事件を仇討として理解し始めたことが伺える⁵⁸。ラッセルへの報告でもふれられた2人の浪人の「ハラキリ」について、この記事では「襲撃がどれほど悪質なもので、こちら(稿者注:法律)も犯人の自殺によって十分に両立が可能で、さらに、2本差しを許されている者は誰も否定することができない特権なのである(These are held to be sufficiently secured by the self-immolation of the criminal, however heinous the offence, and it is a privilege to be denied to no one entitled to wear two swords.)」と、犯罪を帳消しに

する効果がある点が強調され、批判的な調子を含むようになっていく。オールコックは、後日、幕府の役人から犯人たちが拷問に耐え兼ね全てを白状したと聞かされたが、幕府が伝える情報に反して、庶民の間には、犯人たちは勇敢にも最後まで口を割らなかったと彼らを英雄視した見方があったことも、オールコックは判じ絵(ingenious rebus⁵⁹)などを通して認識していた。計画的に暗殺を行った犯人たちが切腹で罪を帳消しにしたという、批判的な方向へオールコック自身の見解が定まってきたこの段階では、民衆が暗殺を批判するどころか持てはやしていることへの違和感が彼にはなおさら強く感じられたことであろう。この違和感がオールコックに日本人の英雄像や善悪観について考えさせ、そうした中で泉岳寺で四十七士の墓の案内を受けた実体験が、国民性を反映する、日本人の心に根付いた物語として「忠臣蔵」を認識させ、話題として取り上げることへ結びついていったのではないだろうか。

4. 1860年代の「忠臣蔵」への言及：ジョージ・スミスとルドルフ・リンダウ

オールコックと同時期に「忠臣蔵」に言及した西洋人たちが「忠臣蔵」への関心を持ったのは、一体、何を契機にしたものだったのであろうか。本節では、イギリス人宣教師スミスの *Ten Weeks in Japan* とスイス外交団の1人リンダウの *Un Voyage autour du Japon* の2つの記述を検討する。

スミスは、1849年から1865年まで英国国教会の司教および中国における宣教師として赴任しており、布教のため、1860年に日本を訪れた。彼は、滞在中の長崎で街歩きの中で、江戸から訪れた役者の一座のために広場に仮設の舞台が立ち、日本の中流層と見受けられる大変多くの人でにぎわっているところに出くわした。この時スミスは、友人から説明を受けながら「忠臣蔵」の舞台をしばらく観劇し、彼が理解した内容を本文中に詳しく述べ、観劇後にティチングの記述を確認したと記している⁶⁰。スミスの感想からは、彼が日本人にとって復讐と切腹が重要な文化の一部であることを、この観劇した「忠臣蔵」を通して実感し、ティチングの記述は彼の理解を深めるための補助的な資料として参照され

たことがわかる。観劇をする際、スミスはこの作品が「日本の国民的演劇の中で最も人気のあるシェイクスピア悲劇の一つ(one of the most popular Shakspearian tragedies of the national drama of Japan)」であると説明を受けていた。スミスは、浅野内匠頭の切腹の場面に特に紙幅を割き、衣装、儀式の進行、家臣たちなど参列者の反応などを細かく描写し、「ヒーローの滅びの運命のために、押し黙った群衆たちの強烈な同情がかきたてられていた(intense sympathy was excited in the silent crowds on behalf of the fallen fortunes of the hero)」と、舞台を見る観客たちが切腹する浅野内匠頭に非常に同情的であることに目が向けられている。スミス自身は四十七士が行おうとする討ち入りを「血みどろの計画や執念深い復讐(sanguinary plots and vindictive retribution)」だと捉えていたが、復讐を行う彼らが日本では人気の高い英雄であることから、「復讐や、命には命で報いるというのが日本人の善悪観の本質に溶け込んでいるのだ(Revenge and a life for a life enters into the very essence of poetical justice among the Japanese)」と、芝居の内容から日本人の善悪観を観察していた。また、ティチングの討ち入り事件に関する記述を引用したあと、この事件が「日本人の生活の素晴らしい解説(a remarkable exposition of the national life of the people)」を含んでいるとも述べているが、「忠臣蔵」を通してスミスが考えた日本人の生活が決して日常の全般的な内容を指すのではなく、非キリスト教的な日本の習俗の一つである切腹のことを指していることが、桜田門外の変などにふれるこのあと続く記述によって分かる。

オールコックの *The Capital of the Tycoon* と同年の 1863 年に出版された、スイスの外交官リンダウの *Un Voyage autour du Japon* において、「忠臣蔵」は、日本人がいかに名譽を重視するかを表す代表例として言及されている。リンダウが江戸から川崎へと向かう途中、ある通行人が脱帽して顔を伏せておかなければならないところを、リンダウの一行の方を見てしまい、それを知った供の役人がこの通行人をしたたかに打ち据えるのを見て、リンダウは、これほど礼儀作法に固執する国もないと驚き、「高位のものへの敬意は日本の信仰である(Le respect dû à la noblesse est la religion du Japon.)」と述べた。そして、こ

の信仰は「不寛容で狂信的(intolérante et fanatique)」であるために「殉教者や犠牲者(ses martyrs et ses victimes)」を生むのだと続け、日本の歴史は、自分の藩への敬意に殉じる侍やその犠牲になる者のエピソードに事欠かないとして、この文への注として「忠臣蔵」が言及されている。リンダウの注でまとめられた討ち入り事件のあらまは、次のようである。ある高位の役人が同僚から侮辱を受けるや否や、宮廷から自邸へと帰り、遺言をまとめると、家族が集まる中自決した。彼の友人たちは、彼の仇を討つことを約束し、ある夜、侮辱した役人の邸を強襲したのち、役人およびその臣下を皆殺しにし、復讐の証拠として仇の首を亡き友の墓に供えたと、翌日、供の墓前で切腹をして果てた。そして、この事件を賛美する人々の心に「極限まで発達した個人の名誉感(un sentiment de l'honneur personnel extrêmement développé)」が息づいていると述べた。日本人の攻撃性が名誉を傷つけられたことに起因するのだとする考えは、当時リンダウだけが持っていたものではなく、浪人たちによる度重なる外国人やイギリス公使館への襲撃の理由として、日本に滞在する外国人たちには広く共有されていた考えだったようである。1860年に来日し、神奈川に到着するやすぐにイギリス公使館への襲撃の話を書くこととなったスコットランド人植物学者ロバート・フォーチュン(Robert Fortune)も、イギリスで出版された著書 *Yedo and Peking; A Narrative of a Journey to the Capitals of Japan and China*(1863)において、在日外国人には外国人襲撃の納得できる原因を説明できる者は誰もいなかったと、当時の不安な様子について述べている。フォーチュン自身は、名誉を傷つけられた場合、「自負があり復讐心の強い人々である日本人なら、間違いなく復讐を行うだろう(the Japanese, who are a proud and revengeful people, would most certainly have their revenge)⁶¹」と考えており、特に帯刀を許された高位の人々は、自分の代で叶わなければ、家臣や子供たちに復讐を託し、報いるべき相手が分からなくなっている場合は他の関係ない外国人たちにとぼちりが来るのだと推察していた。フォーチュンはまた、桜田門外の変にもふれ、オールコックと同様に、主君が幕府から受けた処分に対しての水戸藩士たちによる復讐として事件を読み解いており、在日外国人の間には、当時頻発した攘夷や暗殺は単なる攻撃ではな

く、日本人の国民性に起因する復讐なのだという共通理解が形成されていたと思われる。

5. おわりに

本章では、ティチングによる最初の紹介から、1860年代以降のイギリスにおける本格的な「忠臣蔵」受容が始まるまでの約40年間にわたる関心の推移をまとめることにより、イギリスにおける「忠臣蔵」への関心が、いつごろ、どのように形成されたのかという問題を検討した。ティチングの *Illustrations of Japan* に対する出版当時の書評からは、赤穂浪人の討ち入り事件が復讐のためには残虐になるという日本人のステレオタイプの好例になり得た可能性が確認できた。しかし、1860年代に「忠臣蔵」について述べた著者たち、特に本文中で言及しているオールコックやスミスは、ティチングの記述ではなく自身が見聞した内容によって「忠臣蔵」を理解していた。

1860年代に西洋人が「忠臣蔵」へ関心を寄せていくことにより直接的な影響を与えたのは、1840年代から1850年代までの日本に関する著作で繰り返し再生産されてきた、日本人は復讐を好み名誉への執着が強いというステレオタイプの存在と、演劇や物語から国民性を導き出すという、当時実践されていた文化の観察手法であったように思われる。西洋人たちは、攘夷や幕府要人の暗殺といった事件によって危険を感じ、身の安全を確かめるために、日本人が攻撃的になる原因について考える必要があった。その際に、自分たち以前に日本を訪れた他の西洋人の書物を通じた知識よりも、自分自身が日本に滞在することによって得ることができるようになった実体験や日本人から直接聞いた話の方が、国民性を考える確かな題材としてより大きな意味を持ったことは想像に難くない。「忠臣蔵」を通じて日本を取り上げることは、オールコックら以降にも、西洋人たちや時に日本人にも常套的に用いられた。

次章では、日本人が親しむ物語によって日本社会の内面を提示するという従来から行われてきた手法を踏襲し、観察者としての著者をできる限り顕在化させないことでこの手法を徹底的に実践したミットフォードの *Tales of Old Japan* を通じて「忠臣蔵」がイギリス人

読者へどのように受容されたのか検討する。

第2章 A.B.ミットフォード *Tales of Old Japan* 所収 “The Forty-seven Ronins”

1. はじめに

1871年に出版されたミットフォードの著書 *Tales of Old Japan* の冒頭を飾った“The Forty-seven Ronins”は、四十七士に関してはすでにオランダ人商館長ティチングや初代日本公使オールコックらの記述があったにもかかわらず、発表以降少なくとも20世紀前半までは西洋における基礎文献であり続けた⁶²。

著者であるミットフォードは、1837年にロンドンに住む、ノーサンバランドに起源をもつ貴族の家庭に生まれ、エリートコースの王道であったイートン校とオックスフォード大学クライストチャーチを卒業した後、1858年よりイギリス外務省に勤務した。サンクトペテルブルクと北京での勤務ののち、1866年から1870年まで二等書記官として日本の英国公使館に勤務し、日本公使ハリー・パークス(Harry Parks)のもと、同僚かつ日本語の師であったアーネスト・サトウ(Ernest Satow)とともに公使館の業務ならびに日本研究に励んだ。*Tales of Old Japan* に取り組んだのは1867年末頃からのことだが⁶³、1868年11月頃にはすでに赤穂浪人にかかわる部分は完成しており⁶⁴、ミットフォードの帰国前年である1869年からは自身の父やサトウを通じて本の出版に先駆けて3編を発表できる雑誌を探しはじめ⁶⁵、帰国後の1870年夏からイギリスの格調高い文芸雑誌 *Fortnightly Review* 誌上において“The Forty-seven Ronins”を含む3編が発表された。1871年1月から2月にかけて、*Tales of Old Japan* の初版がイギリスの大手出版社マクミラン(McMillan)から出版された。

ミットフォードの四十七士紹介の記事は、*Tales of Old Japan* の構想について語った序文に当たる部分と、泉岳寺にある四十七士の墓を訪ねた際の様子描写と討ち入り事件のあらましという、大きく分けて3つの内容から構成されている。歴史事件ばかりでなく現在の泉岳寺についても筆を割いている理由についてはいくつか指摘がなされている。1915年までの英語圏における討ち入り事件の受け止め方について考察した太田昭子(1991)は、「現代(ここでは明治維新时期)との連続性・関連性の緊密さを読者に印象づけるための手法⁶⁶」

であると捉え、ミットフォードと同じ時代を生きる広い読者を意識した技法であったとの見方をとる。一方、ミットフォードの伝記を新たにまとめたロバート・モートン(Robert Morton, 2017)は、良きにつけ悪きにつけ、高輪の英国公使館から目と鼻の先の距離にある泉岳寺は、書き手であるミットフォードの想像力を引き付けるものだったからこそ、“The Forty-seven Ronins”を著書の幕開けとして選んだのだとしている⁶⁷。英国公使館から非常に近いという地理的な条件により泉岳寺がミットフォードを含めた公使館員たちにとって特別に親しみのある場所であったことは想像に難くない。泉岳寺に関する描写が読者を意識した技法ではなく、むしろ著者であるミットフォードの思い入れであったのであろう。研究史上、ミットフォードの紹介は、西洋人による初めての体系的な赤穂浪人の討ち入り事件の紹介であったと位置づけられ、その後の認識を形成した記述として重要視されてきた⁶⁸。本章では、まず、ミットフォードの構想や彼が用いた方法を踏まえ、その先駆的实践者としてティチングの存在を指摘する。そして、ティチングを含めた先行する赤穂浪人の討ち入り事件についての記述の内容の比較を行ったあと、*Tales of Old Japan* が出版された際に新聞や文芸雑誌に掲載された書評を検討し、ミットフォードの記述がイギリスでの「忠臣蔵」受容に与えた変化について考えていきたい。

2. ミットフォードの方法

Tales of Old Japan に着手したことを知らせる 1867 年 11 月 14 日付けの外務省事務次官エドワード・ハモンド(Edward Hammond)に宛てた手紙には、熱意をもって取り組むミットフォードの姿が次のように記されている。

このところ私は、旅行者たちをたいそう驚かせ、彼らが本でひどく雑然と描いた作法や慣習に、全く新しい光を当てる古い日本の伝説を日本語の資料から集めることに忙しく取り組んでいます。

I am busily engaged at present in collecting from native sources a quantity of legends of

Old Japan which throw an entirely new light upon the manners and customs which have astonished travelers so much and of which they have made such an egregious mess in their books.⁶⁹

この手紙から分かるのは、既存の旅行記の様式や慣習に対する踏み込みの甘さを物足りなく感じたミットフォードがその不足を補うと考え、「日本語の資料(native sources)」を用いて物語を採集したということである。

驚くべきことに、資料を扱い始めた時、ミットフォードの日本到着からはまだ1年ほどしか経過しておらず、同年3月の段階ではまだ日本語が満足にできないと父への手紙で吐露しており⁷⁰、ミットフォードがいかに短期間のうちに日本語を習得していったかがよくわかる。ミットフォードは、父への手紙の中で *Tales of Old Japan* の進捗状況をたびたび報告しており、手紙に同封して草稿を送り、家族に感想を求めていたようである⁷¹。こうした手紙の中で、ミットフォードは送った草稿を「翻訳(translation)」と呼んでおり、ハモンドへの手紙において言及された「日本語の資料(native sources)」からミットフォードが英訳したものが *Tales of Old Japan* を構成していると考えられる。この試みは、ミットフォードの「気味が悪いくらいに語学力に長けていた(an uncannily brilliant linguist⁷²)」と評される日本語能力を抜きに実現されることは不可能であった。

ミットフォードの「翻訳」の過程の詳細には、いまだ不明な点が多い。ガトキン(F. T.A. Ashton-Gwatkin, 1956)は、*Tales of Old Japan* をテーマとした The Japan Society of London の会合において、ミットフォードの抜きんできた日本語能力をもってしても、日英・英日辞書もない時代に日本人の助けを借りることなしに翻訳を行うことは不可能であったと述べ、ミットフォード本人は言及していない公使館付きの日本人通訳などが補助したに違いないと述べている⁷³。さらに、ミットフォードの日本での活動についてまとめたモートン(2013)によれば、ミットフォードの手法は、彼の日本人教師に翻訳するための物語を書かせ、それを今度は彼自身が英語に翻訳するという形を取ったという⁷⁴。 *Tales of*

*Old Japan*の全体に関わる執筆過程についてミットフォードが詳細に手順を述べた記述は管見の限りではないが、彼がまだ北京の公使館に勤務していた1866年8月24日付けの父への手紙の内容からは、モートンの述べている手法は *Tales of Old Japan* 執筆の前からミットフォードが構想していたことがわかり、モートンの指摘に説得力を持たせる。

私は時おり、中国の様々な様式や慣習、儀式や式典について論文を書かせるために教養ある中国人を雇いました。これらの論文は疑い深い中国人の批評家に書評をさせ、今では信頼に足る正確なものだと確信を持っています。現在それらを翻訳中で、いつか活用する機会もあるかもしれません。

I employed a learned Chinese some time since to write a series of original papers for me upon different manners and customs, rites and ceremonies of the Chinese. These I have had reviewed by another jealous Chinese critic, so I can be sure of having trustworthy and accurate documents. I am now translating them, and may perhaps some day make use of them⁷⁵.

この中国に関する原稿は、1866年の横浜で発生した大規模な火災によってミットフォードの自宅が燃えた際に焼失してしまったことが、1866年12月1日付の手紙において語られている。モートンは、この火災についてもふれており、原稿の焼失によって、ミットフォードの日本に関する著作によって名を成すことへの願望は、なおさら高まったのではないかとしている⁷⁶。

また、ミットフォードが翻訳する「日本語の資料」を提供する人物の存在が本文中にはっきりと確認できる例が、*Tales of Old Japan* の vol.II に収録される、1868年にミットフォードが実際に目撃した滝善三郎の切腹に関する記事の中に見える。ミットフォードは、日本のハラキリの儀式は地方によって様式が微妙に異なるが、江戸時代に実際に行われていた儀式についての覚書によって、これが司法に属するものであることが立証できるとい

う。そして、この覚書は、「彼自身が目撃したことについて語るができる、ある日本人によって私のために書き出された文書から、私が翻訳を行った。(I translated it from a paper drawn up for me by a Japanese who was able to speak of what he had seen himself.)⁷⁷⁾」というものであった。これは1つの記事に引用の形で挿入された2、3ページほどの覚書の典拠が明かされているに過ぎないが、日本語原稿を提供し、ミットフォードの執筆を補助する日本人の存在があったことを裏付ける例だといえるだろう。

収められている他の物語と同様、“The Forty-seven Ronins”についても、泉岳寺で閲覧した文書以外は出典が明記されておらず、また序文などでも何をテキストとして用いたのか明かされることはない。しかし、講談などの義士外伝によって作り上げられた逸話が“The Forty-seven Ronins”の中に散見されることから、歴史的事実がフィクションによって肉付けされた、当時の日本人に一般的に親しまれていた義士としての四十七士の物語が翻訳の原典となったことは確かである⁷⁸⁾。

3. ミットフォードの構想の先駆者ティチングの取り組み

ミットフォードは、日本赴任中、この翻訳作業に継続的に取り組んだ。1869年6月26日付の、ミットフォードが父に宛てた進捗を知らせる手紙の一つには、「私の目標が、日本人自身が描いた日本社会の像を見せることにあることは御存じでしょう。(You know that my object is to show a picture of Japanese society drawn by the Japanese themselves.⁷⁹⁾」と、翻訳作業の先に彼が目指していたものが明かされている。ミットフォードの *Tales of Old Japan* 執筆の動機が、先行する旅行者による記述への彼の批判的な姿勢が根底にあったことは先に述べた通りである。さらに、彼は、父への手紙においても、しばしば、自分が現在取り組んでいるような著作はこれまでにないものであるという自負を述べている⁸⁰⁾。

しかし、実は、ミットフォードよりも半世紀以上前に、同様の構想をもって日本社会について述べられた著作が執筆されていた。第1章でも言及した、ティチングの *Illustration*

*of Japan*である。ティチングの構想は、1809年2月3日付でロンドンに住む言語学者で、当時大英博物館に勤めていたオリエンタリストのウィリアム・マースデン(William Marsden)に宛てられた手紙のなかで、熱をもって語られている。この中でティチングは、様々な困難があるけれども、将軍治下の年代記を5月の中頃までにはひとまず「訳し」終えたいという文面に続けて、次のように述べる。

ヨーロッパでほとんど知られていないある国の慣習、特質、そして精神に関する考えを正しく形成するためには、私は、私自身が微に入り細に入り説明するよりも、彼ら自身の装いのまま彼らを見せるのが良いように思う。

To form a proper idea of the spirit, the character, and the customs of a Nation, almost unknown in Europe, I deemed it preferable to represent them in their own dress, rather than to enter myself into particular details.⁸¹

ティチングの年代記の英語版を改訂し、新たに出版したタイモン・スクリーチによれば、ティチングはこのとき、オランダ語、フランス語、英語の3つの言語で時を置かずしてこの本を出版することを構想していたという⁸²。しかし、ティチングは志半ばで1812年に亡くなり、ジャン＝ピエール＝アベル・レミュザ(Jean-Pierre-Abel Rémusat)⁸³とクラブロートという、フランスで活躍していた2人の東洋学者が編集の作業を引き継ぎ、1820年にフランス語版が出版され、このフランス語版に基づく英語訳が1822年にロンドンで出版された。*Illustrations of Japan*は、観察者としてのティチングが前面に出てきて自分が見た日本について語るというものではなく、日本語の資料に基づく、日本の歴史や、葬式や結婚式など習俗に関する短い論文が収録されている。

本をまとめるにあたってティチングが用いた資料については、フランス語版を出版したネプブー、編集したレミュザによる序文、マースデンへの手紙などでの題や著者への言及に基づいて、タイモン・スクリーチがその大部分を特定している⁸⁴。しかし、赤穂浪人の討ち

入り事件の記述については、儒者・林鶯峯の編による16世紀までの歴史をまとめた『日本王代一覽』、17世紀中頃に起きた由井正雪の乱に取材した実録『慶安太平記』と、1713年から1751年の出来事を記した馬場文耕の『近代公実嚴秘録』との間を埋めるものがなく、典拠を特定することは難しい。しかし、スクリーチはまた、ティチングの言語能力を考慮した江戸や長崎の友人たちが注意深く選んだ結果、ティチングの手元に集まったのは、分かりやすい口語調で端的にまとめられた実録が多かったのではなかったかとも指摘しており⁸⁵、赤穂浪人の討ち入り事件に関しては、こうした実録の1つに拠ったものだったと、ここではひとまず措定しておきたい。一方で、ティチングの日本語能力に対する不信がのちに批判の対象になったことは第1章でも確認した通りだが、ティチングを批判したバスクの根拠は、出版直後からティチングの死後に編集作業を引き継いだクラブロートの言であった。クラブロートのフランス語の著作を確認したスクリーチは、ティチングは日本語も中国語もほとんど理解せず、ほとんど長崎の通詞たち、特に榎林栄左衛門と吉雄幸作にほとんど頼って執筆したとまでクラブロートが述べたことを報告している⁸⁶。

ティチングが用いた資料が、彼が宣言しているように収集した日本語の書物であれ、クラブロートの言うように通詞たちによる説明であれ、著者であるティチングが代弁するのではなく、日本人自身が語る日本の姿を西洋人に提示したという意味で、*Illustrations of Japan* はミットフォードの *Tales of Old Japan* の先駆者であったと言っていい。しかし、ミットフォードはティチングに言及することは全くなく⁸⁷、そうした意識は全くなかったのではないかと思われる。それだけでなく、*Tales of Old Japan* の本文や注には、先行する外国人による日本文化や国民性を扱った書物としては、たった1例、オールコックが浅草について述べた *The Capital of the Tycoon* の文章が言及されるほかは⁸⁸、ケンプファー、C.ツンベルク (C. P. Thunberg)、P.シーボルト (P. F. B. Siebold) といったティチングを含むオランダ商館関係者、オズボーンやローレンス・オリファントといったイギリス人旅行記作者たちに関する言及は見られない⁸⁹。そして、この1例のオールコックへの言及も全く肯定的なものではない。オールコックは浅草の寺について、「ゴシック式教会なら側廊にあたる (At the side

which would correspond to one of the aisles, in a Gothic church)⁹⁰」敷地内で、着飾った女性の人物画がたくさん飾られていたので案内人にきいたところ、それは江戸で最も名高い遊女たちの似顔絵で、彼らを祝して年に一度こうして飾られるのだと *The Capital of the Tycoon* で述べている。これについて、ミットフォードは、「(稿者注：オールコックの) この発言は、日本語の不完全な知識が従来 of 日本旅行者にもたらした多くの奇妙な誤解の一つにすぎないことは確かだ。(it is probable that the statement is but one of the many strange mistakes into which an imperfect knowledge of the language led the earlier travellers in Japan.)⁹¹」と書いており、執筆構想から一貫したミットフォードの旅行者の記述に対する批判的姿勢がよく表れている。ミットフォードにとっては、*Illustrations of Japan* もこうした批判対象の一つに過ぎなかったのであろう。

両者の決定的な違いは、ティチングが、彼が用いた資料からも分かるように、日本の内面を伝える題材として歴史を選択した一方、ミットフォードは、日本人に親しまれている物語や伝説を選んだという点にある⁹²。このミットフォードの選択が *Tales of Old Japan* の成功をより確かなものにしたのかもしれない。*Illustrations of Japan* に寄せられた *Eclectic Review* の書評には、「將軍たちの年代記は、面白みがないということでは決してないけれども、法律や慣習、日本人の性格についての直接的な描写をほんの少ししか含んでいない(The history of the Djogouns, though to be far from uninteresting, contains but little in the way of direct illustration of laws, customs, and character of the Japanese)⁹³」と評され、この年代記の部分から得られるのは「付随的な情報(incidental information)」であると述べられていた。

4. “The Forty-seven Ronins”の内容の新しさ

先述したように、日本人に親しまれた英雄像として四十七士にふれた外国人はミットフォードが初めてではない。19世紀の西洋人にとって旅行は大きな関心事であり、1860年代以降に外国人の国内旅行が制限付きで可能になった日本は読者の好奇心を刺激する場所で、攘夷のための外国人襲撃事件や桜田門外の変など、浪人たちによる事件が赤穂浪人の

討ち入りと結びつけられて論じられることも少なくなかった。前節でもとりあげたティチングの他に、現在でもよく知られている記述としてはオールコックの *The Capital of the Tycoon* や、スエンソンの *Fra All Lande*(1871)、さらにスエンソンが参考にしたリンダウの *Un Voyage autour du Japon* などがすでに発表され、読者を得ていた。こうした先行する四十七士論があるなか、ミットフォードの“The Forty-seven Ronins”はその後の定説となり、研究史上でも西洋社会における受容に影響を及ぼしたものとして重視されるに至る。ここでは、先行する記述との内容の比較を通して、ミットフォードの四十七士論が革新的であった点について考察したい。

西洋社会への最初の紹介となったティチングの記述は、各将軍の年代記の中にあらわれる。綱吉の治世下に起きた事件の一つとして討ち入りを取り上げており、あくまで事件の歴史的事実を正確に説明することに焦点を合わせている。内容は、次の通りである。1701年3月14日に度重なる侮辱に耐え兼ねて浅野内匠頭が城内で吉良上野介に切りかかり、その咎によって浅野は切腹のうえ藩は取り潰し、一方の吉良にはお咎めなしであった。そして、この「不公平(injustice)」が家臣たちを怒らせ、翌年の12月のある深夜、ついに主君の死の原因を作った吉良への仇討ちが決行され、事件を知った将軍が吉良への援軍を送ったが、時すでに遅く吉良は討たれた。47人の家臣は切腹を仰せ付けられ、主君の復讐を果たせたことに満足して死んでいった。ティチングは、この事件に基づいたフィクションや浮世絵が事件ののち多数作成されたことなど、彼が日本に滞在していた当時に残っていたはずの日本人への影響についてはほとんどふれず、武士階級が「忠誠心への敬意(respect for their fidelity)」を表すために四十七士の墓を参る、とのみ言及している。

日本で最も人気のある英雄として四十七士が話題にのぼるのは、開国後のことである。第1章でも確認したように、これらの記述の特徴は、四十七士の討ち入りと彼らを英雄としてたたえる日本人の精神性を結び付けて考察している点である。リンダウは、神奈川で起きた侍による外国人襲撃事件を分析するなかで、日本人がいかに名誉に対して敏感であるかを示す例として討入り事件に言及している。そして、子供まで四十七士の物語を暗唱

できるほど定着している現状は「極限にまで発達した個人に対する名誉感のあることをこの話は証明している⁹⁴」と注を付けた。スエンソンも、リンダウの記述を下敷きにしなが
ら、日本人の「英雄行為の見本」と紹介し、罪を清め名誉を回復するための行いとして切
腹が受け入れられていることを述べた。

一方、オールコックの記述は、リンダウやスエンソンよりも生々しく討ち入りについて
描写し、47人の浪人が主君の切腹の原因を作った敵に対していかに容赦なかったかを述
べ、このような行いを大人から子供までほめたたえる環境で成長することが、桜田門外
の変を起こしたり公使館員を襲撃する精神を養っていると考察している⁹⁵。オールコックは
攘夷運動の最も盛んな時期に公使として日本に滞在し、大老井伊直弼が浪人たちに殺害さ
れた桜田門外の変が起きた際、騒然とする江戸をリアルタイムで体験し、その詳細をイギ
リス本国へ伝えた。『大君の都』は上下巻合わせて1000ページにもなる大著で、その中
で浪人による外国人襲撃事件は桜田門外の変以外にも何度も取り上げられ、何度も用いるこ
とになる「浪人」の語の定義を「「浪人」は完全に笠で顔を隠し、追剥の代わりに物乞い
をする者たちのこと('Lonins,' who sometimes thus play the mendicant instead of the
highway robber, with a hat completely concealing their face)⁹⁶」と加えている。イギリスの
代表的な文芸雑誌であった *Edinburgh Review* に連載も持っていたオールコックの著書は
よく読まれ、ミットフォードが *Tales Old Japan* を発表する頃には、外国人襲撃の恐ろし
いニュースと重ねられ、赤穂浪人の討ち入りは残虐な襲撃事件として認識されていた。

一方、ミットフォードの“The Forty-seven Ronins”は、攘夷と日本人の赤穂浪人に対する
英雄視の関連については言及せず、討ち入りが日本人に英雄譚として親しまれている状況
から日本人の精神を分析したり、考察を述べることはほとんどない⁹⁷。そして、以下にあ
げる、従来の討ち入り事件の記述には見られない、大きく分けて2つの要素がミットフォ
ードの“The Forty-seven Ronins”の内容的な新しさであったと考える。1つ目は、講談の内
容に影響を受けているテキストを使用したことに起因して赤穂の浪人たちや敵方である吉
良の侍たちの人間性が美化されているため、討ち入りの概要から受ける印象は残酷さを強

調しているオールコックのものと正反対となり、読者が彼らの人間味を感じることができ
る点である。さらに、吉良方の警戒を緩ませるために遊興にふけり無気力な姿を演じ続け
る大石内蔵助が、ついに 20 年来の妻を離縁するくだりは、仇討ちの成功と引き換えに浪
人たちが家庭の幸せを犠牲にすることの具体例であり、これまで集団として扱われていた
四十七士の個人としての側面を引き出したといえるだろう。2 つ目は、「忠臣蔵」が社会に
与えた影響として外国人襲撃事件に言及することを行わなかったことである。まず、ミッ
トフォードは、浪人について、「帯刀を許された、よい血筋で、主君から切り離されてい
る人々 (persons of gentle blood, entitled to bear arms, who, having become separated from
their feudal lords)」と注を付け、オールコックの野盗と同等という否定的な意味合いの定
義に対し、ニュートラルな意味付けを行い、現在の浪人の姿にも次のように言及してい
る。

近頃では、しばらくの間浪人となって、西洋人のやり方や言語の何がしかを拾い上げ
ることを期待して、たとえつまらない仕事でも、開港場で外国人相手の仕事に従事す
ることは人々にとって珍しいことではない。

Nowadays it is not unusual for men to become Ronins for a time, and engage
themselves in the service of foreigners at the open ports, even in menial capacities, in
the hope that they may pick up something of the language and lore of Western folks. ⁹⁸

西洋の新しい知識を習得するために見栄を捨てて働く浪人たちの姿からは、オールコック
が描き出した恐ろしいならず者とも、リンダウやスエンソンが記したような世間に対する
名誉を重んじる姿とも異なる、目標を達成するためなら自分の名誉心を抑えることができ
る近代的な人格が浮かび上がってくる。“The Forty-seven Ronins”の記事の締めくくりに、
四十七士の墓の神聖さを象徴する小話として、ミットフォード自身の身近で起きた出来事
を紹介している。1868 年 9 月に、自ら脱藩した浪人が長州藩への出仕の望みが断たれて泉

岳寺の四十七士の墓前で切腹をし、「血が飛び散り、この男の死にゆくもがきで乱れた(all bespattered with blood, and disturbed by the death-struggles of the man)」現場を 1-2 時間後に目撃したという話が挿入されている。凄惨な表現が用いられているが、自らの前途に絶望した若者が最期を遂げる場所として「この勇者たちの墓前(the graveyard of these Braves)」以上にふさわしい場所があるだろうか、ミットフォードの筆致は極めて同情的である。浪人が現実に存在した時期に日本に滞在し、同じように彼らの外国人襲撃の危険を肌で感じながら生活していたにも関わらず、ミットフォードは、オールコックとは異なり、「忠臣蔵」の影響が彼らに攻撃性を与えるという解釈はしなかったのである⁹⁹。

5. *Tales of Old Japan* 出版直後の反響

日本語資料からの翻訳という新しい手法を用いて日本人にとってポピュラーな物語を記述したミットフォードの著書は、出版前からマクミラン社によって新聞や文芸雑誌などに広告が掲載され¹⁰⁰、日本人の画工の手による木版挿絵入りの豪華本として 1871 年 2 月ごろ出版された。本の冒頭を飾る”The Forty-seven Ronins”は自然と注目される一編となり、書評の中で取り上げられることも多かった。本節では、出版直後に文芸雑誌や新聞に掲載された書評から、ミットフォードの用いた手法、討ち入り事件に関する内容に対する評価とミットフォードの記述を通して見られる解釈の変化について分析したい。

最も早いまとまった書評は、1871 年 2 月 25 日に掲載された *The Illustrated London News*¹⁰¹と、イギリスの権威的な文芸雑誌 *The Athenaeum*¹⁰²のものである。どちらの批評者も、物語を翻訳することによって日本人の内面を正しく映し出すというミットフォードの構想は正しいもので、*Tales of Old Japan* を通して彼の試みは成功していると述べている。一方、「忠臣蔵」の記事について、*The Athenaeum* は、子供向けのフェアリーテイルが vol. I の後半に配置され、赤穂浪人の記事が本の最初に置かれていることには賛同しかねるとして、「読者たち(his clients)」のためには「いかにヒロイズムの名のもとに美化されているとはいえ、殺人や自殺の恐怖へはもっと穏やかに読者たちを引き合わせた(have

introduced his readers more quietly to the horrors of murder and suicide, dignified though they may be by the name of heroism.)」方がよかったのではないかとしている。しかし同時に、書評者は、数々の外国人襲撃事件を1つ1つ数え上げ、敵討ちの物語は、まだ記憶に新しいそれらの事件を起こす日本人の精神性の表れであり、「今この時(at the present time)」に第1話目に配置したのはミットフォードも意図あつてのことだと述べた。このあと、書評は“The Forty-seven Ronins”を基にして桜田門外の変を分析し、復讐を計画する用意周到さや標的の弱みや数に頼む卑怯な方法は両者に共通しており、日本の変革の必要性がよくわかると続けている。オールコックが『大君の都』で行ったように、討ち入り事件を幕末に起ったテロリズムと重ね合わせ、日本人の攻撃性を看取するという見方は1871年にも根強く存在しており、大衆的な文芸評論週刊誌である *The Saturday Review* の3月11日付の書評¹⁰³、同日付の政治文化誌 *The Spectator* の書評¹⁰⁴でも同様の解釈が示されている。

一方、ミットフォードの記述に基づいて討ち入り事件を理解しようとする書評もみられ、これらの書評の特徴は、“The Forty-seven Ronins”の内容を封建制度下の過去の日本の姿として読み、ローマ時代や中世のヨーロッパにその対応物を見つけることで普遍的な人間性に着目する点である。学者とその分野に見識のある一般読者とを讀者および発信者としたイギリスの雑誌 *Notes and Queries* の1871年3月11日付の書評¹⁰⁵は、そうしたものの先駆けである。書評者は、ミットフォードの構想については、伝説や慣習の翻訳を通して消えゆく古き日本を保存することに成功しているとし、“The Forty-seven Ronins”中の、罪のない人や近隣住民に危害を加えないようにという大石内蔵助の浪人たちへの指示から、騎士道に共通する精神を読み取っている。この際、幕末の外国人襲撃事件についての言及はなされていない。また、エディンバラに本社を持ち、イギリス植民地領域に影響力を持った雑誌 *Blackwood's Magazine*¹⁰⁶の書評では、西洋化されていない日本の「古い、古い世界の物語(stories of old, old world)」からは、日本人も自分たちと同じ血肉をもったものだということがわかる、と述べられ、“The Forty-seven Ronins”についても、浪人たちの行動原理をス

コットランドに一種の騎士道として残る「ハイランダー(Highlander)」の道義と重ねることによって、臣下としての義務をひたすらに遂行したのだと解釈している¹⁰⁷。

こうした見方の書評の中で特に決定的であった1871年5月26日付けで *The Times* に掲載された約5,000語にわたる大部の書評を取り上げたい。書評者は、まず、日本人が描いたままの日本を提示するというミットフォードの構想によってどんな旅行記よりも価値があると激賞し、収録された物語が「純粋な史実であろうと伝説であろうと (whether they be pure history or pure legend)」人々の性格や社会について如実に表していると述べた。そして、鉄道や電信が導入されようとしている「若き日本(young Japan)」ではきっと見ることがないであろう武士に受け継がれた勇武、高潔、献身の例として“The Forty-seven Ronins”に言及する。

彼らの復讐には、まったく野蛮さや血なまぐささはない。いきりたって行われたのではなく、周到に計画され、慎重に、しかし非自己中心的な勇気をもって実行された立派な行いを冷血だなどということはできない。

There is no barbarity in their revenge, bloody as it is. It is not done passionately, but is carefully plotted and deliberately carried out, yet with such unselfish courage, such noble behaviour, that we cannot call it coldblooded¹⁰⁸.

続けて、“The Forty-seven Ronins”の本文から多く引用してその内容について全面的に賛成し、ギリシャやローマの英雄譚を引き合いに出し、それらにも勝るとも劣らない物語であると述べた。

このように、*Tales of Old Japan* 出版直後は、「忠臣蔵」に対して否定と肯定という相対する2つの見方が存在し、討ち入り事件と重ねる解釈がオールコックの記述によって定着していた幕末を、現在の日本ととらえるか過去ととらえるかによってこの違いはもたらされていたようである。また、「忠臣蔵」を肯定的なイメージで捉える書評に共通するの

は、西洋の物語や伝説で語られる英雄と共通した美德を持つ理解可能な英雄譚として解釈する姿勢であった。いずれの書評にも共通していたのは、日本人が親しむ物語を翻訳することによって日本人の内面を描き出すというミットフォードの方法論に、内容が史実か伝説かの別は問わず、全面的に支持が寄せられていたことであった。これは、国民国家の出現とともにロマン主義的ナショナリズムが盛り上がり登場した国際的な視野からの民俗学研究が、19世紀を通してヨーロッパで急速に発展したという時代的背景と呼応している。イギリスにおけるこの学問領域を指す“folklore”の語がウィリアム・トムス(William Thoms)によって作り出されたのも1846年のことで、それも *Tales of Old Japan* への書評をいち早く掲載した *The Athenaeum* 誌で行われていた¹⁰⁹。ミットフォードの本に対して、「(稿者注：ミットフォードの本に描かれた) この世界は我々が予期していた以上に我々自身のものと非常によく似ている(the world is much more like our own than we were prepared to expect)」と、ドイツ民俗学者フェリックス・リーブレヒト(Felix Liebrecht)からの書評が寄せられたことも、こうした背景を象徴している。また、同様の試みを行った先達としてティチングに言及した書評は、*Tales of Old Japan* 出版後1年以内に発表されたものの中には確認できなかったことにも言及しておきたい。

6. おわりに

ミットフォードの記事で実践された日本語資料からの翻訳という手段によって日本人の正確な姿を西洋人に提示する構想自体は、18世紀末に日本を訪れたティチングも持っていたものであった。しかし、ミットフォードがティチングに対する言及を行わなかったばかりか、ティチングを踏まえてミットフォードの取り組みを評価したり、類似点を指摘するような書評も見られなかったことから、読者たちには全くの別物として受け取られていたと言えるだろう。

ミットフォードが歴史事実そのものではなく、彼が取材した明治最初期に日本人が親しんでいた「忠臣蔵」のストーリーを「国民的伝説および歴史(national legends and histories)¹¹⁰」

の翻訳という形で紹介したのは、第 1 章でも検討したように、開国以前からの日本文化の観察の方法を踏襲し、そこから観察者の存在感をできる限りなくしたものであった。書評を確認する限り、読者たちもこの方法論を批判なく受け入れ、日本人の内面をよく伝えているという点で称賛していたのは、19 世紀のヨーロッパを貫く民俗学の急速な発展が背景になっていた。また、書評からは、物語を主に集めたことによって、イギリス人読者の間にヨーロッパにおける伝説や英雄譚の対応物として捉えるという比較文学的視点を生み出すという効果もあったことが分かる。ただし、史実と歌舞伎・浄瑠璃の「仮名手本忠臣蔵」をはじめとするフィクションが混同された日本の受容の状態を峻別しないまま、物語として“The Forty-seven Ronins”に取り入れたため、*Tales of Old Japan* が成功し、英語圏における四十七士に関する参考文献として言及されることにより、歴史とフィクションとの混乱が長らく再生産され続けるという功罪もその反面としてあった。

第3章 F.V.ディキンズの英訳「仮名手本忠臣蔵」

1. はじめに

フレデリック・ヴィクター・ディキンズ(Frederick Victor Dickins, 1838-1915)は、アーネスト・サトウやチェンバレンらと並ぶ最初期の日本学者の一人で、日本文学を西洋社会へ本格的に紹介した第一人者として知られている。彼は、1865年に『百人一首』の英訳を雑誌上で発表したあと、1875年に横浜で「仮名手本忠臣蔵」の英訳を出版した(以下、これを初版と呼ぶ)¹¹¹。この英訳は「仮名手本忠臣蔵」の初めての英語の全文訳で、イギリスにもたらされた赤穂浪人の討ち入り事件に関する著作としては、1871年にロンドンで出版され西洋人読者に広く読まれたミットフォードの *Tales of Old Japan* 所収の“The Forty-seven Ronins”に続くものである。初版出版の翌年にはほとんど変更は加えられないままニューヨークのプットナム社(Putnum)から第2版が出され、それから大きな改訂を経て、1880年にはロンドンのアレン&アンウィン社(Allen & Unwin)から第3版、1892年には日本でも、丸善が独自に改訂を施し、新しい版が出版された¹¹²。その後も廉価版など版を重ね、1971年にドナルド・キーン(Donald Keene)による新しい英訳が発表されるまで、英語圏における「仮名手本忠臣蔵」のテキストとして定着した。

この英訳に関しては、日本学者としてのディキンズの伝記的研究に先鞭をつけた川村ハツエ¹¹³の論考があり、岩上はる子¹¹⁴によって訳文の詳細な検討がなされている。岩上は、ディキンズの全集¹¹⁵に決定稿として採用された1880年版をテキストとして用いて、ミットフォードとの共時的な比較や、初版と1880年版の訳文の比較、キーンの訳文との通時的な比較などを行い、ディキンズの翻訳の特徴は語り物の調子も含め可能な限り原典に近づけようと試みる姿勢にあると結論付けている。また、ディキンズの翻訳が『百人一首』の頃から貫く、翻訳に用いたテキストを明らかにし巻末に原文テキストを数ページ掲出するというスタイルは、川村、岩上によって研究書のような体裁であると形容された¹¹⁶。本章では、ディキンズの翻訳に対する「学術的な翻訳」という評価をより具体的に捉えることを試み、さらに、出版された翻訳が読者にどのように用いられていたのかを明らかにすることによ

て、従来見過ごされがちであった、在日外国人と英語を学習する日本人という、日本国内に存在した読者の存在の重要性を指摘する。

翻訳者であるディキンズは、1838年にマンチェスターに生まれ、パリのリセ・ボナパルト(Lycée Bouonaparte)を卒業したのち、ロンドン大学に入学し1859年に医師の免許を取得した。1862年からはイギリス海軍所属の軍医として東アジアに配属され、1863年に初来日、1864年からは艦を離れ江戸のイギリス公使館の医官として日本に滞在した。1866年にはこの職を辞し、一旦イギリスへと帰国した。この最初の来日から帰国までの短期間にディキンズは日本語を目覚ましく習得しており、1865年にはロンドン大学の中国語学教授ジェームス・サマーズ主宰の東アジアに関する学術誌*Repository*に、ディキンズの訳業の第一歩として知られる『百人一首』の英訳を發表している。イギリス帰国中に弁護士資格を取得したディキンズは1870年に再来日し、体調を理由に再び帰国する1878年まで、日本で弁護士として活動する傍ら、日本研究に勤しんだ。本稿でとりあげる「仮名手本忠臣蔵」の英訳が、横浜で発行された写真入り英文雑誌*Far East*に發表されたのもこの時期である。ディキンズは、イギリス帰国後、弁護士としてのキャリアを模索したのちロンドン大学事務局に勤務し、1896年から1901年まで事務局長のポストにあった¹¹⁷。この時期に結ばれた博物学者・南方熊楠との親交はディキンズの日本研究に大いに刺激を与えた¹¹⁸。英訳「仮名手本忠臣蔵」の1880年版に向けた改訂の時期について、岩上は、ディキンズから南方熊楠へ宛てた手紙¹¹⁹に基づき、1878年にイギリスに帰国して以降になされたものと措定している。

本章の目的は、最初期の日本文学の翻訳を代表する重要な一例であるディキンズの翻訳の検討を通して、当時の翻訳が成立した環境についてより具体的な像を示すことである。そのために、まず、初版をめぐる書評者とディキンズとの間の議論をたどり、書評で批判された箇所が1880年版ではどのように扱われているのかを検証し、1880年版で行われた改訂の様子を明らかにする。初版から1880年版への改訂に関する資料として、討ち入り事件に関する西洋での記述を通時的に論じたアーロン・コーエン¹²⁰が報告した、初版をめぐる*Japan Weekly Mail*の書評者とディキンズの間に行った議論を用いる。加えて、書評でも触れられ

ず改訂でも手が付けられていない、2か所の削除された描写に言及することにより、当時の学術的な翻訳のあり様を示す一例として当該翻訳を位置づける。次いで、1877年に *Tokio Times*¹²¹に掲載された、日本国内の西洋人の間でのディキンズの翻訳の反響を紹介した記事を端緒として、在日外国人の間での英訳「仮名手本忠臣蔵」の用途を明らかにする。

2. 初版をめぐる *Japan Weekly Mail* における議論と改訂

本節では、*Japan Weekly Mail* の書評欄に掲載されたディキンズ訳の初版に対する批判とそれに対するディキンズの反論を 1880 年版に向けた改訂と対照させることで、詳細が分かっていないディキンズの改訂のプロセスの一部を明らかにする。*Japan Gazette* の編集人であったジョン・レディ・ブラック (John Reddie Black) が創始した雑誌 *Far East* での、1874 年から 1875 年にかけての連載を経て横浜で出版されたディキンズの初版は、必ずしも高い評価を受けたわけではなかった。横浜で発行されていた週刊誌 *Japan Weekly Mail* の 1876 年 11 月 19 日号には、ディキンズの訳文は意識が過剰だとして私訳を並べ、多くの誤りを指摘した激しい酷評が掲載された。そして、1週間後の翌号にはディキンズ本人およびディキンズの翻訳を擁護する人物から書評者に向けた反論、および貨幣専門家から大判小判の価値に関する注の誤りを指摘する意見が掲載され、論争の様相を呈した¹²²ことが、コーエンにより報告されている。書評者の指摘の内容とそれに対するディキンズの *Japan Weekly Mail* 誌上での反論および 1880 年版での該当箇所の改訂については、表 1 としてまとめ文末に付し、本節では、必要に応じて表に付した番号を用いて言及する。

Japan Weekly Mail は、*Japan Herald*、*Japan Gazette* とともに、開国直後に創刊された、日本における三大英字新聞の 1 つで、1872 年に創設されたばかりの日本アジア協会が 1874 年に協会自身で紀要の発刊を行うようになるまで講演内容や論文掲載の役割を担い、その後も 1917 年まで、研究成果や協会の情報を購読者たちに届けることで研究を支援した¹²³。そして、海外にいる購読者に向けて 2 週分をまとめたものが *Japan Mail* として送付されていた。書評掲載の時期が、初版が出されてから 1 年後の 1876 年であったことは、*Japan Mail*

を通した海外の読者の存在とニューヨークで1876年版が出されたこととが関係しているの
だろうと思われる。ディキンズの翻訳を痛烈に批判した書評者は、その文面から日本語や日
本文学の学識があり日本アジア協会と近しい人物であったことは想像がつくものの、19世
紀当時、寄稿者や執筆者の匿名性が容認されていたために記名がなく¹²⁴、特定は難しい。

書評者は、まず、ディキンズがこの度新しく発表した翻訳の価値を否定するところから始
める。それも、ヨーロッパ人日本研究者たちが注意を払う江戸時代は「日本史の暗黒時代—
日本文学における退廃期(the Dark Age of Japanese History—an age of decadence in the
literature, of decay in the language, and of degeneracy in the national customs and
character)¹²⁵」であるけれども、時代的に近いこの時期の文学研究は歓迎されるべきもの
である、という前振りを付けたうえでディキンズ訳を否定しているため、書評者の批判は一
層辛辣に響く。そして、この冒頭から一貫して、訳文から注にいたるまで、ディキンズの誤
りを細かく指摘した。反駁を発表したディキンズは、「書評者は私の翻訳を注意深く読んだ
ようには全く見受けられない(indeed he does not appear to me to have read it with any
attention.)¹²⁶」と冒頭から書評に対して否定的で、明らかな語義や事実に関する誤りの場合
は認めるものの、基本的には指摘は当たらないとする姿勢を貫いている。

一方、書評で指摘された箇所が1880年版に向けてどのように改訂されたのかについて注
目してみると、ディキンズの処置は、a.反駁の記事上でも誤りを認め改訂において修正を加
える(③大序の冒頭の訳文、⑦、⑪)、b.反駁の記事上では誤りではなかったが改訂にお
いて修正を加える(②、③の脚注、④、⑨)、c.反駁の記事上での言及はなく改訂において修
正を加える(⑤、⑥、⑧、⑩、⑫)、のように大きく3種類に分けることができる。つまり、
書評への最初の対応として発表されたディキンズの反駁の内容に関わらず、①で指摘され
ている翻訳作品の選定という根本的な問題を例外として、改訂の際に修正や補足などの何
らかの対応がとられていることがわかる。特に、1880年版では、③について大序の冒頭だ
けを「原作者の序文(author's preface)」として別に訳出した経緯を新たに脚注を付して説明
し¹²⁷、さらに⑥について、鳥の鳴き声と「かわい(kahwhy)」との音声上の類似という根拠を

示して脚注における掛詞の説明を充実させており¹²⁸、いずれも書評者の指摘に対応して補足説明を加えたような印象を受ける。改訂がこの論争をどれほど踏まえたものであったかディキンズ自身の発言からは確認できないが、指摘された箇所での改訂における取り扱いからは、ほとんどの指摘を退け、自身の翻訳を全面的に擁護したディキンズの態度が議論上の修辭に過ぎず、誌面上での対応とは裏腹に書評者の指摘が実際には受け入れられ、改訂を行う際に参考にされた可能性を指摘することができる。

書評に対する反駁の中で、ディキンズは、初版発表以降に自身で気づいたり、*Japan Weekly Mail* の書評者以外から「より親切」な形で指摘されたことで、誤りや加筆すべき点は指摘されなくとも了解しており、次の版ではこれらの誤りは修正されるだろうと述べている¹²⁹。こうした記述からは、1876年時点ですでに1880年版の構想があったこと、さらに、他の専門家からの批評を取り入れるディキンズの開かれた態度、つまり、改訂の内容にディキンズ個人の研究の進展だけでなく、ディキンズを取り囲む日本学研究のコミュニティが研究成果の提供よりも直接的な指摘という形で影響を及ぼしていたことが浮かび上がってくる。

3. 維持された意識

こうした改訂を経た1880年版はロンドンで出版され、ディキンズ自身も「この版は、全体として、前の版よりも原典に忠実になっている(the present version is, on the whole, a closer rendering of the text now followed than the former one.)¹³⁰」と序文で自信をにじませたように、訳文の原典への忠実性について概ね高い評価を受けていた。例えば、夏目漱石を教え子に持つことでも知られるスコットランド人日本史学者ジェームス・マードック(James Murdoch)は、「非常に学術的な完訳(a very scholarly and complete translation)」と評価している¹³¹。学術的な翻訳という評価や、川村や岩上が目した研究書のような体裁は、ディキンズの翻訳が原文に忠実なものだったという印象を強く持たせる。しかし、一方で、ディキンズ自身は、翻訳に際して意識を行ったことを初版においても1880年版においても

明言している。初版の序文では、「いくつかの場合には、訳さずそのままにしておいたり、原典の一部を手短に訳したほうが良い場合もあった(in some instances it has been found advisable to leave untranslated, or to translate shortly, portions of the original.)¹³²」と、特に意識を行う判断基準を示していないが、1880年版では、「イギリス人読者たちの切なる要求(the exigencies of English readers)¹³³」に応える必要があると判断した場合、という基準を示している。本節でとりあげる、初版、1880年版の両方に共通する描写の削除2点についても、ディキンズの定義に基づくなら、イギリス人読者への配慮の結果であるとひとまず捉えることができる。なお、これらの削除に関して、明らかに原典に忠実でないにも関わらず、管見の限りにおいて書評者とディキンズとの議論やその他の書評においても言及された例はない。以下に、ディキンズが用いたと考えられる七行本『仮名手本忠臣蔵』の校訂本文¹³⁴、初版、1880年版、参考として1971年に出版されたドナルド・キーン訳¹³⁵を引用し、削除された2箇所について見ていきたい。

1つ目は、二段目の終わりに主君である若狭之助が師直を切り付け窮地に陥るのを未然に防ごうと加古川本蔵が馬を駆って発とうとしている場面で、妻の戸無瀬や娘の小浪が本蔵の馬に取り付いて止めようとするところである。

校訂本文：シャ面倒なと鏡の端。一当テはっしと当テられて。うんと斗りにのっけに反を見向キもせず(pp.212-213)

初版：“You are too importunate. Delay not (to the servants) but follow me.” (p.15)

1880年版：“You are too importunate,” repeated Honzo, sharply. “Delay not (to the servants), but follow me.” (p.14)

キーン訳：HONZO: Blasted nuisance!

NARRATOR: He aims a kick with the point of his stirrup. It strikes squarely, and the women, moaning, topple over. He does not so much as look at them. (p.46)

初版でも改訂後の 1880 年版でも、本蔵が鉄製の馬具で二人を足蹴にした上、悲鳴をあげて倒れる 2 人を見向きもしなかったことを訳文では削除し、ただ、主君のためを思って部下を引き連れ急いで出立したことを訳出していることが確認できる。

2 つ目の例は、祇園を舞台とした七段目の 1 つの特徴ともいえる、婀娜めいた戯言の訳である。塩冶の奥方である顔世御前からの密書を読んでいた由良之助は、2 階から延べ鏡で手紙を盗み見する遊女（おかる）を見つけ、秘密を知ったおかるを始末するためにまずは階下へ降りようとする。なかなか降りてこないおかるに由良之助が催促し、おかるがはしごが揺れるので舟に乗っているようで怖いとためらうのをうけて、舟の縁語を用いておかるの局部が梯子の下から覗けるぞと、おかるの羞恥心に訴えて降りてこさせようとする。結局最後は由良之助がためらうおかるを「やかましい生娘かなんぞのやうに。逆縁ながら¹³⁶」と言いながら抱えて下ろしてしまう。少々長いが、原文と並べて引用することでディキンズがどのようにこの性的な戯言の部分を省略したのかがより明確にわかるため、下に引用したい（[] はおかるのセリフ。[]、下線は引用者による）。

校訂本文：大事な／＼。あぶないこはいは昔の事。三間ンづゝまたげても。赤かうやくもいらぬ年シはい。 [あほういはんすな。舟にのった様でこはいわいな。]道理で舟玉様が見へる。[ヲ、のぞかんすないな。]洞庭の秋の月様をおがみ奉るじゃ。¹³⁷ (p.537)

初版：“There is no danger,” exclaimed Yuranoske, “none whatever ; you need not fear, a strapping girl like you.” “Don't be so silly, it is like being in a boat, I know I shall tumble.” The girl, however, got upon the ladder, and began to descend, but very reluctantly. “Quick, quick,” cried Yurauoske, “or I will pull you down.” (p.93)

1880 年版：初版から変更なし(p.84)

キーン訳： YURANOSUKE: Don't worry. You're way past the age for feeling afraid or in danger. You could come down three rungs at a time and still not open any new wounds.

OKARU: Don't be silly. I'm afraid. It feels like I'm on a boat.

YURANOSUKE: Of course it does. I can see your little boat god from here.

OKARU: Ohh-you mustn't peep!

YURANOSUKE: I'm admiring the autumn moon over Lake T'ung-t'ing. (p.117)

原文引用部の下線を施した部分は、明らかに性的な意味を含んだ戯言で、英文に施した下線部はそれに対応する部分である。ディキンズは、この場面を大幅に省略しており、3つの文のうち2つは訳文で完全に削除されていることがわかる。はじめの「赤かうやくもいらぬ年シはい」のみ「お前のように体の大きな女の子なら怖がる必要なんかない(you need not fear, a strapping girl like you)」と言葉を置き換えて訳出している。発育良好な若い女性を意味する¹³⁸“strapping”という言葉選びによって、原文のおかるが生娘ではないことを揶揄する性的な意味合いは大分薄められている。

この2つの描写の削除について、単なる誤訳、または、原文が理解できなかったための省略であったと安易に結論付けることは避けた。なぜなら、1865年に『百人一首』の英訳を行ったことが示すようにディキンズの日本語能力および専門知識は高く、さらに、ディキンズが熊楠へ送った手紙で「唯一、助力を得られたのは『忠臣蔵』くらいでした(The only translation I was assisted in was the Chushingura 忠臣)¹³⁹」と述べているように、補助者がいたと考えられるからである。また、*Japan Weekly Mail*の書評者は、ディキンズの翻訳を批判する中で、ディキンズの原文理解が不十分であることを揶揄する文脈において、ディキンズより有能な学者の助力を得ることを勧めており¹⁴⁰、補助者をつけることが当時の翻訳を行う標準的な環境であったことがわかる。

意識について話を戻すと、削除された2つの場面に共通しているのは、いずれも省略されても話の筋には大きな影響を与えない描写で、なおかつ、前者が身分ある武士からの妻子への暴力、後者が物語の主人公から若い女性への性的なきわどい発言という、公序良俗の上で好まれない行動を描写している点であった。

アイランドの英雄譚の初期の英訳の問題を検討したマリア・ティモツコ(Maria

Tymozko)は、ヴィクトリア朝時代になされた英訳は典拠を明らかにして詳細な注を備えたどんなに学術的なものであっても、当時のイギリスのモラルからの影響を免れることがなかったことを例証している¹⁴¹。

本稿でとりあげた 2 つの例のうち七段目の由良之助の性的な戯言については、明らかにきわどい発言で、中等教育から高等教育までをヴィクトリア朝期のイギリスで終えた井上十吉が 1910 年に「仮名手本忠臣蔵」の翻訳に取り組んだ際にも、「翻訳するには下品すぎたり、もしくは、文章がきちんとした意味をなしていないといった避けられない場合(being unavoidable as where the passages convey no coherent meaning or where, ..., they are too indelicate for translation)」と意識を行う基準について断りを入れて省略されていた¹⁴²。一方、二段目の本蔵の妻子への仕打ちについては、井上十吉訳では原文に忠実に訳されており、この点についてディキンズと井上には微妙な判断基準の違いがあったようである¹⁴³。

1904 年から翌年にかけて『中央公論』が「武士道」を連続的に取り上げた際、東京帝国大学総長であった山川健次郎が武士道とイギリスのジェントルマンとの近似を説く論文「武士道とゼントルマン」を発表した。その中で、山川は、「士君子（稿者注：ジェントルマンのこと）は婦人を非常に敬する事で是は武士道に於ては婦人は弱いものであるからいたわつてやると云ふ事はありますが格別に是を敬すると云ふ事がない」と述べており¹⁴⁴、女性の取り扱いに関する倫理観は日本とイギリスの間に大きな違いが見られた部分であったようである。また、イギリスにおける美德としての「紳士」の成立について歴史的に論じたメイソン・フィリップ(Mason Philips)は、「細心の注意を払い、身分ある女性の名誉を危くすることを避け」ることが、紳士たる者の心得として 19 世紀末までに「非常に強力」になっていた¹⁴⁵と述べ、女性の名誉に対する男性の配慮の重要性を強調しており、ディキンズが妻子を足蹴にして振り向きもせず去る様子を訳出していた場合、当時の読者たちに受け入れられなかった可能性は十分に考えられる。実際に、イギリスで発表されたディキンズの翻訳に対する書評を見てみると、家族や社会的成功を犠牲にしてまで主君に尽くす古武士然とした浪人たちの姿がイギリス人読者たちの懐古趣味を刺激して称賛を集めた一方で¹⁴⁶、

浪人たちの女性への接し方がイギリス人の丁重さを重んじる流儀と似通っていることに注目したものも見られた¹⁴⁷。

また、仮にこの意識が行われていなかった場合、読者の心象だけでなく、日本文化の評価も損なっていたと思われる。それは、ディキンズが「仮名手本忠臣蔵」の翻訳に期待した役割と関わってくる。ディキンズは、先に言及した *Japan Weekly Mail* の書評者との論争において、「仮名手本忠臣蔵」の文学的価値の低さが翻訳される作品としてふさわしくないという点が問題になった際（文末の表 1①参照）、「日本文学の一例の単なる再現の類など思いもよらぬこと (Nothing was further from my thoughts than any sort of mere reproduction of a specimen of Japanese literature)⁽³⁵⁾」とし、あくまで江戸時代の日本人の国民性や物珍しい文化の標本として訳出したのだと答えている。このような考え方は当時珍しいものではなく、ディキンズと同時代のイギリス民俗学者ジョセフ・ジェイコブス (Joseph Jacobs) は「古き日の思想や慣習の痕跡や人々の心の動きについて、より完全な知識を得ること (to gain fuller knowledge of the workings of the popular mind as well as traces of archaic modes of thought and custom)⁽³⁶⁾」を目的としてイギリス民話集を編集したと述べている。ディキンズの「仮名手本忠臣蔵」の位置づけは、文学作品というよりも、むしろミットフォードが日本人の内面を提示しようと物語を収集したのと同様に、文化を評価する基準として見なされたフォークテールに近いところにあった。

4. 在日外国人、日本人の間での英訳「仮名手本忠臣蔵」の用途

さきに、ディキンズが意図した英訳の役割が、西洋人読者たちに江戸時代の日本社会の例を提供することであったことを述べたが、日本国内で発行されていた英字新聞や日本の新聞の記事からは、ディキンズの翻訳が文化の参照のためだけでなく、劇場で「仮名手本忠臣蔵」を鑑賞する人々がセリフや設定を理解するためにも用いられていたことがわかる。

例えば、1877年に創刊した *Tokio Times*¹⁴⁸ のディキンズの翻訳に対する書評では、文化や社会を知る有力な手立てである芝居見物においての外国人観客の語学的障壁という問題

を解決に導いた初めての本であるところにこの本の大きな価値を見出している。書評者によれば、外国人観客たちの最初の助けとなったのは、芝居が基づいたいくつかの歴史事件の概要を収録したミットフォードの *Tales of Old Japan* であったが、あくまで芝居の主題に関する理解を促したに過ぎなかったため、観客たちにとって舞台はまだ、役者の「薄暗い残像 (shadowy spectrum)」を見ているようなものであり続けたという。以下に引用した英訳「仮名手本忠臣蔵」出版が外国人の芝居見物をどのように変えたかを述べた文からは、ディキンズの翻訳が芝居見物へ行く外国人にとって、いかに待ち望まれたものであったかがよく分かる。

ある観客はきっと、自分の記憶のみを頼りに、もしくは、必要ならば手持ちの 1 冊を見ることで、最も示唆に富み、そしてきわめて国民的な日本の芝居の 1 つを、初めて十分に味わいつくすだろう。そして、これこそ、日本にいる読者にとってのディキンズ氏の翻訳の本当の価値として我々が見出すものなのだ。

For the first time, a visitor might find, aided only by his own memory, or, in case of need, by reference to a convenient volume, the fullest appreciation of one of the most suggestive and thoroughly national plays of Japan. And in this we discover the real value, for readers in this country, of Mr. Dickins's work.

ディキンズの翻訳の価値は、在日外国人の間では「初めての、そして今のところ唯一の、この国の演劇の宝箱の真の鍵 (the first, and thus far, the only true key to the dramatic treasury of the land)」であることだと認識されていた。

Tokio Times の書評者によれば、翻訳が出版されるまで、言葉の分からない外国人が芝居を理解するためには、物語の筋を理解しておくか、通訳を伴って出かけるかの 2 つの方法しかなかったという¹⁴⁹。実際に、第 1 章でもふれた、ジョージ・スミスの *Ten Weeks in Japan* に収録されている、長崎における「忠臣蔵」¹⁵⁰観劇に関する詳細な記述は、翻訳登場以前の

外国人の芝居見物がこの書評者の説明通りのものであったことをよく伝えている¹⁵¹。スマスは、観劇の直前の記述で長崎の街を説明してくれる友人と一緒にあったと述べており、観劇でも、この友人から内容の説明を受けていたようである。しかし、スマスにとっては、同伴者の説明があってもやはり完全には詳細を理解できなかったようで、観劇後、1822年には英語版がロンドンで出版されていたティチングの記述¹⁵²を確認し、ようやく把握できたことが書かれている。スマスの観劇記は、「忠臣蔵」の筋や元になった討ち入り事件のあらましを西洋の言語で説明したものが通訳の同伴以上に外国人の観劇の大きな助けであった可能性を示唆しており、ディキンズの翻訳を劇場に持ち込めば、1冊で両方の役割を果たすのだから、外国人の観劇をいかに容易にしたか想像に難くない。

ディキンズの翻訳が出版から10年、20年経過しても、芝居を見に行く外国人が欠かせない助けとして利用していたことが新聞の報道から確認できる。1888年7月27日付の『東京朝日新聞』の朝刊では、横浜市公会堂で「仮名手本忠臣蔵」が上演されることが報じられ、「外国人は翻訳本に就て忠臣蔵の事情を知る者多ければ定めて来観者多きことならん¹⁵³」との記述がある。さらに10年以上が経過した1900年11月25日付の *Japan Times* 紙上の、上演中の歌舞伎に関するゾーイ・キンケイドの連載においても、「ディキンズのよく知られた「忠臣蔵」の翻訳一丸屋で再版が売られている一の1冊があるから、外国人観光客も公演に容易についていくことができる (Provided with a copy of Dickin's[sic] well-known translation of *Chushingura* – a reprint is on sale at Maruya's – the foreign spectator can easily follow the performances.)¹⁵⁴」と述べられている。1887年には大西洋と太平洋をつなぐカナダ太平洋鉄道が開通し、従来よりも行き来が容易になったため¹⁵⁵、ヨーロッパから日本へ旅行に訪れる外国人も非常に多くなっていた。翻訳が売られている場所まで述べるキンケイドの筆致からは、この頃にはすっかり日本語を解しない外国人の観劇のお供として翻訳の携帯が定着していたような雰囲気さえ伺わせる。

ディキンズ自身は、「仮名手本忠臣蔵」を翻訳した理由について、人気の高い作品で日本文化の理解に供するからとしか述べていないため、一見すると在日外国人の芝居見物と翻

訳の出版との関連は分かりにくい。しかし、*Tokio Times* の書評やスミスの体験からも見えてくるように、翻訳なしに芝居を理解することは難しく、出版後、実際に翻訳は観劇の助けとして重宝されていた。翻訳の初出と初版とが横浜であったことも、居留地内の外国人からこうした需要を見込んだためであったのかもしれない。第 6 章でとりあげるメイスフィールドの *The Faithful* が 1915 年に出版された際、同じ文学サロンに属していたウォルター・デ・ラ・メア (Walter de la Mare) が寄せた書評には、対話が極限までそぎ落とされ、セリフが直截である点が「我々が翻訳でよく知る (we are familiar in translation)」日本演劇とよく似ていると述べている¹⁵⁶。この書評からは、日本の演劇に興味を持つイマジズム詩人の間で翻訳を通してその型を研究していたことが読み取れ、この時期にはイギリス本国においても、文化の標本として以外に日本の文学作品の鑑賞を可能にするという役割が、翻訳に付与されていたようである。

また、ゾーイ・キンケイドもふれている、丸屋が版元となった 1892 年版など、日本の出版社から国内消費向けに出された版には、日本人読者が英語の教科書として利用するという需要も見込まれて出版されていたようである。『丸善百年史：日本近代化のあゆみと共に』によれば、1880 年版が当時の丸屋を通して輸入され、日本国内で広く流通し、旧制中学の教科書もしくは副読本として読まれ、その中に丸屋から出版されたものも含まれていたという¹⁵⁷。1892 年版については、『読売新聞』1893 年 3 月 16 日付に広告があり、この版が 1880 年版の間違いを改め、さらに富田源太郎による新たな序文を付したものであることを述べている。実際に 1892 年版では、1880 年版に含まれていた、「仮名手本忠臣蔵」の作者を近松門左衛門とするなどの明らかな事実誤認が訂正されているが、これらの誤りは 1912 年版では訂正されておらず、また、サトウ宛てのディキンズの手紙で 1912 年版の出版については言及されているが、1892 年版については何の言及もなかった。丸屋からの出版についてもディキンズが言及した例は確認できず、日本の出版社による再版はディキンズ自身の関知しないところで行われていたと考えられる。

5. おわりに

本章では、具体例に即して、ディキンズの翻訳が当時のイギリス社会、そして当時の日本学とどのように関係し、影響を受けたのか、そして、海外にいる外国人読者、日本にいる外国人読者、英語を学ぶ日本人読者といった読者がおり、ディキンズの英訳をそれぞれに異なる用途に用いていたことを明らかにした。本章で行ったディキンズの翻訳の検討からは、出版当時から学術的な翻訳として評価されてきた英訳「仮名手本忠臣蔵」が、ヴィクトリア朝イギリス社会という社会・文化的背景から、そしてディキンズの周囲の日本学研究者や書評者という専門家のコミュニティから、間接的にも直接的にも影響を受けて成立し、原典の忠実な再現が必ずしも最優先して目指されたわけではなかったことを確認した。特に、書評者の批判と改訂に関する考察からは、当時の日本文学翻訳が行われた環境について、翻訳者と専門家コミュニティとの距離が想像以上に近いものであったことを実証できたと考える。また、日本国内における外国人の英訳の用途から、ディキンズの翻訳が、日本文化を伝える英雄譚という従来通りの外国人の「忠臣蔵」受容のほかに、「仮名手本忠臣蔵」の演劇作品としての鑑賞というもう一つの流れと深い関係にあったことを確認し、日本の出版社による再版については、日本人の英語学習における教科書としての利用がその背景にあったことを指摘した。

第4章 西洋人による「忠臣蔵」受容に対する日本人の反応

1. はじめに

これまで検討してきた通り、「忠臣蔵」は江戸時代の日本文化や日本人の特質を示す代表例として、または日本で鑑賞できる演劇作品として、1860年代から西洋人によって紹介や翻訳がなされていた。こうした、西洋人の中で受容されているという事実は、日本人にとっての「忠臣蔵」の位置づけに何らかの変化をもたらしたのだろうか。本章では、日本のナショナリズムの高揚を背景とした国内での「忠臣蔵」受容において四十七士の精神として「愛国心」が強調されていく過程への、西洋人による「忠臣蔵」受容の関与を考察したい。

明治から大正にかけて近代国家としての道を急速に歩み続けた日本では、江戸時代までの封建制下における人々の藩単位の帰属意識を、日本という国家全体に対するものへと変革し「国民」を形成する必要があった。そのために、明治中期より、東京帝国大学を中心として「国語」や「国文学」の整備がすすめられた¹⁵⁸。日本の文学や芸術において古典が形成された経緯をまとめたハルオ・シラネ(1999)は、ヨーロッパの“folk”に対応して日本に「民族」の概念が登場した明治末期から大正初期にかけて、日本人が自分たちの民俗文学・歌謡・伝説・神話に急激に関心を持つようになり、これらを「(民族共同体ないし国民としての)日本民族の精髓を体現するもの」として捉えるようになったと指摘している¹⁵⁹。

開国直後から西洋人によって日本人の国民性の象徴として言及され、彼らの観察を通して「国民的伝説および歴史¹⁶⁰」と形容されていた「忠臣蔵」が「国民」の形成過程に果たした役割は、自然、大きかったと考えられる。「忠臣蔵」の評価を通時的に論じ日本の国民的思想史との関わりの深さを示した松島栄一(1864)は、この時期の具体的な「忠臣蔵」受容の変化として、1886年の明治天皇による勅使の派遣、および、討ち入りを義挙とする勅旨や金幣の贈呈を通して、浅野家中における主君に対する忠誠から、天皇や国家に対する忠誠への読み換えが行われたと指摘している。また、1980年代までの日本国内における「忠臣蔵」受容の変化について論じたスミス(2008)は、1889年に出版された重野安績の『赤穂義士実話』において歴史的事実が重視され、四十七士の人情の部分の重要性が低くなったことが、

国家に対する自己犠牲の象徴というプロパガンダ的な役割が付与された契機であったと述べている¹⁶¹。日本国内における受容史を考える上で、1880年代は「忠臣蔵」とナショナリズムが接合した重要な時期であったといえる。

文学作品の国外での受容が国内でのその作品自体の再評価や受容の活発化を促すだけでなく、作品の発祥文化のナショナリズムの浮沈とも関連していたことを示す例は、日本文学では『源氏物語』の英訳があげられ、海外文学で「忠臣蔵」と同様の国民的な英雄譚の例としては、アイルランドの古典的英雄譚の英訳があげられる。マシュー・チョジック(Matthew Chozick)は、末松謙澄が『源氏物語』の英訳¹⁶²を通して日本文化の先進性を西洋諸国へ示すことを目的とし、1882年にイギリスで発表されたこの本の中で『源氏物語』をヴィクトリア朝イギリスの小説の文体を意図的に用いて翻訳し、世界で最初の小説として位置づけたことが海外での『源氏物語』に対する見方を規定することとなり、日本国内においては、史上最初の小説として海外で認識されている事実が作品自体を権威づけただけでなく、日本文化の優越性の証明であると受け取られていたことを検証している¹⁶³。アイルランドの古典的英雄譚の英訳と19世紀から20世紀はじめにかけての愛国主義運動との関わりについて論じたマリア・ティモツコ(1999)は、英雄譚の古アイルランド語からの英訳には、アイルランド人の中で英雄譚を共有することによる国民意識の形成と、イギリス人に対してアイルランド文化の存在を顕示する2つの役割があったことを指摘している¹⁶⁴。ティモツコが検証したアイルランドの問題からは、より支配的な文化圏にいる他者から持たれるイメージが否定的なものであると、人々の国家への帰属意識を形成する過程において障害となるものであったことが見えてくる。日本はアイルランドのようにイギリスに植民地化されていたわけではないが、勢力的に劣位に立っていたことや、江戸時代に西洋諸国と結んだ不平等条約の改正を目指し、明治政府が日本を文明国として認識されるよう努めていたことなど、その状況はきわめてよく似ている。

「忠臣蔵」の受容が『源氏物語』の場合と異なるのは、日本人である末松謙澄が海外での受容の既定の路線を作った『源氏物語』に対して、「忠臣蔵」の場合、日本人の翻訳者が翻

訳を発表する頃には、西洋における位置づけがすでに西洋人の紹介者や翻訳者を通した受容により決められてしまっていたという点である。そして、第1章から第3章までにイギリスにおける「忠臣蔵」受容について考察したように、その論調は1860年代から1880年代に至る間一定ではなく、必ずしも日本人にとって好ましいものばかりではなかった。ディキンズが自身の英訳の序文において、「仮名手本忠臣蔵」は「10年ほど前に終わった奇妙で一風変わった国民生活に今も未練を残す人々にとっては(to those who still preserve some lingering affection for the quaint and picturesque national life that ended with the last decade…)」魅力的だと述べたように、1870年代以降、中世を思い起こす懐古趣味の対象としても見られるようになっていたが、開国したばかりの頃には日本人の攻撃性や理解不能性の象徴的な例として扱われていた。

一方、海外において「忠臣蔵」が知られているという事実が日本人の間で共有されるようになったのは、1880年代以降のことであり、はじめは西洋諸国に滞在していた日本人留学生によって言及され、ついで日本国内の新聞や書籍でも報じられるようになっていった。

本章では、19世紀末から20世紀初めにかけて、西洋人が「忠臣蔵」を受容しているという事実に対する日本人の反応を検証し、日本のナショナリズムの高揚という時代背景がどのように反映されているのかを明らかにする。まず、西洋人の「忠臣蔵」受容への最初期の反応である、留学生としてパリに滞在していた前田正名とボストンに滞在していた斎藤修一郎が「忠臣蔵」の翻訳の動機を説明した記述を用い、そこに西洋人の受容に対する不満と反発という共通点があったことを指摘する。次いで、日本人読者を対象にした出版物における西洋人の「忠臣蔵」受容への言及から具体例をあげながら、それらが、前田や斎藤らの論調とは全く異なっていたことを説明し、日本国内においては、「忠臣蔵」は西洋人の心すら動かすという言説の型が形成されていったことを指摘する。最後に、この定型的表現が「忠臣蔵」受容の実態の反映ではなく、日本人の間で型として定着したものであったことを、1909年のイギリス陸軍元帥キッチナー来日に際する芝居見物に関する報道を具体例として用い、示す。

2. 西洋に滞在していた日本人の反応：前田正名と齋藤修一郎

本節では、西洋人の「忠臣蔵」受容に対する日本人からの最初期の反応として前田正名の *Yamato* と、齋藤修一郎がエドワード・グリーイと共同で行った為永春水の読本『いろは文庫』の英訳 *Loyal Ronins* を取り上げ、前田と齋藤の2人が西洋人の受容をどのように観察し、それぞれの翻案や翻訳を執筆する動機へと結びつけていったのか具体的に示す。

彼らが著作を発表した1880年前後には、前田のフランス語の戯曲 *Yamato* の日本語訳である『日本美談』(1880)を除いて、日本人向けに出された国内の出版物において西洋人が「忠臣蔵」を受容している事実に対する言及はまだ見られず、1883年4月に横浜居留地から日本風の芝居が流行するフランスへ向けて「仮名手本忠臣蔵」の衣装が輸出されたという新聞報道が管見の限り初出である。この記事の性格は、あくまで盛況な商業地であった横浜での取引を報じたもので事実を述べるにとどまっており、日本や日本人の評価と結びつけるような言説は見られない¹⁶⁵。

前田正名は、1850年に薩摩藩の医師の息子として生まれ、1864年に薩摩藩に開設された開成所で学んだ後、長崎遊学を許され、唐通詞であった何礼之の語学塾で英語を学んだ。17歳という若さで薩長連合に密使として関わり、維新が成功すると、長崎に滞在していたオランダ人宣教師グイド・フルベッキ(Guido Herman Fridolin Verbeck)の協力を得て兄達と『和訳英辞書』(1869)を編纂し、この辞書を日本政府の買い上げとする交渉に成功し、その資金を使って1869年から7年にわたるフランス留学を実現させた。フランスにおける前田は、駐日代理公使兼総領事であったモンブラン伯爵のパリの邸宅へ下宿し、学校へ通う傍ら、公使館でモンブランの『鳩翁道話』のフランス語への翻訳を助けるなどして語学を教え合った¹⁶⁶。しかし、彼のフランス生活は必ずしも順風満帆ではなかった。1937年に前田正名の息子・三介に発表された正名の自叙伝によれば、留学の前半には、「畢竟こは人種の致す所、亜細亜人たる吾人日本人の為し難き所なりとまで考えぬ。斯る見解は余のみならず余の友人等も斯く考へしと見え、終には精神病に罹り、又は割腹せしものまで出づるに至れり。」

と、当時ヨーロッパにいた他の日本人留学生とともに、白人ではなくアジア人であるというアイデンティティーによって死を考えるほど深く悩んでいたという¹⁶⁷。

前田は、1878年に開催された第3回パリ万国博覧会において、日本政府から事務官に任命されて出品を取り仕切り、会場で上演するために、「忠臣蔵」に題材を採った劇 *Yamato* をフランス語で書き下ろした。執筆の際、西園寺公望とジュディス・ゴージェ(Judith Gautier)の助力があったのではないかの指摘がアロン・コーエン(2008)によってなされている¹⁶⁸。*Yamato*の内容は「仮名手本忠臣蔵」とは完全に別物で、復讐劇という枠組みを残してはいるが、吉良を討つ理由は亡き主君の遺恨から吉良の領地侵略へと転換されており、物語の主題も復讐劇自体ではなく、四十七士のうちの1人、小山田庄左衛門が家族への情のために任務を仕損じ、老母とともに妻子を残して切腹するという悲劇が中心となっている。

*Yamato*は万国博覧会での上演のあと、1880年に前田自身によって日本語に訳され、『日本美談』の題で出版された。その際に付け加えられた序文では、執筆の動機や通常の「忠臣蔵」とは異なる物語の筋へと変更した理由が説明されている。前田は、*Yamato*の上演によって、日本人が「国の為には家をも身をも顧みず最愛の妻子を棄て義に赴」という精神を持ち、西洋人が野蛮だと考える切腹や攘夷もすべて「国を愛し名を重んずる真心」から出た行動であるため賤しむべき事ではないことを示そうと考えていたという。また、四十七士が吉良を討つ理由を変更した理由について、通常の「忠臣蔵」では彼らはただ主君の遺恨をはらしただけであり、それだけでは「愛国の義気」を十分に示すことができないため他国から奪われた領土の奪回へと設定を変更したと述べている¹⁶⁹。*Yamato*上演の動機については、後年まとめられた前田の自叙伝においてもふれられているが、そこでも、ヨーロッパ人が絶えず「日本には宗教もなく野蛮なり、日本は支那の属国なり」などと言って「日本を恥かしめらるること」が何よりも耐え難いため、「日本国民の魂」を伝え、文物を披露しようと考えたと述べられており¹⁷⁰、西洋人からの日本人の評価に対する反感が前田に *Yamato* を執筆させた要素であったことは間違いない。自叙伝ではさらに、「忠臣蔵」を題材として選択

した理由についても、「第1には神仏を尊ぶ所以を知らしめ、宗教を知らしめ、忠孝の大義を知らしめ、国恩に報ゆることを知らしめ、第2には礼儀、愛情、信義を知らしめんが為めなり」と説明している。これらの執筆動機の説明からは、前田が西洋人の日本人観を変える手段として、「忠臣蔵」の上演によって日本人の行動原理が愛国心であることを提示しようと考えていたことが分かる。

『いろは文庫』の英訳を発表した齋藤修一郎は、1855年に福井藩の医師の息子として生まれ、1869年に武生から代表として選抜され沼津兵学校附属小学校へ遊学し、後年、慶応義塾医学所創設時の教授となった杉田武から英語をはじめとする西洋の知識を学んだ。その翌年、今度は福井藩の貢進生に選抜されて大学南校の法学部へと進み、1875年から文部省第1回海外留学生として渡米し、ボストン大学法科に学び、大学を卒業した後も現地にどまり、1880年に帰国した¹⁷¹。

『いろは文庫』の英訳である *Loyal Ronins* の序文には、彼の翻訳の動機が述べられている。齋藤は、「人々の文学や彼らの芸術作品は、その国が獲得した文化生活や洗練の程を知ることができる指標である(The literature of a people and their works of art are signs by which the student is enabled to learn the degree of civilization and refinement attained by a nation¹⁷²)」という考えから、日本の文化的レベルの高さを示すために日本文学を英訳したいという思いが出版の3年ほど前からあり、翻訳する題材として『いろは文庫』を選択したという。この文面からは、齋藤が、イギリス人が「忠臣蔵」に注目したのと同様、ロマン主義的ナショナリズムの枠組みから英訳の着想に至ったことが分かる。齋藤が題材に『いろは文庫』を選択したのは、序文によれば、為永春水という最も著名な作者によって書かれたものであることと、封建制度下での日本文化をよく表しているからという2つの理由によるものであった。そして、前田が *Yamato* を執筆した時と同じように、齋藤も、攘夷や切腹といった開国直後に横行した浪人の行動について西洋人が否定的な見方をしていることを認識しており、それに対し、「私は、この主題について述べてきた人々が「絵の半面」しか見てこなかったのだと確信を持っている(I feel sure those who have written upon the subject

have only seen “one side of the picture.”)」と、批判を加えている。斎藤自身は、これらの行動に関して、法を犯す行為を全面的に支持するわけではないとしながらも、「私は、愛国主義の芽生えを含んでいると信じ、この大層蔑まれている制度に対してある種の感嘆を禁じ得ない。(I cannot avoid feeling a certain admiration for the much-despised institution, believing that it contained the germ of patriotism.)」と、その精神については共感を示していた。斎藤が、西洋人の見方を変える「絵の半面」と考え翻訳を通して提示しようとしていたのも、前田と同様に、浪人たちの行動に宿る愛国心であった。斎藤の翻訳は『いろは文庫』をそのまま英訳したものではなく、並び替え、内容に取捨選択や補完など大きく手を加えたものである。*Loyal Ronins*に採られた話と『いろは文庫』の内容とを章段ごとに対照した川瀬健一は、斎藤が特に四十七士の自己犠牲を主題とした段を英訳に取り入れていたことを指摘しており¹⁷³、前田の場合と同様に、斎藤も、国の為には自己犠牲を厭わない四十七士の姿を強調して伝えようとしていたことが分かる。

大西洋を隔て、フランスとアメリカに居ながら、前田と斎藤は、西洋人が日本人を他者であるアジア人の一員として見ること、および攘夷や切腹、浪人といった事柄によって異質性を強調して語ることに反発し、全く同じ「忠臣蔵」という題材によって覆そうという、共通の目的をもっていた。前田が『自叙伝』で述べていたように、第1章で論じた西洋人の日本観は、開国から20年以上が経過しても依然としてあまり変わっておらず、これに対する反発や不満は、同時期に西洋諸国に滞在していた日本人が共通して抱いていた感情であったのだろう。前田が述べていた中国への批判的な対抗意識も彼一人のものではなく、近代日本における「武士道」の概念の展開を歴史的に考察したオレグ・ベネシュ(Oleg Benesch)は、西洋人から、中国の属国と見られたり、西洋人にとっての他者であるアジア人として一纏めにされることに対する不満や反発は西洋人とふれあった日本人に共通する思いであったと指摘している¹⁷⁴。

1884年にアメリカに渡った内村鑑三も、1886年に *The Methodist Review* において “The Invention of a New Religion” と題して、キリスト教と日本人の倫理である大和魂が近似して

いると説く論文を発表し、西洋で否定的に受け取られている切腹や復讐について理解を得ようと努めている。内村は、大和魂の精神は「1.孝行、2.高位の権威への忠義、弱者への慈愛(1. Filial piety; 2. Loyalty to higher authorities; 3. Love for inferiors)¹⁷⁵」であり、キリスト教と通じるものがあるとし、西洋でも翻訳を通して知られた「忠臣蔵(The Loyal Ronins)¹⁷⁶」は、このうち臣下から主君に対する忠義を最も象徴的に物語っていると述べた。ここで内村が斎藤の英訳『いろは文庫』の題を「忠臣蔵」の訳語として用いていることはおそらく偶然ではなく、斎藤の翻訳がアメリカにおいて成功を収めていたことの証左ともいえる。

3. 日本人へ向けた出版物における表象

留学生として長期にわたって西洋に滞在した日本人にとって、西洋人の受容の実態は不本意なものと感じられ、その反発が自身の手によって新たな翻訳や紹介を執筆する動機となっていたことを前節において確認した。では、国内にいる日本人は、西洋人が「忠臣蔵」を知っているという事実をどのように取り扱ったのだろうか。

宮澤誠一は、自由民権運動が政府の弾圧によって後退していく 1884 年頃に出版された義士伝の叙や推薦文に、西洋諸国での「忠臣蔵」の認知が物語を権威づける形で言及されると指摘している¹⁷⁷。本節では、宮澤があげた『絵本赤穂義士銘々伝』(1884)の他にいくつかの具体例をあげながら、「忠臣蔵」は日本国内と同じように海外でも「美談」として尊敬を集めているという言説が、20 世紀のはじめの頃には、ある種の定型的な表現として定着したことを指摘する。

本文の著者が不詳の『絵本赤穂義士銘々伝』の叙は、瓜生政和の名で『暁斎画談』の編者としても知られる戯作者梅亭鶯叟によって書かれた。鶯叟は、主君である浅野内匠頭のために命を失ったからこそ彼らについての本や芝居が書かれ、後世に名を遺すこととなったのだから、彼らが天寿を全うできなかったことを不幸とは言えないと述べ、その名声の高さを「浪寄る磯辺に貝拾ふ海夫の女の子雲起る溪間に薪樵山男の男の童も忠臣蔵の名を知らぬハ無く且近頃猶欧米の国々へまで聞え高くして」と表現した¹⁷⁸。美名がとどろいていること

に対する言及は、例えば、楠木正成ら南朝の忠臣をとりあげた『絵本楠公三代軍記』(1888)の叙でも「夫レ人ハ死シテ名ヲ停ム虎ハ死シテ皮ヲ止ムルト謂ヘルモ古ノ人ノ金言ナリ¹⁷⁹⁾」と書いているように、義士伝のみならず、英雄伝の序文における一つの定型であった。

鶯叟の叙が書かれた時期以降、「忠臣蔵」にのみ見られるようになった変化が、外国での認知への言及であった。例えば、『絵本赤穂義士銘々伝』の前年に錦耕堂から出版された『赤穂義士銘々伝』の隅田了古による序では、「赤穂忠臣の名都鄙に涉りて今尚朽ちず故に狂言綺語に脚色み三尺の児童も之を覚知せざるはなし¹⁸⁰⁾」と、典型的な英雄伝の序の域を出ない表現で権威づけが行われていたが、1887年に同じく錦耕堂から出版された『赤穂義士之実伝』に隅田了古が書いた序文では、次のように、外国人からも認知されているという事実が誇張され、普遍的な美談であることを裏付ける根拠として言及されている。

四十七士が如きは古往今来未曾有の復讐にして海外の他邦にも斯る例曾て有しを聞ず故に外人と雖も該美談を聞ては感涙を流さざる者なく況や我国人に於てをや若之を聞て承泣せざるハ人にして非ざるなり¹⁸¹⁾

また、「忠臣蔵」の歴史的考証を試みた重野安績の『赤穂義士実話』の冒頭でも、「古来稗史院本の中に。我国の一大美談にして。深山に薪こる翁伏屋の賤の女は更なり。異邦の人までも伝え聞て知らざるものなきは。赤穂四十七士復讐の物語なり¹⁸²⁾。」と、同様の表現が踏まえられている。海外で知られている事実を「忠臣蔵」の権威付けのために用いた言説は、これ以降も継続的に見られ、日清戦争後に出版された『大石義雄』(1897)の緒言でも、「彼は忠誠なる武士気質に於て。完全なる模型として日本魂の標本として今や海外にまでも訳説せらるゝに至る¹⁸³⁾」と書かれている。また、福本日南の『元禄快拳録』(1909)の冒頭では、「赤穂浪人四十七士が復讐の一挙は、日本武士道の花である。従つて之に関する伝記の類は汗牛充棟とも謂ふ可く、普く之を蒐めたら、立派な図書館を作ることが出来よう。…支那にも聞え、欧米にも伝はつて、欽仰せぬ者は無い¹⁸⁴⁾」と、知名度と美談であることの両方を裏

付けるものとして海外での受容への言及がなされている。これらの序文は、西洋で留學生活を送っていた前田や齋藤が、西洋人たちに「忠臣蔵」を正しく理解させ開國期の日本人やその文化に対する見方を変えねばならないと述べていた頃と時期的にあまり隔たっていないにもかかわらず、西洋人の受容の取り扱いは全く正反対であったと言える。

こうした論調の違いは、齋藤修一郎の1880年に出版された *Loyal Ronins* の序文と1910年に『日本及日本人』で組まれた「四十七名士四十七士観」と題された「忠臣蔵」特集における、齋藤の発言の違いにも端的に反映されている。*Loyal Ronins* の序文では、西洋人から切腹や仇討が「大層蔑まれ」ていることや「多くの不正確な説明や、浪人主義に浴びせかけられた嫌悪感の表現 (many misrepresentations and expressions of disgust heaped upon Roninism)¹⁸⁵」を齋藤が目当たりにして反発を感じたことによって翻訳を志したことが述べられていた。それが、1910年の記事では、西洋での受容への反発が翻訳の動機であったことを一応は述べながらも、「慥か明治の九年か十年に、デツケンスが横浜で例の十二段の芝居を翻訳した事があるが、是は余り武士道を発揚して居なかつたやうに覚えて居る¹⁸⁶」と、非常に控えめな表現が用いられており、西洋人から劣位に置かれていたなどとは一言も述べていない。ここから、齋藤が日本国内に向けては、西洋人にも評価される「忠臣蔵」という英雄伝としての型を踏まえて言説を変えていたと考えられる。

次に、新聞報道における取り扱いを見てみたい。1880年前後には、「忠臣蔵」が西洋人の間でも認知されているという事実について何らかの意味付けを行った報道がなかったことは先述したとおりである。新聞報道に変化がみられるのは、書籍からは少し遅れて1890年代のことで、まず、西洋人が「忠臣蔵」に心を動かされているという記事が見られるようになり、日清戦争後の記事には、「忠臣蔵」は日本の武力的な強さの象徴として外国人に感銘を与えているという論調をとるようになる。1891年1月27日付の『読売新聞』には、フランス人が泉岳寺の四十七士の墓前を訪れたことを報じた次のような記事が掲載されている。

忠魂義魄百世の後までも人心を感憤せしむる赤穂義士の泉岳寺の墓へ通弁を伴ひ一名

の仏人墓参して断碑苔蒸したる処に腰打ち掛けて当義士等が苦心の実況を通弁より聞き大に感ずる所やありけん数行の暗涙班々として痕を墓石に留めける¹⁸⁷

第1章で言及したオールコックが日本人から泉岳寺の案内を受け、第2章でとりあげたミットフォードがその寺内を探索したように、西洋人が日本人に案内されて泉岳寺を訪れることは、それ以前にもよくあったことである。また、*The Far East*¹⁸⁸や、サトウ（のちの版ではチェンバレン）が編集を担っていたイギリスの大手出版社ジョン・マレー(John Murray)の旅行案内書で泉岳寺が紹介されていた¹⁸⁹ことから、西洋人にとって四十七士の墓は観光名所の1つであったことが確認できる。そのため、記事として取り上げられたのはフランス人の訪問が珍しかったからではなく、フランス人が「忠臣蔵」に感じ入って涙していたことが注目に値すると判断されたためと推察される。

この記事では、フランス人の心を動かしたのは仇討のために四十七士が耐えた苦境であったが、日清戦争勃発後の報道では、外国人の感動の対象が「忠臣蔵」に表れた日本人の勇武に限定されていることが確認できる。日清戦争末期の1895年4月14日付の『読売新聞』には、ドイツの新聞で日清戦争における日本の奮戦が「「忠臣蔵」として四十七人の武士にて組織せられたる義勇隊あり其忠勇武烈なる行為は彼国民等が尊崇措かざる所にしてこれなん実に大日本帝国人民の祖先なり」と報じられていたのを目にしたという、ドイツから帰国した大尉の体験談が掲載されている。また、日本の戦勝からまだ日が浅い1895年7月14日付の『読売新聞』には、アメリカのある夫妻が東京の絵師のもとを訪れ、アメリカでは近頃、日本の「武勇を敬慕するの余り」和装が流行していることを語り、男性は大石内蔵助の扮装をした自身の絵姿を所望したという報道がなされていた¹⁹⁰。

4. キッチナー元帥来日における「仮名手本忠臣蔵」鑑賞の報道

歌舞伎を貴賓や外国人の鑑賞に堪えうる芸術へと変容させることを目指して1870年代から始まった演劇改良運動が、1887年の天覧歌舞伎によって1つの結実を見せると、海外の

博覧会会場における見世物としての公演だけでなく、西洋諸国の貴賓が臨席する機会に「仮名手本忠臣蔵」が上演されるようになっていた。大津事件が発生したため、結局実現されることはなかったが、1891年5月に当時まだ皇太子であったニコライ2世が来日した際にも、演劇改良運動の旗手であった福地源一郎が演出を手がけた「仮名手本忠臣蔵」の歌舞伎座における観覧が本来予定されていた。また、1893年6月のウラジオストクでの歌舞伎公演、日独伊三国間条約が締結される前の1938年にナチス・ドイツとの親睦のためドイツ国立演劇学校で行われた歌舞伎公演なども同様の例のうちに数えることができる。西洋人の貴賓による「忠臣蔵」受容は、日本人にとって特別な意味を持っていたのだろうか。

本節では、1909年のイギリス軍人キッチナー元帥の来日の際に東京市によって開かれた歓迎の宴についての日本人向けの新聞報道と外国人に向けた報道の比較を行い、すでに日本国内で定着していた、「忠臣蔵」が西洋人の間でも美談として知られているという表現が、逆に西洋人の受容を観察する日本人の視点を既定していた例として示す。

ホレイシヨ・ハーバート・キッチナー元帥 (Horatio Herbert Kitchener, 1850–1916) は、アメリカ軍など多くの国でのちに模倣された、キッチナーが正面を向いて指をさす、第1次世界大戦のイギリス軍の兵士募集ポスターによって現代でも有名な軍人である。フランスとのスーダンの統治を巡る戦いで勝利した戦功によって男爵を、ボーア戦争での司令官としての功績から子爵を授与され、1909年に地中海最高司令官、並びに、陸軍元帥に就任した¹⁹¹。フィリップ・マグヌス (Philip Magnus) がまとめたキッチナーの伝記によると、1907年に発足した地中海軍の初代最高司令官であった国王エドワード7世の弟で、1906年に明治天皇へのガーター勲章授与のためミットフォードと日本を訪れたコノート男爵アーサーが、1909年夏ごろから辞任を望んだため、1907年終り頃から体調不良を訴えインドで無用の長物となっていた英雄キッチナーに後任が回って来たという。乗り気でないキッチナーに対し、政府は、交換条件として7か月にわたる外遊を許し、キッチナーがかねてより計画していた、美術品収集のために中国や日本を巡る東アジア旅行に軍事視察の名目を与えて実現させた¹⁹²。日本へは、その途中で立ち寄り、約3週間滞在した。

日本側に遼東半島で出迎えられたキッチナーは、旅順や京城を日本帝国の国賓として陸軍による案内を受け日露戦争の戦場を見学した。10月26日に暗殺された伊藤博文の遺骸を見舞い追悼の意を表したあと、11月1日に海路で下関に到着し、福島安正陸軍中將に迎えられ、列車で東京へと向かった。5日から11日までイギリス王室の名代として日本帝国陸軍の宇都宮大演習を天皇と観覧し、その後、東京へ戻り連日の式典に参加したのち、帰国の途に就くため、19日に神戸からオーストラリアへと旅立った。帰国後もキッチナーは軍人、政治家として活躍し、第1次世界大戦時には陸軍大臣へ就任したが、1916年ロシアへの使節として航行中、ドイツ軍の機雷によって死亡している。日本においては、キッチナーが来日する以前から、新聞において彼のスーダンなどの戦績やインドでの動向がたびたび報道されていたことから¹⁹³、来日時にも、イギリスの偉大な軍人としてよく知られていたようである。

イギリス側にとって、キッチナーの訪日には政治的意味は小さく、彼の私的な旅行の口実という意味合いが大きかったのに対し、彼が中国大陸や朝鮮半島を日本の領土として案内されたことや陸軍の演習を天皇と並んで観覧したことからは、日本側がこれをイギリスとの良好で対等な関係を国民に示す、国威発揚の機会と捉えていたことが見て取れる。キッチナーが歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」を鑑賞したのは、11月11日に紅葉会館で行われた東京市主催による歓迎の宴の時であった。『読売新聞』の記事によれば、当日は、女中による日本舞踊のあとに、菊五郎、吉右衛門、三津五郎らによって、市村座で興行中であった「仮名手本忠臣蔵」および「勢獅子」が余興として披露されたという¹⁹⁴。これらの余興に対するキッチナーの反応について、日本の新聞では、一様にキッチナーが「仮名手本忠臣蔵」を気に入っていたことを強調している。例えば、観劇の翌日である11月12日の『東京日日新聞』は「吉元帥は終始微笑を湛へ頗る満足の体に見受けられたり¹⁹⁵」、『読売新聞』は「元帥流石に葉巻を落とさんばかりに打興じ又降頻る雪中に義士の面々秋水を翳して斬合ふ物凄き光景を見て痛く感に入り…「武張った演技は見て気持が好い、忠臣蔵は頗る愉快に見た」、とて日本武士道の尚演劇中にも存在するを認めたる風なりき¹⁹⁶」とキッチナーの非常に好意

的な感想まで詳細に報じている。また、13日の『東京朝日新聞』でも「元帥は微笑を湛へ乍ら人々の説明を聞いて熱心に見て居たが殊に四十七士には感を深くした」¹⁹⁷と、キッチナーが余興の中でも特に「忠臣蔵」を気に入っていたと報じた。

イギリスの新聞でも日本におけるキッチナーの動向は逐一報じられていたが、この東京市主催の芝居鑑賞を演目に至るまで詳細に取り上げたものは、管見の限り、図版入り週刊誌 *The Graphic* のみで、キッチナーの感想にふれたものはなかった。「我々の盟友は勝利のまとめ役をどのように古き日本の魂で出迎えたか(How Our Allies Greeted the Organizer of Victory in the Spirit of Old Japan)」という副題のついた *The Graphic* の記事は、「古き日本の武士道魂を描いた芝居である“The Forty-Seven Ronins”が披露された。(“The Forty-Seven Ronins,” a play illustrating the Bushido spirit of Old Japan, was performed.)¹⁹⁸」と披露された演目の中でも「忠臣蔵」を重視し、キッチナーや宴の主催者である東京市長尾崎行雄らの集合写真を掲載した。一方、地方紙を含む他のイギリスの新聞における報道は、1870年にヨーロッパの3大通信社アヴァス、ロイター、ヴォルフの間に結ばれた通信協定によって極東地域のニュースの送受を独占していたロイターの情報に基づいて書かれた¹⁹⁹。情報源が同一であるため、内容が似通った記事が同日に掲載されており、ロイターを参照元として明記している *Times* や *Aberdeen Press and Journal*、*Western Daily Press*、*South Wales Daily News* などが11月12日に報じていた内容は、次のようなものであった。

キッチナー卿は今夜、紅葉館における純日本式の晩餐において東京市長のもてなしを受け、会館までの入り口は、封建時代の陣のように飾り付けがなされていた。

Lord Kitchener was the guest of the Mayor of Tokyo this evening at a purely Japanese dinner given at the Maple club, the entrance to which had been decorated so as to resemble a military camp in the feudal days.²⁰⁰

これらの記事では、キッチナーの感想にも、「仮名手本忠臣蔵」についてはおろか、芝居鑑

賞があったことにすらふれていない点が日本国内の報道と異なっている。

また、在日外国人向けに日本国内で発行されていた英字新聞においても、歓迎会の開催や概要、会全体に対するキッチナーの感想を報じてはいるが、日本人向けの新聞に書かれていたように「仮名手本忠臣蔵」が殊の外気に入っていたなどという記述は一切見られない。例えば、日本政府が買収した外国人向けの新聞²⁰¹であった *Japan Times* は、11月2日のキッチナーの到着から連日、詳報を伝え続けていたが、11月13日付の歓迎会に関する記事では、ただ、「つづけて、踊り、演劇やその他の見世物も披露され、こうした贈り物に（稿者注：元帥も）大変お悦びだった。（Subsequently, dances, theatricals and other entertainments were performed and much appreciated by those present.）²⁰²」とのみ報じている。さらに、11月20日付の *Japan Weekly Mail* においては、日本ではキッチナーが「女性や花、人生の享乐的な側面とつながるあらゆるものへの先天的な嫌悪感を抱いている（an innate aversion to the fair sex, to flowers, to dancing and to everything connected with the sybaritic side of life）」と誤解されているために武士の鎧など武張った歓迎を受けることとなり、「彼が、自分の趣味だということにされている禁欲的なイメージをひどく嫌がっただろうと想像する（we imagine that he would be disposed to rebel against the austere character assigned to his tastes.）²⁰³」と、日本人向けの報道とは対照的に、キッチナーが否定的な感想を抱いた可能性を示唆している。ただし、キッチナーは親交の深かったソールズベリー公爵夫人へ向けて、彼が日本滞在を非常に楽しみ、「私はただ、我々の国民の魂がもっと日本人の物のようであればよかったのと思うばかりです（I only wish the spirit of our people…was more like that of the Japanese.）」と書き送ってもいたことがマグヌスによって明らかにされており²⁰⁴、日本側の報道が全て虚構であったと言うことはできない。

日本人向けの報道と外国人へ向けた報道の間にある、「仮名手本忠臣蔵」へのキッチナーの反応についての明らかな温度差は、イギリス王室の名代として来日したこの戦争の英雄の「仮名手本忠臣蔵」鑑賞が、日本人にとってはイギリス人よりもはるかに大きな重要性を持っていたことを示している。特に *Japan Times* が大きく報じなかった事実注目すると、

両国民間が「忠臣蔵」に置くニュースバリューの違いはマスメディアにも自覚されていたのではないかと考えられる。

5. おわりに

西洋人による「忠臣蔵」の受容は、1880年前後にヨーロッパやアメリカに滞在し、切腹や攘夷と結びつけた解釈が未だに根強く存続していることを肌身で感じた日本人留学生らにとっては、不満や反発を抱かせ、批判対象として彼らによる新しい翻訳や翻案が生み出される契機となった。彼らは、西洋人からの否定的な見方を解消するために、「忠臣蔵」によって日本人の行動原理が愛国心に基づくことを例示しようと翻訳を行ったのであった。

一方、日本国内においては、美德を権威づける文言として、広く知れわたっていることへの言及が英雄伝の序文では定型化していたが、1880年代半ばからは「忠臣蔵」にのみ見られるようになった変化として、この定型に上乘せされる形で、西洋人にも知られていることが序文の文言に取り入れられるようになっていった。そして、1909年のキッチナーの「仮名手本忠臣蔵」鑑賞の事例からは、日本人の魂の象徴として外国人にも感銘を与え続けているという、西洋人の「忠臣蔵」受容を抽象化した文言が、個別具体的な事例を描写する際の調子すら既定していた事実を明らかにした。

次章では、前田や斎藤らによる、海外へ向けた日本人による「忠臣蔵」の紹介および翻訳活動において四十七士の精神として強調されていた愛国心の日露戦争後の変形を示す例として、井上十吉の英訳を取り上げる。

第5章 井上十吉の英訳「仮名手本忠臣蔵」と武士道の再定義

1. はじめに

本章では、井上十吉による英訳「仮名手本忠臣蔵」の1894年に博文館から出版された初版（以下これを初版という）と、1910年に中西屋から出版された第2版（以下これを第2版という）を取り上げる。初版と第2版の比較を行い、初版より海外志向が強まった第2版において、「忠臣蔵」の根幹を司る重要な概念として前田正名や齋藤修一郎が強調した愛国心ではなく、「武士道」の語が用いられていることの背景を考察する。

翻訳者である井上十吉(1862-1929)は、神田及武、齋藤秀三郎と並んで、三大英学者と数えられた明治・大正期を代表する英語学者である。徳島藩主蜂須賀家の高臣であった井上高格（のちに代議士、徳島市長となる）の次男として生まれた井上は、1873年に、主家の子息や、兄・省三らのイギリス留学に後発組として送られ、初めての日本人学生としてラグビー校で学び、ロンドンのキングスカレッジを経て、王立鉱山学校で採鉱学を修め、11年の留学期間を終えて、21歳の青年となって日本へ帰国した。帰国後は、鉱山技師になるはずであったところを教育界へと転向し、その後、*Japan Gazette* の記者を経て、1894年から1918年まで、翻訳官として外務省に勤務した²⁰⁵。

井上の業績は、主に英語教科書や英和・和英辞典などの編纂で知られ、明治期の日本の英語教育に大きく影響を与えたが、それら語学書だけでなく、*Sketches of Tokyo Life* (1895) や *A Concise History of the War between Japan and China* (1895)²⁰⁶ などといった、英語での著作も発表した。井上は、英語教育関係の著作のほかに、日本古典文学の英訳も行った。

『近代文学研究叢書』にまとめられた井上の著作年表によれば、井上の手による翻訳には、『菅原伝授手習鑑』より「寺子屋」（初出『少年園』、1885）、『平家物語』より「敦盛」（初出『少年園』、1888）、『大岡政談』より「天一坊物」（初出 *Museum*, 1889）などがあり、なかでも「仮名手本忠臣蔵」は、1890年代から1930年代にわたって、第4版まで出版された²⁰⁷。

井上十吉については、佐光昭二(2007)によって、西洋から技術や知識を持ち帰って来た洋

学者の 1 人として取り上げられ²⁰⁸、彼が在英中に書き留めていた英文日記などの資料を紹介した短編の伝記がまとめられている。井上による「仮名手本忠臣蔵」の英訳も彼の訳業の 1 つに数えられている。佐光は井上の著作傾向について、「国粹主義的な、ないしは偏狭的なものを感じとる人もいた」とし、佐光自身も、井上が当時の日本が歩む欧化主義に反対して「日本を世界の人々に分からせたいと願う執念」を持っていたように考えているという。

通常、日本文学の海外における受容を問題にする際、日本人による翻訳が重要視されることはほとんどなく²⁰⁹、井上の翻訳も、彼の英語教育における功績に比較すると注目されることは少ない。「仮名手本忠臣蔵」の翻訳も、発表当時の海外の新聞・雑誌などに書評や広告が見られないことから、多くの読者を得たとは言い難い。しかし、井上の翻訳やその改訂が行われたのは、第 4 章でも述べたように、日本国内でのナショナリズムの高揚も相まって、西洋人が「忠臣蔵」を知っているという事実や彼らが感動すらしているという認識が、日本人が自分たちを近代国家の一員として認識するために重要性を増した時期であった。そうした背景の中で日本人によって「忠臣蔵」が海外に発信された事例として井上訳には、研究的価値がある。また、初版と第 2 版の出版時期は、1894 年と 1910 年という、日清および日露戦争、そして、これらの戦争における日本の勝利によって黄禍論に拍車が掛かった時期にまたがっており、初版と第 2 版との比較は、社会的・文化的背景と文学作品の受容の関係に関する議論に具体的な示唆を与えられると思われる。

2. 英訳「仮名手本忠臣蔵」初版と第 2 版の違い

本節では、初版と第 2 版の比較を行う。2 つの版の間には、内容的な違いはもちろんのこと、それぞれの版における海外志向の度合いに大きな違いが見られる。

初版は、1894 年に、*Chushingura or the Loyal Retainers of Akao* の題で、富岡英洗の手による挿絵や口絵が約 40 点つけられた和綴じ本として、博文館から出版された²¹⁰。まず、Introduction において、近代実証史学を用いて赤穂事件を検証した重野安績の『赤穂義士実話』(1889)に依拠して歴史事件としての赤穂事件のあらましについて説明し、「仮名手本忠

臣蔵」各段の梗概と英訳で該当する箇所を説明している。登場人物名は、大星、塩谷、高など「仮名手本忠臣蔵」の浄瑠璃本本文で用いられているものではなく、大石、浅野、吉良など歴史上の名前へと戻して翻訳している。Prefaceにおいて、これはミットフォードの“The Forty-seven Ronins”などを通して四十七士について知った「イギリス人読者(the English public)²¹¹」への配慮であったと説明されている。また、神山彰によれば、人物名が実名の「仮名手本忠臣蔵」が演じられるようになったのは、明治維新後の1873年以降のこととされており²¹²、この翻訳における措置は歴史的事実を重視する演劇界の風潮と『赤穂義士実話』以降の日本国内の「忠臣蔵」受容の傾向を反映したものであったのかもしれない。本文は、浄瑠璃本に依拠したと思われる部分もあるが、構成は大幅に変更されている。この変更についても、Prefaceの中で、主君の死の後に展開する忠義の復讐劇を際立たせるためであったと釈明されており、その結果として、序段と二段目はほとんど設定の説明だけにとどめ三段目とまとめて Act. I となり、復讐劇の本筋と関わらず物語を冗長にしているとして八段目と九段目が完全にカットされたため、11段の構成から5幕構成になった。

初版の Preface には、「仮名手本忠臣蔵」英訳の試みの目的が「日本において最も名高い芝居の読みやすい翻訳を供するため(to give a readable rendering of the most celebrated plays in Japan)」であったと述べられており、先に確認した外国人読者への配慮も相まって、一見すると初めから外国人の読者が想定されているように思われる。しかし、井上の英訳の出版事情からは、初版の本文は、むしろ、日本人の英語学習者を読者として想定して書かれたものであったと考えたほうが妥当であるといえる。

井上の英訳の初出は掲載誌や時期を含めて不明であり、タイトルや体裁についても現在のところ知ることはできないが、井上十吉没年に、井上同様、明治・大正期の英語教育に貢献した磯部弥一郎が『英語青年』に寄せた追悼記事によると、井上訳「仮名手本忠臣蔵」の初出は、英語雑誌において掲載されたという²¹³。井上には、英語雑誌に日本文学の英訳を発表した同種の取り組みが他にもいくつかあり、例えば、『平家物語』から敦盛の最期を英訳して雑誌『少年園』に掲載、式亭三馬の『四十八癖』の英訳を和文英訳例として『英語青年』

誌上で3回にわたって連載している。前者は国内向けの少年雑誌で、後者も、英語学習を志す日本人、ことに地方にあって直接高度な英語教育が受けられない人々から熱心に講読された雑誌である。明治・大正期には、『英語青年』以外にも、『日本英学新誌』や『中外英字新聞』など、日本人の英語学習者向けの雑誌の刊行がさかんに行われ²¹⁴、これらに掲載される英訳は、英語学習者のために和文英訳の実例を提供することを主な目的としたものであった。同じように英語学習者の需要を見込んだ英訳の出版として、第3章であげた丸善(丸屋)が版元となったディキンズ訳の「仮名手本忠臣蔵」も含まれる。無論、井上の英訳「仮名手本忠臣蔵」の出版が、外国人読者を全く想定していないものであったはずはないが²¹⁵、読者のなかに英語を学習する日本人の存在を相当な割合で想定していたと考えてよいだろう。実際に、ともに硯友社のメンバーであった江見水蔭と巖谷小波とが、井上の英訳「仮名手本忠臣蔵」を用いて学生時代に英語劇を演じたことが江見によって記録されている²¹⁶。

初版発行から14年が経過した1910年には、大規模な増補を行い、大幅に「仮名手本忠臣蔵」への忠実性を増した改訂版は、*Chushingura, or the Treasury of Loyal Retainers* として、出版元を中西屋書店に変えて出版された²¹⁷。第2版には、出版広告によれば、特製と並製の二種類が用意されており、並製は洋装で挿絵が2枚ついており、特製は、初版と同様に和綴じ本²¹⁸で、四十七士の羽織を意識した雁木模様と二つ巴の模様の象られた刀の鍔が打ち出された布地の表紙がつき、挿絵は、初版を飾っていた英洗の口絵・挿絵ではなく、北斎や国芳、国貞などの浮世絵がそれぞれの段に1枚、挿絵としてカラーで使用されている。第2版のPrefaceで翻訳者本人から説明されているが、初版において「物語の筋を一貫したものにする(making the thread of the story continuous)²¹⁹」ために省略された3つの段も第2版ではそれぞれ訳され、「仮名手本忠臣蔵」の11段の構成も忠実に訳文に再現されている。登場人物の名前も、初版で用いられた歴史上の名前ではなく、「仮名手本忠臣蔵」の浄瑠璃本文で使用される大星、塩冶、高といった名前に戻されている。ほぼ同様の内容で1917年に第3版が、井上没後となる1937年には、井上十吉の子息・井上東蔵の手を借り、秩入りで和綴じの縮緬表紙のついた豪華本として第4版が出版された。

第2版には、海外の読者へ向けた英訳としての意図が初版と比較してより強く感じられる。第2版の Preface を引用して比較してみたい。井上は、この第2版について、「この版なら、日本史上においてもっとも有名な復讐劇の一番よく知られた型について、読者諸君にいくらかでも伝えることが出来るはず(I trust the present work will at least give the reader some idea of the most popular version of the most famous vendetta in Japanese history.)²²⁰」と述べている。ここでも翻訳が誰に対して向けられているのか明示されていないが、「いくらかでも」という表現からは、原典である「仮名手本忠臣蔵」を知らない人々に対する意識が初版よりも強く表れていると考えることができる。さらに、こうした読者たちの作品の精神の理解を助けることを目的として、明治学院に所属するノムラ・ソースケ(Nomura Sosuke)という人物の助力を得て長い Introduction を付したと続けていることから、背景知識の解説がほとんどなされなかった初版と比較して予備知識のない読者への目配りが行き届いているといえるだろう。

さらに、海外での流通が確認できなかった初版とは対照的に、この第2版には、アメリカでの流通やイギリスで読者を得た可能性が指摘されている。イギリスの月刊誌 *Review of Reviews* 誌のアメリカ版 *The American Review of Reviews* に、井上の中西屋から出版された第2版が今月の本の1つとして「日本の民俗的な騎士物語の中で最も有名なものの1つ(one of the most famous Japanese folk-lore romances)」と紹介されている²²¹。1915年に発表された *The Faithful* について、メイスフィールドが参考にした書籍に関し、本人から直接回答を得たゲートンビー(Gatenby, E. V., 1937)によれば、1組の浮世絵、ミットフォードの *Tales of Old Japan*、「仮名手本忠臣蔵」の2つの英訳、そして、ロンドンにいる日本人学生から聞いた四十七士についての話が材料となっていたという²²²。ただし、この2つの英訳について、ゲートンビーは、1つはイギリスで出版されていたディキンズの英訳と推定し、もう1つを、横浜の写真家であった小川一真と、夏目漱石の恩師であったことで知られるお雇い外国人ジェームス・マードック(James Murdoch)の写真付きの梗概本ではなかったかと推定している。一方、日本における *Hamlet* の翻案とイギリスにおける「仮名手本忠臣蔵」

の翻案とを比較したケヴィン・ウェットモア(K. J. Wetmore Jr., 2008)は、メイスフィールドと忠臣蔵との出会いを、日本趣味であった W. B. イエーツ(W. B. Yeates)や大英博物館に勤務するローレンス・ビニョン(Laurence Binyon)との親交を通して手に入れたものではなかったかとしている。その具体的な題材としては、ゲートンビー同様、まずはディキンズの翻訳を参照したと推定しているが、2つ目の翻訳は、1910年にはイギリスで入手可能になった井上訳であったのではないかと指摘している²²³。ウェットモアは、初版と第2版のどちらがイギリスで流通していたか明言していないが、この1910年という時期のくくりから推察するに、第2版のことを指しているのであろう。

初版と第2版との間で注目されるもう1つの違いは、海外志向が強まった第2版のPrefaceにおいて、武士文化、元禄時代、赤穂事件など「仮名手本忠臣蔵」の背景の理解を助ける長大な説明の中に、初版には一切登場しなかった「武士道」の語が突然登場し、「忠臣蔵」の根幹をなす精神として位置づけられている点である。

次節では、第2版の「武士道」についての解説および『中央公論』で連続的に掲載された、井上哲次郎ら帝国大学教授陣による「武士道」に関する記事を確認し、第2版における井上十吉の「武士道」の定義が、愛国心と「武士道」との連続性を提示したこれらの記事と類似していることを示す。

3. 第2版のIntroductionにおける「武士道」の定義と国内の認識

本節では、第2版のIntroductionにおいて井上が説明した「武士道」の定義を確認したあと、1904年頃から始まった、日本国内における「武士道」の国粹主義的な解釈との類似を指摘する。

第2版のIntroductionには22の節があり²²⁴、江戸時代の社会や身分制度、仇討などについて説明を加えている。「武士道とその性質(Bushido and its Characteristics)」と題された節においては、冒頭で、赤穂浪人の討ち入りは「我国特有の産物(a peculiar product of our country)」である「武士道の精神の発露(outward expression of the spirit of Bushido)²²⁵」で

あったと述べ、続けて、「武士道」の性質を大きく、「武勇の誉れと武術の実践(the high esteem for military valour and practice of military arts)」、「忠義の道(the path of loyalty)」、「誠実さや清廉さの重視と金銭的な利益への無頓着(the high estimation of honesty and integrity and disregard of pecuniary profit)」の3点にまとめ、これらが奈良・飛鳥時代から続く歴史的展開の中で形成されてきたことを説いている²²⁶。「武士道」が日本固有のものであるという井上の考えは末尾においても再び言明されており、佐光が指摘していた井上の国粋主義的な要素が表れたものであったといえる。さらに、「武士道」の歴史的展開を述べた部分にも同じ傾向を確認することができる。

井上は、「武士道」の源流は物部氏や大伴氏といった親兵の一族に求められるとし、「彼らは、家名を汚すような行いは全て慎むようにと教えられていた(They were taught to refrain from all acts likely to bring dishonour upon their family name)²²⁷」という。しかし、こうした気風をもった武士階級は、平安時代に藤原氏が台頭することによって衰退の憂き目を見ることとなる。井上は、その原因は当時の中国との交流にあったとし、「彼らの文明が日本人の目を眩ましたせいで、中国を苦しめていた文弱を受け入れてしまった(whose civilization so dazzled the Japanese that they caught the literary effeminacy which then afflicted that country)」と述べている。その間も、「武士道」は地方の豪族たちの御恩と奉公で結びついた主従関係の中で生き続け、家名を汚すことへの怖れも変わらずに保たれていた。そして、特に台頭していく源氏と平氏のもとで、自分の恥は家の恥、一族の恥へと転じると彼らの心に刻まれた結果、この頃には、彼らは「1つの汚点もない名を保つことの重みに比べれば、自分の命を羽根のように軽く考えていた(held their lives light as feather when compared with the weight they attached to the maintenance of a spotless name)²²⁸」という。井上は、このような武士階級の心持について「他のどの時代にも世界中のどの国にも見られないほどのもの(a degree unparalleled in any other age or country of the world)²²⁹」であったと形容する。また、主君に対する「忠義の道(the path of loyalty)」を歩み続けることや、金銭の為に心を失うことがないことも美名を保つためには必須で、どんな理由であれ怠るこ

とがあれば、終生消すことのできない恥を負い、魂のない男として軽蔑されることになるという。そして、これらに比べると少し弱いけれども重要な「武士道」の要素として「有言実行(the keeping of one's word)」を付け加えており、一度口にしたことを命に代えても実現させないことは名前に傷をつけることになるためであると理由を説明している。

以上に確認してきたとおり、井上は、「武士道」を大きく3つの順守すべき事柄によって説明したが、これらすべてに共通するのは、いずれも、名誉を失わないためにはどのように行動すべきかという具体的な指針であった点である。つまり、井上が定義した「武士道」とは、武士階級の歴史の中で醸成された、命よりも名誉を重んずる生き方のことを指し、その対極に置かれたのが中国の影響を受けた平安時代の気風であり、金銭を重要視する商業主義であったということになる。本編が始まるよりも前に置かれる Introduction においてこうした「武士道の発露」として位置づけられたことにより、「忠臣蔵」は、自らの命を惜しまず、自身や主家の名誉のために投げ出した英雄の物語として打ち出されたことになる。

日本国内において「武士道」の語がもてはやされるようになったのは20世紀に入って以降のことであった。1904年から翌年にかけて、『中央公論』は、「武士道に関する諸大家の高見を叩き聊か思想界に資せむこと」を目的として²³⁰、連続的に、井上哲次郎や三上参ら東京帝国大学の教授陣、および、渡辺国武など政治家といった有力者が寄稿した「武士道」に関する記事を毎月掲載していた。これらの記事には、「武士道」の定義において一貫性が見られる。それは、忠節を「武士道」の第一義に置き、日清戦争、日露戦争での勝利に導いた、天皇を頂点とする日本民族に特有の愛国の精神として、部下を助けようと沈みゆく船に戻って戦死した広瀬中佐をその精神の象徴として位置づけている点である。これらの記事が掲載される幕開けとなる、1904年6月号の「武士道」と題された誌面には、少し前まではほとんど死語に近かった「武士道」がここ数年再び用いられるようになってきたと述べているが、この「武士道」の復活に一役買っていたと思われる、次節でとりあげる新渡戸稲造の *Bushido: the Soul of Japan*(1899, 以下 *Bushido* とする)²³¹については、この時期『中央公論』に掲載された「武士道」に関する記事はいずれも言及していなかった。

『中央公論』に掲載されたこれらの記事における定義と、井上十吉が第2版のIntroductionで行った定義との間には、「武士道」と日本民族との結びつきの強調、名誉の重視、そして拝金主義を対立項に置くという、3つの重要な類似が見られる。例えば、「武士道」の歴史について、井上哲次郎は「日本の武士道は我が民族あつてより以来発達して来たものであります。²³²」と書き、戸水寛人も、封建制度が倒れたため、今では日本人が全て武士となって武士道を貫いていると述べており²³³、日本の民族的統一性の象徴として「武士道」を顕揚していることがわかる。名誉についても、「義務と名誉と」という記事において、勝利を収めた日清戦争や優勢に立つ日露戦争での日本軍の強さの淵源は、彼らが義務ではなく名誉のために滅私奉公し戦っている点にあるという主張が見られ²³⁴、山川健次郎による「武士道とジェントルマン」においても、ジェントルマンと武士道との主要な共通点の1つとして「名誉を保つと申す事を厳しく戒める²³⁵」ことをあげている。また、拝金主義についても、「武士道」が一度衰退した原因が明治以来の拝金主義にあると井上哲次郎によって批判がなされていた²³⁶。

4. 第2版出版当時の井上十吉の活動

本節では、井上が第2版の出版当時、軍事教育会の対外的な広報外交²³⁷のための出版活動に積極的に関与していたことを確認し、第2版のIntroductionにおいて突然「武士道」が言及された背景となった可能性を指摘する。

第2版が刊行された頃、井上十吉は、1910年に軍事教育会から英文・和文併記版が発刊されることになった雑誌『大和魂』において岡田哲蔵と2人で英文翻訳者をつとめ、井上は主席翻訳者として執筆陣に名を連ねていた²³⁸。この雑誌には、毎号必ず、神崎弥五郎、原惣右衛門など四十七士の逸話が掲載され、各号の見開きに1枚付されたカラーの口絵もほぼ毎号、逸話が掲載される四十七士の絵が付けられ、『大和魂』にとっては基軸となる重要な連載であったと思われる。この連載の翻訳は、毎号、井上十吉の分担となっていた。巻末に記載された趣意書によれば、英文・和文併記版『大和魂』は、士友団の機関紙であった『士

友』に掲載された和文の記事が抜粋され²³⁹、これらの英訳が和文の対ページに併記されることで構成されていた。これらの和文記事の著者は、乃木希典や東郷平八郎、そして、すでに「武士道」を日本人の根幹的精神と提唱する主要な論客として紹介した井上哲次郎などが含まれる。

「武士道」の意味が、封建制度下の武士階級の精神に留まらず、近代化した日本における愛国心や国のために死ぬ覚悟が備わっていることへと転じていく中で大きな役割を果たしたのが、1890年に帝国大学の哲学科教授に日本人として初めて就任した井上哲次郎であった。井上哲次郎は、ストア学派や騎士道と武士道を比較してその優位性を繰り返し説き²⁴⁰、少年雑誌や、前述した『中央公論』などの総合雑誌、また、軍事教育会が発行する雑誌や書籍に「武士道」に関する文章を数多く寄稿し、日本国内での「武士道」の定義に大きな影響力を持つ人物であった。近代日本がナショナリズムを展開させていく中でいかに「侍」や「武士」のイメージを作り上げ、利用してきたのかを論じたベネシュは、井上哲次郎が新渡戸の定義を意図的に無視して「武士道」の国粹主義的な定義を唱える過程で、江戸時代の軍学者である山鹿素行を最重要な思想家として取りあげ、素行が配流された赤穂で四十七士に訓戒を与えたとする逸話と組み合わせ、素行と四十七士とを国に対する滅私奉公という意味での「武士道」の、象徴的な実践者として位置付けていたことを指摘している²⁴¹。

『大和魂』は、日本政府が出資し、イギリスにおける対日感情の改善を目指した広報外交の一部であったと考えられる。同種の取り組みとして、イギリスにおける反独感情を刺激し、日英同盟を堅持することを目的とした、1917年発刊の英文・和文併記の宣伝雑誌『新東洋』の存在が橋本(2017)によって指摘されている²⁴²。『新東洋』より7年前に発刊された『大和魂』の目的は、西洋諸国内の対立を煽ることではなく、日本国内における軍国主義と強く結びついた形の「武士道」の定義を西洋諸国へ提示することを目的としたものであったようである。『東京朝日新聞』に掲載された、『大和魂』の編集者であり軍事教育会関連の出版物を主に手掛けていた高橋静虎のコメント²⁴³によれば、英文・和文併記版の発刊の動機は、西洋諸国で広く読まれている新渡戸の *Bushido* に対する、「真の大和魂は決して去る浅薄なもの

にあらねば余は世界に向って誤解する勿れと云はんと欲す」という強い反発にあり、外国人に大和魂とは何たるかを正しく示すことを目的としていたという。

この英文・和文併記版『大和魂』が英語圏でどれほどの読者を獲得したのかについては、現在のところ不明で、今後の調査を要する。分かっていることは、軍事教育会が *London Times* を現地の代理店および宣伝媒体として、イギリスでの普及に取り組んでいたことである²⁴⁴。『大和魂』第2号および第3号の巻末には、*London Times* とのやりとりや、1909年12月16日の誌面に掲載された刊行広告が転載され、多くの需要が見込めて反響が大きい旨が記されている²⁴⁵。しかし、この紙面を鵜呑みにすることはできない。なぜなら、内川芳美(1993)が、1907年には経営に行き詰まり始めた *Times* の買い手として日本政府が有力な候補の1つに数えられていたことを紹介しているように²⁴⁶、当時の日本政府は、宣伝または広報外交の一環として欧米のメディアを影響下に収めようと努めていたためである。さらに、日露戦争期前後に、国民国家を強化する愛国心として「武士道」をイギリスに普及させると同時に、イギリスの対日感情を改善させることを目的とした日本政府と *London Times* の共犯的な関係を橋本順光(2013)が立証している²⁴⁷。

この極めて国粋主義的かつ軍国主義的な雑誌への井上の参加は、すでに佐光が指摘している井上の思想的傾向と考え合わせると自然なものであったように思われる。磯部弥一郎は、井上十吉の追悼記事において、この雑誌と井上との関わりについて、「此外に英文大和魂と題する雑誌を発行したこともあった。これは日本の武士道を外人に紹介するを以て主眼としたものであつた²⁴⁸」と、「武士道」の喧伝を目的とした雑誌に対して、井上十吉が単なる翻訳者ではなく、主体性を持って取り組んだことを伺わせる一文を書いている。さらに、『大和魂』巻末には、井上と岡田の両翻訳者は、彼らの余暇を雑誌の英訳作業に充てていたことが記されており、単なる翻訳官としての業務の域を超えて翻訳に取り組んでいたことも、『大和魂』への井上の積極的な参加を裏付けている。

第2版の Preface には、井上が再び「仮名手本忠臣蔵」に取り組むこととなった経緯について、「最近になって、中西屋から、再出版の為に私の古い翻訳に手を入れてくれないかと

頼まれた(I was lately asked by Messrs. Nakanishiya to touch up my old translation for republication.)²⁴⁹」と、あたかも、第2版の出版は単に出版社からの要請に応じたものにすぎなかったかのように書かれている。しかし、本節で述べてきた井上十吉の『大和魂』への首席翻訳官としての関与と、『大和魂』における「忠臣蔵」の丁寧な取り扱いから考えると、むしろ、井上十吉自身が積極的に第2版出版のために動いたと考える方が自然ではないだろうか。そして、第2版のIntroductionにおいて「武士道」と「忠臣蔵」とを結びつけた背景も、『大和魂』の主旨が、井上哲次郎主導のもと提唱されていた国家への滅私の奉仕という定義の喧伝であったことから、自ずと導き出すことが可能である。

井上十吉の「仮名手本忠臣蔵」の翻訳が17年経って改めて外国人向けに翻訳し直された背景には、井上十吉自身が参加した、日本人の根幹をなす精神が愛国心にあることをイギリスに発信したいと考える軍事教育会の出版活動があった。そして、軍事教育会の中心となった論客が、山鹿素行や四十七士を「武士道」の象徴と位置づけていた井上哲次郎であったために、井上十吉も、「武士道」と「忠臣蔵」との結びつきを改めて明確化した英訳を出版することに必要性を見出したのではないだろうか。赤穂浪人の討ち入り事件を「武士道精神の発露(outward expression of the spirit of Bushido)」であるとする英訳の序文の記述は、彼らを「武士道」の実践者とする井上哲次郎の考えとよく符合している。

次節では、新渡戸の *Bushido* における「武士道」の定義を確認し、イギリスにおける日本政府の広報外交の一環として出された出版物での定義との違いを明らかにすることによって、井上十吉が第2版で「忠臣蔵」と「武士道」とを結びつけたことの意義をより一層明確化させる。

5. 「武士道」の語をめぐる海外の認識

井上十吉が、外国人読者をより強く意識した第2版において、軍事教育会や『中央公論』で提唱された自分の命よりも名誉を重視する「武士道」の定義をIntroductionで述べ、「忠臣蔵」と結びつけたことはこれまで検討した通りである。本節では、これが日露戦争前後の

時期にイギリスで行われていた宣伝外交の方向性と軌を一にした動きであったことを示す。まず、西洋諸国における「武士道」の語の認知に貢献した、1899年に出版された新渡戸稲造の *Bushido* における定義を確認し、次いで、宣伝外交と関連してイギリスで出版されたアルフレッド・ステッド(Alfred Stead, 1877-1933)によって主体的にまとめられた *Japan by the Japanese*(1906)収録の新渡戸の一稿での定義との違いを示す。

病氣療養のためにアメリカに滞在中であった新渡戸がフィラデルフィアで出版した *Bushido* は、1905年にはニューヨークで第10版が出版されるほど成功を収めた²⁵⁰。新渡戸は、初版の序文において、ベルギー人法学者エミール・ド・ラブレー(Emile de Laveleye)に、日本では宗教教育もなしにどのように道德教育を行っているのかと質問され、その答えが日本人の精神に息づく武士道にあると思いついたという執筆の経緯を述べている²⁵¹。また、既に世に知られているチェンバレンやハーンらの著作に対する自身の立場を、「彼ら名高い作家たちが良く見積もって事務弁護士や法廷弁護士であるところ、私は被告自身の態度をとることができる(I can assume the attitude of a personal defendant, while these distinguished writers are at best solicitors and attorneys.)」と述べている。非を追及される被告の立場に日本を仮託したこの序文には、日清戦争以来、西洋諸国で吹き荒れていた黄禍論に対する反論として *Bushido* を含めた一連の日本論があるという新渡戸の解釈が示されていると考えていだろう。

新渡戸の「武士道」の定義は、人の行動を規定する根底には、生命よりも優先されるべき自身の名誉、家の名誉があったとする井上十吉のものとはやや異なっていた。*Bushido* の本文の冒頭で、新渡戸は「騎士道(chivalry)」を武士道の訳語にあて、仏教、神道、儒教の3つが日本人の精神の中で統合されて培われてきた道德であるとしており²⁵²、この時点ですでに、武士階級が戦いの中で「武士道」を築いてきたとする井上十吉の理解との違いは明らかである。さらに、「武士道」が追及したものは「清廉もしくは正義(Rectitude or Justice)」であったとし、「義士(清廉な者)」という通り名は、学や芸を表すいかなる名称よりも優れたものと考えられていた(the epithet Gishi (a man of rectitude) was considered superior to any

name that signified of learning or art)²⁵³」と述べ、その例として四十七士が義士と呼ばれていたことに言及している。「武士道」の精神の体現者として四十七士を位置づけている点は井上十吉や井上哲次郎の考え方も合致しているが、彼らが「武士道」を行う中で重要なものと位置づけていた名誉について、新渡戸は、もちろん武士を特徴づける要素に数えてはいたが、その負の側面にも言及していた。それは、武士が自分の名誉を守るために無辜の命をも奪うことがあり、武士はこれを「武士道」の他の徳目を習得することによって制御しなければならなかったというものであった²⁵⁴。

「武士道」の語が新渡戸の著書が成功を収める 19 世紀末まで西洋人の間で全く知られていなかったことは、東京帝国大学のお雇い外国人であったチェンバレンがまとめた *Things Japanese* の記述の変化によって確かめることができる。*Things Japanese* は、日本に関するあらゆる事柄について、1870 年代から本格的に活動を開始した日本アジア協会の研究成果に基づいて百科事典の形式でまとめたもので、1890 年に初版、1891 年に第 2 版、1898 年に第 3 版、1902 年に第 4 版、1905 年に第 5 版、そして、チェンバレン没後の 1939 年に出版された第 6 版まで刊行されている²⁵⁵。その内容は、研究の進展や、人々の関心などの時流を反映して改訂され、項目も版ごとに増減がなされていることから、英語圏における日本に関する認識の通時的な変化の指標とするのに適している。

「武士道」の語は、*Things Japanese* のいずれの版においても立項されておらず、用例が見られるのは、1902 年に出版された第 4 版以降のことである。第 4 版における「武士道」の用例は、「日本についての本(Books on Japan)」の項目と「侍(Samurai)」の項目に見え、いずれも新渡戸稲造の著書 *Bushido* の題²⁵⁶として言及されている。チェンバレンによって、新渡戸の本は、近年発表された日本人知識人が英文で書いた日本に関する本のなかで特に大きな反響を呼んだ一篇であったと紹介された²⁵⁷。また、「侍」の項目の中では、ミットフォードの *Tales of Old Japan* などとともに参考図書としてあげられ、「道徳的規範や日本の騎士道の理論的な検討(a theoretical discussion of Japanese chivalry and its moral code)²⁵⁸」について知るのに向いた本として紹介されている。ここで確認したいのは、1902 年の段階

では、「武士道」は独立して立項されるほどには重要性を認められておらず、概念としては依然「侍」に包含されるものであったということである。それが、1927年に出版された第5版増補版では、「武士道」に関する記述が巻末の Appendix に付け加えられている。これは、1912年に *The Rationalist Press Association of London* において発表された、チェンバレンの“The Invention of a New Religion”と題された論文が再掲載されたものであった。

この論文では、近年になって「武士道」があたかも古来受け継がれてきた日本人の精神であるかのように持てはやされているが、アーネスト・サトウ(Earnest Satow)ら日本をよく知る外国人がこれまで「武士道」に関する著作を残していないのは、最近になるまで全く知られていなかった、近代の発明品なのではないのかという趣旨であった²⁵⁹。「武士道」の概念を近代日本の発明品と述べたチェンバレンの論には、佐藤堅司(1939)²⁶⁰をはじめとして、「武士道」を日本民族が脈々と受け継ぐ、国民性と一体化したものとする視点から日本人の側からの反論もあった。チェンバレンの一連の記述から分かるのは、新渡戸稲造の *Bushido* は、侍の行動規範や美学を「武士道」という名称で改めて国内外に周知させるのに一役買い、その前と後では海外での認知において、天と地ほどの差があったということである²⁶¹。

「武士道」の語は、このように、新渡戸の著書によって西洋諸国での認知が大きく進んだが、その一方で、日露戦争中の日本政府の宣伝および広報外交からも影響を受けており、新渡戸の行った定義がそのまま定着したわけではなかった。実際、彼自身の定義すら、名誉を大きく取り上げたものが見られた。親露派と親日派とが混在するイギリスにおいて、駐英日本大使として広報外交を指揮する末松謙澄と親交の深かった親日派のジャーナリストであったステッドは、快進撃を続ける日本の原動力として愛国心に注目し、自ら率先して日本の著名人に寄稿を依頼し、1906年に *Japan by the Japanese* を出版した²⁶²。この本の「武士道」の章は新渡戸が執筆しているが、この一稿は単なる *Bushido* の簡易版ではなく、近代化されて以降の「武士道」にも目を向けたものだった。「武士道」という同一の題材について述べていながら、新渡戸の2つの著作の間には「名誉」の位置づけにおいて、決定的な違いが見られた。*Bushido* が「武士道」の訳語として一貫して「騎士道(chivalry)」を当て、「清廉」

や「正義」をその中心となる徳目として位置づけたのに対し、*Japan by the Japanese* では、「名誉の掟(the Code of Honour)」を新たな訳語に加えてこれを本文中に繰り返し用い、次に引用する一文に明らかなように、日本人全体にとって重要な精神としてこれを重視した。

名誉という、種族の先天的な感覚は、我々の道德のたった1つの安全装置であり、個人としての行いに対するたった一つの厳然たる抑止であり、愛国心や「忠義」の基盤そのものである——「名誉」こそ、日本人を倫理的な世界に繋ぎとめているたった1つのものである。

That inborn race instinct of honour is the only safeguard of our public morals, the sole imperative check on our private conduct, the one foundation of patriotism and Loyalty — Honour is the only tie that binds the Japanese to the ethical world²⁶³

この相違は、必ずしも新渡戸の変節を表したものではなく、この一稿のために特別に用意された言説であったと思われる。なぜならば、*Bushido* は1905年に第10版が出される際、加筆修正が行われたものの、1899年に主張された「名誉」を守る衝動は抑制されるべきという位置づけに変更はなく、「武士道」に対する「名誉の掟」という訳語も使用されていなかったからである。

「武士道」は、日露戦争期のイギリスに対する日本政府の宣伝外交において力を入れて喧伝されていた。橋本順光(2013)によれば、1904年8月から10月にかけて、日本軍は外国人の従軍記者に向けて *Bushido* を配布し、本を受け取った *Times* の従軍記者だったチャールズ・レピントン(Charles Repington)が帰国後、イギリスにおいて「武士道」の語を日本の近代国家としての台頭を支える愛国心として広めた立役者となったという²⁶⁴。新渡戸の定義の変更も、命に代えても義務を全うし名誉を守るという、広報外交における解釈の方向性に対応したものであったと思われる。当時は、前節でも言及したように、日本軍の強さは兵士が名誉のために戦うことで支えられているとする見方が日本国内で声高に主張され、第4

章のキッチナー元帥の来日時案内からも分かるように、価値ある同盟相手としてイギリスに評価されるよう軍事力の強さが日本政府によって意識的にアピールされていた。

一方、日本人にとっては自然なものであった「武士道」の象徴的な例としての「忠臣蔵」という表象は、依然として、この時期に書かれた知日派の外国人の著作においてすら見られなかった。例えば、*Japan: an Attempt at Interpretation*において、ハーンは、「忠義の宗教 (“The Religion of Loyalty”)²⁶⁵」の章において、ミットフォードの“The Forty-seven Ronins”を多く引用しつつ「忠臣蔵」を日本の忠誠心をよく示す例として説明している。その中で「武士道」の語は一度も使用されることはなく、四十七士の仇討は「亡くなった主君への義務や恩義の感情から行わざるを得なかった殺害の物語(the story of a homicide exacted by the sentiment of duty or gratitude to a dead master)」としてまとめられている。また、1906年に明治天皇へのガーター勲章授与に随行し、36年ぶりに再来日したミットフォードは、滞在中の様子を綴った *The Garter Mission to Japan* (1906)において、日露戦争後の日本を描写している。その中でミットフォードは、日本を日露戦争での勝利に導いた精神として「武士道」を大きく取り上げているが、彼が泉岳寺を再訪した際の記述にも「武士道」の語は使用されていない。ここでは、四十七士の精神は、「忠誠時代の侍の行いを左右した不文律(the unwritten laws which governed the conduct of the Samurai in mediaeval times)²⁶⁶」と過去の遺物のように描写されていた。一方、ミットフォードが説明した「武士道」の定義は「何ものにも勝る義務。父祖の地への義務。自身の命よりも優先される義務。(First of all things duty. Duty to the Fatherland. Duty before life itself.)」であり、井上哲次郎が提唱した内容や井上十吉の第2版での説明ともぴつたりと重なる。ミットフォードは、他にも、優れた兵士を養成するのに適した概念の名称としても「武士道」に言及し²⁶⁷、この精神の象徴として、日露戦争で戦死し、英雄として崇められていた広瀬武夫をあげていた。

このように、イギリスに向けて喧伝された「武士道」は、果たすべきことを果たし名誉を守るためには命を捨てることも厭わない日本人に特有の資質という、日本国内の国粋主義的な定義と同じ方向性に進んでいた。しかし、1900年代半ばまでの知日派のイギリス人の

記述を確認する限り、彼らにすら、「武士道」が日本の歴史に根差した近代に受け継がれる正統な日本の国民性であるという部分は認識されないままであったようである。この中で1910年に発表された井上十吉の第2版のIntroductionは、イギリス人へ向けては「忠臣蔵」と「武士道」とを結びつけることによって近代以前から始まる歴史を提示し、日本人へ向けでは、国に対して命がけの奉公をする日本人は西洋人にすら敬意を抱かれるという図式の定着を促進したのではないだろうか。国粋主義者であった三宅雪嶺が主宰する総合雑誌『日本及日本人』の1910年正月号に組まれた「忠臣蔵」特集には、当時貴族院議員であった高橋是清も寄稿し、「忠臣蔵」の海外への影響について述べている。この記事で、高橋は、赤穂浪人の討ち入りについて、「其の精神たるや私を捨てて公に奉じた犠牲的精神であつて、其の精神は今日に於ても充分学ぶべきものであると考へる」と書き、さらに、この滅私奉公の精神こそ国家を隆盛に導き戦勝をもたらしたのであり、「此の精神は独り我国ばかりでない、欧米諸国でも尊崇されて居る」と続けた。高橋が欧米諸国から尊敬を集めていると述べた犠牲的精神は、近代国家としての日本の対外戦争における勝利をもたらした滅私の精神という点で井上哲次郎らが提唱した「武士道」と通じている。

6. おわりに

ここまで、井上十吉の英訳による「仮名手本忠臣蔵」の初版と第2版との相違点の検討から始発し、初版と第2版における用途の違いや、海外志向を強めた第2版の特徴として「武士道」と「忠臣蔵」とを結びつけた点があげられることに注目し、考察を行った。

第2版の出版の背景には、「武士道」の語の日本国内におけるイデオロギーとしての重要性の向上に起因する、国内と海外での2つの状況の変化があった。日本国内において、「武士道」の語は、日露戦争を戦い抜く精神としてイデオロギーとして国民の士気高揚のために用いられ、また、海外に対しては、黄禍論に対する反論や同盟国イギリスに対する宣伝および広報外交のためにも用いられていた。井上十吉は、第2版出版当時、軍事教育会が広報外交の一環として海外へ向けて発行した雑誌『大和魂』の出版活動に主体的に参加しており、

軍事教育会の主な論客であった井上哲次郎が提唱する、拝金主義の対極にある、名誉を守り抜くために滅私の精神で義務を果たすという「武士道」の定義が、井上十吉が第2版において述べた説明とも一致していることから、本章では、『大和魂』の出版活動が第2版の出版の背景にも関係している可能性を指摘した。さらに、軍事教育会が批判対象としていた新渡戸稲造による「武士道」の定義が、イギリスへ向けた広報外交に関連する出版物 *Japan by the Japanese* においては名誉を守ることに重きを置いたものに変更されていたことから、広報外交周辺の「武士道」に関する言説の方向性が統一されたものであったことも併せて指摘した。

次章では、1915年に初演されたジョン・メイスフィールドの「忠臣蔵」を翻案した戯曲 *The Faithful* とその劇評を確認し、すでに先行研究において、受容の媒体が翻訳から翻案へ移行したことをもって受容の一里塚と位置づけられているこの作品が、享受者であるイギリス人の解釈においても、イギリス人および日本人が関わった約半世紀にわたるイギリス人の「忠臣蔵」受容の1つの結実が見られることを論ずる。

第6章 ジョン・メイスフィールドの *The Faithful* の劇評に見えるイギリス人の四十七士観の変化

1. はじめに

The Faithful は、イギリスの詩人ジョン・メイスフィールドによって「忠臣蔵」に基づいて書かれた戯曲である。まず、1915年にバーミンガムで初演された後、1919年にはロンドン、ニューヨーク、1921年には東京、1924年にはマノアでも上演され、その後1930年代までは上演の記録が確認できる。開国以降、これまで検討してきたように、「忠臣蔵」は西洋人の間で話題にされてきたが、*The Faithful* は紹介や翻訳という形ではなく、翻案という手段をもってイギリスの文学作品として創作されたという点で、「忠臣蔵」の海外における受容史を考える上で重要な作品である。太田は、これを「翻訳からの脱皮」として、イギリスにおける受容の一里塚として位置づけている²⁶⁸。本章では、*The Faithful* が翻訳から翻案へという枠組みの変化の他に、享受者であるイギリス人の「忠臣蔵」観の変化をも反映した2つの意味で記念碑的な作品であることを検証する。

The Faithful に関する研究は、英文学研究におけるメイスフィールド研究の分野²⁶⁹と、復讐劇であるハムレットと中心としたシェイクスピア演劇との比較²⁷⁰、および日本文学や英文学史の分野から、「忠臣蔵」受容²⁷¹や西洋における日本風演劇の受容を明らかにする一例²⁷²としてアプローチされてきた。レオナルド・ストロング(Leonard Alfred George Strong)によれば、メイスフィールドの戯曲が「現実的で所帯じみてさえいるテーマの劇詩(poetic plays with realistic, even domestic themes)」、「歴史もの(historical plays)」、「おそらく日本の演劇や彼の古典への忠実な愛情に影響され、イエーツやボトムリーの示した方向へ向かってリアリズムからさらに遠ざかった演劇(plays in which, influenced probably by the Japanese theatre and by his faithful love for the classics, Masfield has gone further away from realism, in the direction pointed by Yeats and Bottomley)」の3つのタイプに分類されてきたという²⁷³。*The Faithful* はこの3つ目のタイプにあてはまり、メイスフィールドのエリザベス朝演劇の実践として、また、西洋演劇における日本文学(能)を取り入れた先駆的な取

り組みとして、メイスフィールドの制作した戯曲の中では重視されている。

*The Faithful*の執筆動機について、メイスフィールド研究の分野をはじめとする多くの論考は、メイスフィールド自身の言²⁷⁴に基づき、メイスフィールドの日本の演劇に対する興味や「仮名手本忠臣蔵」への関心によるものであったとしており、初演の前年に勃発した第1次世界大戦と関連させる論考は少ない。一方、日本の近代国家としての歩みと「忠臣蔵」の受容を関連させる中で第1次世界大戦からの影響についても言及した宮澤(2001)は、*The Faithful*が「第一次世界大戦中、西部戦線が膠着状態に陥ったとき、連合軍の士気を鼓舞するために書かれた」との考えを示している。メイスフィールド自身の発言としては、前述した手紙を除いて執筆の動機を語ったものは見られない。しかし、宮澤は、発表された時期や、刃傷事件の原因が国同士の争いになっている点、そしてアサノが朝廷の大使から「自由思想家(free thinker)」と非難される点に第1次世界大戦におけるイギリス・フランスとドイツ・オーストリアとの衝突を読み取ることができる²⁷⁵、主人公であるクラノには「同盟国の侵略に断固として抗する自由主義諸国の勇敢な戦士」が擬されていると述べた。また、宮澤は、*The Faithful*が国の独立をかけた戦いを筋としている点が「赤穂事件を国家の独立運動に擬す翻案劇の典型」であると位置づけているが、これについては、宮澤の同年に発表された論考によってより正確に理解することができる。宮澤は、近代初期の西洋人の「忠臣蔵」受容を、欧米列強という外圧に対して日本の独立を守ろうとした攘夷運動と重ねて理解した「独立運動型」と分類しており、ここでは *The Faithful*がその典型的な例である述べていた。宮澤の論理は、*The Faithful*の内容と攘夷運動と重ねた「忠臣蔵」の受容を根拠にしたものであったが、制作および上演された時期と内容との対応の検討や劇評の確認によって、実際にプロパガンダとして制作され、機能したのかを検証する余地がある。

メイスフィールドの功績として現在でもよく知られているのは、1933年にロバート・ブリッジズ (Robert Bridges)の後を継いで桂冠詩人に就任したことや、*Lost Endeavour* (1910)、*The Bird of Dawning* (1933)などの小説および *The Midnight Folk* (1927) や *The Box of Delights* (1935)といった児童書であり、劇作家としての側面は注目されることは少ない²⁷⁶。

彼は、1878年にヘアフォードシャーで生まれ、両親が早世すると兄弟ともども叔父の家で養育された。1891年に商船乗組員の養成学校へと進学し、1894年からは航海に参加するも1897年にイギリスへ戻って職を辞した。しかし、新しい職がなかなか見つからず、思い詰めながら執筆活動を始め、航海の経験に基づいた叙事詩 *Salt-Water Ballads* (1902)、*Ballads* (1903)によって知名を得、1900年以降、イエーツやその周辺のイマジズム詩人たちとの文学的交流を始めた。1900年代後半からは劇作家としての活動も始め、1911年にはシェイクスピアに関する研究書を発表し²⁷⁷、彼自身の作品もシェイクスピアの作品を意識したものが多い。1914年に第1次世界大戦が勃発すると、すでに徴兵されない年齢となっていたにもかかわらず、赤十字の救護員に志願し、すでに激戦が繰り広げられていた西部戦線に身を置き²⁷⁸、*The Faithful*が上演された1915年の冬を戦地で迎えた。戦時中は、イギリス軍のガリポリ島での敗退を描いた戯曲 *Gallipoli*(1916)やノンフィクション *The Old Front Line*(1917)など、大戦を題材とした作品を戦時中から発表し続け、アメリカに参戦を促すための宣伝外交機関(War Propaganda Bureau)の出版部ウェリントン・ハウス(Wellington House)の主要な作家の1人として、その活動に携わっていたという²⁷⁹。*The Faithful*は、メイスフィールドが第1次大戦を直接題材とした一連の作品を発表する直前に発表した作品であったが、後述するように、メイスフィールド研究においては、大戦勃発以前の作品と同類として扱われることが多い。

本章では、メイスフィールドの意図ではなく、発表された *The Faithful*がイギリス人の観衆の目にどのように映ったのかを問題とすることにより、この作品がイギリス国民に対する第1次世界大戦への戦意鼓舞を目的として書かれたとする宮澤論の再検討を行う。なぜなら、*The Faithful*が戦争の寓意として解釈されていたとすれば、イギリス人の間に四十七士を自らの仮託として受け入れる見方が根付いていたことになるためである。まず、先行研究によって明らかにされている制作時期および第1次世界大戦中の上演について確認し、*The Faithful*の内容や演出が、その時期の戦意鼓舞のための文学作品として適当なものであったかを検討し、次いで、劇評を確認する。

2. *The Faithful* の内容：第 1 次世界大戦の寓意としての検討

本節では、先行研究によって明らかにされている制作時期や第 1 次世界大戦中の上演時期と物語の内容との対応を検討し、*The Faithful* の内容に第 1 次世界大戦の寓意と読まれる可能性があったのか、寓意として読まれる可能性があるとして、イギリス人の戦意を鼓舞するものであったのかどうか、検討を行う。

すでにふれたように、メイスフィールド研究において、発表自体は開戦後の 1915 年であるにもかかわらず、*The Faithful* は第 1 次世界大戦勃発前に制作された作品と並べて論じられる。その理由は、メイスフィールド自身が編集した全集において、1916 年に出版された *Good Friday*(1916) とともに戦前の作品としてまとめられていることと、その序文において「忠臣蔵」を翻案する構想が 1912 年からあったこと、および実際の制作時期も 1913 年 1 月から 5 月であったことが明かされているため²⁸⁰と思われる。メイスフィールドの *The Faithful* 制作自体は戦争とは関わりのないところで行われたことが明らかになった以上、戦意鼓舞を目的として制作されたとする宮澤の見解は誤りということになる。しかし、作品の発表と制作時期には 2 年ものずれがあり、*The Faithful* の初版が出されたのは戦時中の 1915 年 7 月で、初演は同年 12 月であった。これについては、メイスフィールドが戦前の自作をまとめた序文に「我々はやろうとしていたことができなかった（戦争がそれを妨げた）が、やろうとしてみることに楽しみを見出していた (We did not do what we hoped to do (the war stopped that), but we had good fun in trying)」と述べていることから、1914 年の第 1 次大戦の勃発によって上演する準備が難しくなったためと考えられる。

では、メイスフィールドが戦時中に強いて *The Faithful* を上演したことには、どのような意味があったのだろうか。*The Faithful* は、3 幕 2 場の構成の物語で、概要は次のようなものである。隣国の領主キラによって領土を侵されていた君主アサノは、帝の大使に裁定を求め、キラ邸で開かれた裁定の場で、アサノはキラの策略により接待の席で失態を誘発させられ、キラに切りかかってしまう。アサノは、罰として領土の没収、切腹を命じられ、切腹の

場に駆け付けた家老クラノは、アサノからキラに領土を渡さないように遺言される。クラノはアサノ領へ戻り、事の顛末を家臣団に話し、アサノの弟に家を継がせるために、朝廷の裁定が下るまではキラに復讐しないことを皆に約束させる。しかし、キラの軍勢はアサノ領への侵攻を開始し、家臣団は、お家再興が叶わないときにはキラへの仇討を行うことを約束して別れる。それから1年、妻と離縁したクラノは狂人のふりをしてキラの家臣の目を欺き、裁定を待ったが、アサノ領は正式にキラのものとなされお家再興は叶わなかった。復讐のために家族や恋人を犠牲にしつつも、アサノ家臣団のほとんどは仇討をあきらめていた。しかし、キラの公爵就任前日にクラノは正体を現し、残っていた仲間とキラ邸を襲撃しキラを討ち取った。クラノをはじめとする浪人たちは、大使が禁じた仇討を行ったことで切腹を言い付けられるが、知らせに来た使いからは忠義を認められ、彼らが腹を切るところで舞台の幕が下りる。

このように、*The Faithful*の展開だけを追うと、浪人たちは主君の仇を討ち、わずかに朝廷の使いから忠義者と呼ばれはするが、その結果アサノ領が回復されるわけではなく、戦意鼓舞として分かりやすい、勇壮な勝利の物語とはほど遠いものである。物語の中心も、副題である「3幕ものの悲劇(*A Tragedy in Three Acts*)」が示すように、キラの侵略に端を発してアサノの忠臣たちが経験する悲劇にあった。メイスフィールド研究において、争いがもたらす悲劇を主旨とした物語は彼の戦前の作品に共通する平和主義が表れているとされ、*The Faithful*はその中でも特に強くその特徴を持つ作品として位置づけられている。1921年までのメイスフィールドの作品について論じたウィリアム・ハミルトン(W. H. Hamilton)は、メイスフィールドが存命中の1922年に第1次世界大戦終結までの彼の作品に関する研究書をまとめ、*The Faithful*では国家間の争いやその正当化に対する嫌悪というメイスフィールドの理想主義者としての思いが「熱心に語られている(spoken passionately)²⁸¹」と評した。

このような主君や同志の死、故郷の喪失など戦争によって生じる悲劇を描いた戯曲は、大戦中の他のイギリスの詩人たちの動向と照らし合わせてみると、1915年12月という時期に上演されるにふさわしい作品であったことが分かってくる。メイスフィールドの親しい

友人であった文人ビニョンは、開戦直後である1914年9月に *The Times* に戦争詩 *For the Fallen* を発表していた。この詩は、出征した若者たちの犠牲の上に自由が守られ勝利があることを詠ったもので、イギリスの勝利が描かれている点では *The Faithful* よりも救いのある内容であったけれども、ビニョンの伝記的研究を行ったハッチャー(1955)によれば、当時の *The Times* の戦況報告や他の多くの詩人たちの戦争詩とは全くそぐわないものであったという。ハッチャーは、戦争詩の内容に変化が見られるのは、1915年のルーやイーペルにおける敗退や1916年のソンムでの絶望的な戦いによってイギリス国民が戦争の現実を目の当たりにした後のことであったとしており²⁸²、*The Faithful* の初演時期はちょうど、戦争の大義名分よりもその喪失に目が向けられ始めた頃のことであった。

For the Fallen でビニョンが詠ったように、勝利がもたらす栄光ではなく戦争に付随する喪失や悲哀を強調する文学思潮は「平和主義(pacifism)」と言われ、一般的には第1次世界大戦を通してもたらされた潮流であるとされている²⁸³。しかし、その代表的な作家に数えられているメイスフィールドの場合、戦前の作品である、カエサルに敗北したポンペイウスを主人公とした *Pompey the Great*(1909)からすでにその傾向が認められ²⁸⁴、*The Faithful* にも同様の指摘がなされていることはすでに示した通りである。そして、文筆活動や戦地での奉仕を通して戦争協力を行ったけれども、メイスフィールドもビニョンと同様、開戦直後から戦争に対する悲観的な詩 *August, 1914* を発表している。この詩における国土のイメージや戦いによって失われる命や絆というモチーフには *The Faithful* との共通点が見られ²⁸⁵、*The Faithful* がメイスフィールドの戦時中の作品とも隔絶したものではなかったことを付け足しておきたい。

3. *The Faithful* の劇評

本節では、大戦の悲惨さがイギリス人の間で共有されるようになった時期に書籍の形で発表され、次いでバーミンガムでの初演を迎えた *The Faithful* の書評および劇評を確認する。これらの中には、日本の演劇をいかに翻案したのかを分析した評はもちろん見られるが

²⁸⁶、本作を悲劇の普遍性によって理解し、当時のイギリス人の状況と重ね合わせた評も確認される。

1915年7月にハイネマン(Heinemann)から書籍の形で出版されると、その翌月には *The Saturday Review* に書評が掲載された。全体的な評価は、簡潔すぎるほどに表現がそぎ落とされており、英語的な美しさに欠ける点で「明らかに発展途上の芝居(distinctly a stage upon the way)」であると必ずしも高いものではなかったが、この書評は、メイスフィールドがあえて18世紀の日本を舞台にした芝居を制作した意図を、復讐が普遍的な悲劇の主題であることに基づいて、次のように解釈している点で注目に値する²⁸⁷。書評者は、物語の設定が、まるでメイスフィールドが「彼の悲劇—普遍的な主題の悲劇—から、同時代を連想させるいかなるものも消し去る(to eliminate from his tragedy—the tragedy of a universal subject—any suggestion of contemporary allusion)」ことを意図しているようだとしながらも、成り上がり搾取し続けるキラの人物造形には「社会主義者が持つ儲かった地主のイメージとの類似(a likeness to the Socialist idea of a successful landlord)」という現代的な悪のイメージを隠しきれておらず、同時代とのつながりを完全に断つことに成功していないと評した。

同年12月に初演の幕が開けた2日後に *Birmingham Mail* に掲載された劇評は、*The Faithful* に描かれた悲劇と現代とのつながりに焦点を当てており、本作がいよいよ悲惨な様相を呈してきた第1次世界大戦を戦うイギリスとぴったりと重ね合わせて理解されたことにより、観客の心に訴える悲劇として受け止められていたことを示している²⁸⁸。まず、評者は、メイスフィールドが意図したことではないだろうとしながらも、芝居らしい詩的で装飾的な表現を削ったことが現代のイギリス人の状況を自然に重ね合わせることを可能にし、全体を「今この時に元気づけるような慰めるような気持ちをもたらししてくれる(it brings a heartening and consoling spirit at this time)」ものだと評価した。このような効果をもたらしたのは、死を覚悟しながら臥薪嘗胆して正義を行う浪人たちについて「ここには美学があり、今日、義のために戦う私たちの騎士たちを思い起こさせる(There is beauty here and inspiration for our knights who fight to-day for the cause of justice)」と述べられているよう

に、イギリス人兵士が重ね合わせて理解されたためである。評者は、クラノらに討たれる「良心のなさと巧妙さ (unscrupulousness and ingenuity)」によって成り上がった悪役であるキラについても、「無意識のうちに (unconsciously)」ドイツが思い浮かぶと書いており、ここに、イギリス人が四十七士に自らを仮託するという現象が初めて確認できるのである。

こうした *The Faithful* を通して「忠臣蔵」を近代に生きる自分たちの物語として鑑賞した評は、1919年のロンドンおよびニューヨークでの公演に際しては見られず、異質性に注目したものが目立つ。ステージ・ソサエティ (Stage Society) によって上演されたロンドン公演は、演出や演者に対する批判が劇評には目立つが、作品そのものについての評価も1915年からは変化が見られた。例えば、*The Faithful* の全体の印象は「威厳、美学、そして異質さ (dignity, beauty, and strangeness)²⁸⁹」とまとめられ、上演については、おかしな演出のために些末なことが気になってしまうとして、「日本の名誉や忠誠の立派な水準や、風変りで間違いなく日本的な礼儀と宗教の混同をうさん臭く思う (sometimes we suspect a noble standard of Japanese honour and fidelity; sometimes a quaint and doubtless very Japanese mixture of etiquette and religion)²⁹⁰」という評価が述べられていた。また、ニューヨークの大規模な劇場ギャリックシアター (Garrick Theatre) での上演に関する劇評では、西洋人が対極にある東洋の劇を演じることに往時のミカド (*Mikado*, 1885) を重ねて、真剣な場面でおかしみを感じないでいられるだろうかとする劇評²⁹¹が発表されていた。初演時の評に見られた四十七士に対するイギリス人の自己投影は、第1次世界大戦の苦しい戦況という受容する環境に影響された、限定的なものであったといえるだろう。

4. おわりに

本章では、宮澤によって指摘されていた *The Faithful* と第1次世界大戦とのつながりを掘り下げることにより、1860年代には西洋人にとって他者の象徴であった四十七士が、1915年には第1次世界大戦での苦境の中で、イギリス人が自らを仮託することができる対象となっていたことを明らかにした。それは戦争勃発よりも以前に制作を終えていたメイスフ

ワールドの意図とは関係なく行われた解釈であったが、逆にそのためにこそ、1915年の書評や劇評に見られた解釈が、享受者が自発的に「忠臣蔵」の物語の位置づけを決定した、受容史としては重要な一里塚であったといえるだろう。

初演時にこのような反応が見られた背景は、第1次世界大戦における苦戦だけではなく、飯倉章(2013)は、日清戦争期の日本政府の広報外交によって、イギリスでは武士の衣装をまとったイギリス人が風刺画の中に描かれるようになったと指摘しており²⁹²、日本を近代国家として躍進させた精神として武士道が喧伝された際、イギリス人が武士に自分たちを投影するという現象がすでに見られるようになっていたようである。また、これは、マスメディアだけでなく、個人のレベルでも確認できる。第4章でとりあげたキッチナー元帥が帝国陸軍に随時案内され、天皇と軍事演習を観覧し、東京市の主催で「仮名手本忠臣蔵」を鑑賞した訪日のあと、親交の深かったソールズベリー公爵夫人に送った手紙には、「我々の国民の魂がもっと日本人の物のようであればよかったのと思うばかりです(I only wish the spirit of our people...was more like that of the Japanese.)²⁹³」とつづられている。第5章で検討したように、日露戦争前後から、日本の軍事力の高さを、命を賭けた義務の遂行を通して名誉を守る「武士道」の精神によって説明しようという動きが活発化していたことを考え合わせると、キッチナーの意味するところは、イギリス人にも「武士道」を持たせたいというところだったと考えられる。

結章

本論文では、日本の開国や近代化を背景に外国人にも知られるようになった「忠臣蔵」のイギリスにおける受容について、受容研究の枠組みから考察を加えた。作品の価値や意味の決定における享受者の関与を重視した受容理論を踏まえたことで、本研究は、翻訳者たちの構想や意図、および紹介や翻訳の分析だけでなく、それらを通して「忠臣蔵」がイギリス社会でどのように受け容れられたのかという問題までを視野に入れた。

第1章から第3章までは、イギリス人が本国の読者を対象として「忠臣蔵」を紹介または翻訳した例をとりあげた。第1章では、開国初期にイギリス人によって行われた「忠臣蔵」の受容が、日本人について彼らがすでに持っていたステレオタイプのイメージが幕末の不安定な情勢によって確証付けられた、イギリス人の側の背景に大きく左右されて行われていたことを述べた。幕末に連続して起きた外国人襲撃事件や桜田門外の変がオールコックをはじめとした「忠臣蔵」に関して筆をとった西洋人の見方に影響を与えていたことは、太田らの先行研究の指摘する通りであった。本研究では、そこに、日本の開国以前にイギリスで出版されていた、過去の書籍を焼き直しただけの日本論を通して繰り返された、名誉に執着し、復讐を好み、命を軽視するという日本人のイメージが、実際に来日し幕末の日本を観察するイギリス人たちの視点にも影響していたことが「忠臣蔵」への注目につながったと指摘した。第2章、第3章においては、それぞれ、ミットフォードの *Tales of Old Japan* における記述、ディキンズの「仮名手本忠臣蔵」の英訳を、成立の背景やその反響を用いて分析することで、1860年代と比較した「忠臣蔵」の受容の手段、役割、用途の変化を明らかにした。以降の受容に多大な影響を与えたミットフォードは、著者の構想や先入観に左右されていた1860年代の記述への批判的精神が執筆の契機となっていたが、書評を確認する限り、読者の側が「忠臣蔵」を解釈する枠組みは基本的に1860年代と変わりがなく、引き続き、人口に膾炙する物語が国民性を反映しているというロマン主義的ナショナリズムの観点から行われていた。「仮名手本忠臣蔵」を初めて英訳したディキンズも、読者の多数を占める外国人に対しては、同様の発想から日本文化の標本として翻訳を提供していた。しかし、

日本国内で発表された書評からは、在日外国人の歌舞伎鑑賞や日本人の英語学習といった、従来指摘されてこなかった、翻訳の用途の多様性を指摘することができた。

第4章および第5章では、西洋人の「忠臣蔵」受容に対する日本人の反応と、ナショナリズムの高揚を背景とした、日本国内の「忠臣蔵」の位置づけを反映した英訳を検討した。第4章では、前田正名と斎藤修一郎の例から、彼らが西洋で観察した西洋人の間での「忠臣蔵」受容が不本意なもので、批判対象として彼ら自身による翻案や翻訳の制作を促した一方、西洋人の受容を抽象化して言及した義士伝の序文では「忠臣蔵」の権威づけに用いる型が成立していたことを明らかにした。さらに、斎藤修一郎の言説の変化やキッチナー元帥の「仮名手本忠臣蔵」鑑賞に関する報道の例からは、この型が個別具体的な事例を描写する際の調子すら既定していた事実を明らかにした。第5章では、1911年に大きな改訂を加えて第2版が出版された井上十吉の「仮名手本忠臣蔵」の英訳において「武士道」の語が討ち入りの根幹をなす精神として強調されていることの背景を考察した。第2版の出版の背景には、「武士道」の語の日本国内におけるイデオロギーとしての重要性の向上に起因する、国内と海外の状況の変化があった。国内では、「武士道」の語は、命を捨てて戦い抜き国に尽くすことを称賛するイデオロギーとして国民の士気高揚のために用いられ、海外に対しては、黄禍論に対する反論や同盟国イギリスに対する宣伝および広報外交のために用いられていた。井上十吉が第2版出版当時、軍事教育会の広報外交の一環である雑誌『大和魂』の出版に首席翻訳官という責任ある立場で参加した事実から、この活動が第2版の出版の背景に関係していた可能性を明らかにした。

第6章では、*The Faithful*と第1次世界大戦とのつながりを指摘した宮澤論を掘り下げることにより、西洋人にとって異質な他者の象徴としてはじめ紹介された四十七士が、1915年には第1次世界大戦での苦境の中で、イギリス人が自分たちの寓意であると解釈した例を劇評から確認した。この解釈は、戦争勃発よりも以前に制作を終えていたメイスフィールドの意図には関係ないものであったが、享受者が自発的に「忠臣蔵」の物語の位置づけを決定した、受容史における重要な節目であった。

以上、19世紀末から20世紀初めにかけてのイギリスにおける「忠臣蔵」の位置づけの変化を、紹介や翻訳を通して二次的に「忠臣蔵」を受容する読者たちの解釈や、その枠組みに影響する社会的背景を含めて論証してきた。本研究を通して、「忠臣蔵」の発祥文化である日本と英訳を通して受容する側であるイギリスの受容とが切り離されたものではなく、互いに交響しあう影響関係があったことを明らかにできたと思われる。

序章

- ¹ 赤穂浪人の討ち入り事件の概要については、松島栄一(1964)『忠臣蔵—その成立と展開—』(岩波新書)をもとに記述し、日付を西暦表示にした。
- ² 服部幸雄(2011)「『仮名手本忠臣蔵』総説」赤穂市教育委員会市史編さん室編『忠臣蔵 第二巻』兵庫県赤穂市、pp.40-42
- ³ 八木哲浩(1989)「四十六士をめぐる論議」赤穂市教育委員会市史編さん室編『忠臣蔵 第一巻』兵庫県赤穂市、pp.346-347
- ⁴ 松島栄一(1964)『忠臣蔵—その成立と展開—』岩波新書、p.131
- ⁵ 廣瀬千紗子(2008)「解説 『古今いろは評林』」、古今いろは評林をよむ会編『古今いろは評林—本文と注釈—』p.2
- ⁶ 古今いろは評林をよむ会編(2008)『古今いろは評林—本文と注釈—』p.28
- ⁷ 赤間亮(1992)「最初の赤穂義士劇に関する憶説—江戸版絵入狂言本の語りかけるもの—」鳥越文蔵編『歌舞伎と狂言—言語表現の追及—』pp.92-115
- ⁸ 早川由美(2011)「忠臣蔵興行年史」赤穂市教育委員会市史編さん室編『忠臣蔵 第二巻』兵庫県赤穂市 p.1259
- ⁹ 松島栄一(1964)『忠臣蔵—その成立と展開—』岩波新書、p.155
- ¹⁰ Smith II, H. D., (2008), “Chushingura in the 1980s”, *Revenge Drama in European Renaissance and Japanese Theatre*, Edited by Kevin J. Wetmore, Jr. New York: Palgrave Macmillan, p.188
- ¹¹ Titsingh, Isaac, (1822[1820]), *Illustrations of Japan* (F. Shoberl. trans), London: Ackermann, pp.21-22
- ¹² 例として、[unknown],(1872), *The Far East*, 3(3), (July 1 1872), pp.25-28、[unknown], 「仮名手本忠臣蔵」の概要は、[unknown], (1872), “Outline of a Japanese Drama: The Chiu shin gura.忠臣蔵 or ‘the Repository of Faithful Men.’”, *The Phoenix*, 19, (January, 1872), pp.111-112.にまとめられている。
- ¹³ ゴルビツァー、ハインツ(1999[1962])『黄禍論とは何か』(瀬野文教訳)草思社、p.68
- ¹⁴ 野田正彰(1982)「忠臣蔵の受容—集团的陶醉として—」『国文学：解釈と教材の研究』31 巻 15 号、p.92
- ¹⁵ 丸谷才一が、小林秀雄との対照によって自身のアプローチを説明した文章がこの好例である。丸谷は、なぜ「忠臣蔵」が日本人に長く愛好されてきたかという問題について、小林が武士に重きを置いて「忠臣蔵」の文化的事象としての分析を行っているのに対し、自身は町人に注目してアプローチすると述べ、両者が「外からの視野」から考察していることにふれている。また、丸谷は、小林秀雄の『仮名手本忠臣蔵』分析が中途半端であることを批判して自身の研究では丹念に分析を行うと宣言しており、「外からの視野」と「テキスト内からのアプローチ」の2つを組み合わせることによって、より相対的な受容研究

が可能になることが分かる。(丸谷才一(1984)『忠臣蔵とは何か』講談社、pp.19-20)

¹⁶ 『海外奇談』および『忠臣蔵演義』については、その翻訳者像や翻訳態度が奥村佳代子の一連の研究によって明らかにされている。(奥村佳代子(2015)「『海外奇談』の語句の来歴と翻訳者」『関西大学東西学術研究所紀要』48号、pp.29-42、同(2010)「中国語訳「忠臣蔵」の諸相：『海外奇談』の翻訳者像と翻訳態度初探」『関西大学東西学術研究所紀要』43号、pp.131-142、同(2002)「『忠臣蔵演義』と『海外奇談』」『中国語研究』44号、pp.65-80)

¹⁷ 宮澤誠一(2001a)「近代「忠臣蔵」の諸類型」『歴史評論』617号、pp.43-57

¹⁸ 神山彰(2008)「忠臣蔵の近代：「実録」と「外伝」の命運」『仮名手本忠臣蔵を読む』吉川弘文館、pp.203-205

¹⁹ 宮澤誠一(2001b)『近代日本の「忠臣蔵」幻想』青木書店、p.8

²⁰ Smith II, H. D., (2008), "Chushingura in the 1980s", In *Revenge Drama in European Renaissance and Japanese Theatre*, Edited by Kevin J. Wetmore, Jr. New York: Palgrave Macmillan, p.197

²¹ 速川和男(1999)「英学史の中の『忠臣蔵』」『立正大学人文科学研究所年報』36号、pp.14-28

²² 太田昭子(1991)「忠臣蔵の世界--英語訳にみられる変容過程」『教養論叢』88号、pp.1-28

²³ Cohen, A. M., (2008), "The Horizontal Chushingura: Western Translations and Adaptations prior to World War II", In *Revenge Drama in European Renaissance and Japanese Theatre*, Edited by Kevin J. Wetmore, Jr. New York: Palgrave Macmillan, pp.153-185

²⁴ マイケル・エメリック (2018)「日本文学の発見：和文英訳黎明期に関する試論」(長瀬海訳)、河野至恩・村井則子編『日本文学の翻訳と流通：近代世界のネットワークへ』勉誠出版、pp.9-30(「忠臣蔵」に関する部分は pp.23-25)

²⁵ 前掲 20)

²⁶ 前掲 20)、p.33,51

²⁷ 緑川真知子(2011)『『源氏物語』英訳についての研究：翻訳された『源氏物語』の捉え方についての細密なる検証』武蔵野書院、pp.14-20

²⁸ 前述した緑川は、「作品という言葉は特に古典文学の場合、古典文学の姿を正しく反映している言葉であるとは言えない」とし、「固定した作品」という概念に疑問を投げかける受容理論にもそぐわないため、この言葉を便宜上用いると断っている。この状態は、正しく、『仮名手本忠臣蔵』という一つの文学作品に留まらない「忠臣蔵」の受容に関しても当てはまる(前掲 27)、p.18)。

²⁹ 例えば、トゥーリーのモデルを用いたマンダル(Mandal, Sujit Kumar, 2013)は、ラビンドラナート・タゴール(Rabindranath Tagore)による非インド語の詩のバングラデシュ語への翻訳に関する自身の研究の中で両者の類似を指摘している (Mandal, Sujit Kumar,

(2013), *Translation as Reception: a Study of the Poems Translated by Rabindranath Tagore from non Indian Languages into Bangla*, Ph.D. Thesis, Kolkata: Jadavpur University, p.54)。逆に、あえてトゥーリーには言及せず、受容理論の枠組みを用いて翻訳者の文学作品に対する関与する際の主体性について考察した例としては、韓雲龍(2011)の『伊豆の踊子』の中国語訳に関する論考があげられる(韓雲龍(2011)「受容理論から見る文学翻訳の主体性：二種類の『伊豆の踊子』中国語訳から一」、『佐賀女子短期大学研究紀要』45号、pp.35-44)。

³⁰ Tymoczko, Maria., (1999), *Translation in a Postcolonial Context*, Manchester: St. Jerome Publishing. また、トゥーリーの規範理論を踏まえた翻訳研究の中で、特に日本文学を問題にした論考として、マシュー・チョジックの学位論文(Cozick, Matthew., (2017), *How English Translations of The Tale of Genji Helped to Popularize the Work in Japan*. Ph.D. Thesis, University of Birmingham, Birmingham, United Kingdom.)がある。

第1章

³¹ 前掲 22)、pp.8-9

³² 鶴飼政志(2001)「忠臣蔵が英訳されるまで」『歴史評論』617号、pp.72-79

³³ 前掲 23)、p.155

³⁴ [Busk, Mary], (1841), *Manners and Customs of the Japanese, in the Nineteenth Century: from Recent Dutch Visitors of Japan, and the German of Dr. Ph. Fr. von Siebold.*, London: John Murray.

³⁵ MacFarlane, Charles., (1852), *Japan: an Account, geographical and Historical, from the Earliest Period at Which the Islands Composing This Empire Were Known to Europeans, Down to the Present Time, and the Expedition Fitted Out in the United States, etc.*, London: G. Routledge.

³⁶ Himes, Glenn T. (1998). "L.E.L: The Literary Gazette Collection", *Sheffield Hallam University: Corvey Women Writers on the Web: L.E.L: The Literary Gazette Collection*[online], [https:// Sheffield Hallam Universitywww2.shu.ac.uk/corvey/cw3/ContribPage.cfm?Contrib=23](https://SheffieldHallamUniversitywww2.shu.ac.uk/corvey/cw3/ContribPage.cfm?Contrib=23) (最終閲覧日 2018年11月17日)

³⁷ [unknown], (1822), "Illustrations of Japan", *The Literary Gazette: A Weekly Journal of Literature, Science, and the Fine Arts*; (Feb 2, 1822), p.68 以下、特に断りのない場合、英語の翻訳は引用者による。なお、本論文で引用する雑誌の誌面の閲覧は、Hathi Trust 提供のデジタルアーカイブ Hathi Trust Digital Library (<https://www.hathitrust.org/>) を用いて行った。

³⁸ [unknown], (1822), "Titsingh's *Illustrations of Japan*", *Eclectic Review*, vol.17, (Apr 1822), p.325

³⁹ [unknown], (1822), "Review. --Titsingh's *Illustrations of Japan*.", *The Gentleman's Magazine: and Historical Chronicle*, (May 1822), p. 432

-
- ⁴⁰ 大森実・篠田佐多江(1986)「*Manners and Customs of the Japanese in the Nineteenth Century*の検討-1」『英学史研究』19号、pp.33-50
- ⁴¹ 前掲 34)、p.162
- ⁴² 前掲 34)、pp.231-232
- ⁴³ Toshio Yokoyama, (1987), *Japan in the Victorian Mind: A Study of Stereotyped Images of a Nation 1850-1880*, London: Macmillan, p.46
- ⁴⁴ ルイス・フロイス(1993[1585])『ヨーロッパ文化と日本文化』(岡田章雄訳) 岩波書店、項目7章41(p.116)7章43(p.117)14章5-10(pp.178-179)
- ⁴⁵ Kaempfer, Engelbert., (1906[1727]), *The History of Japan*, London: Printed for the Translator, p.307
- ⁴⁶ Chamberlain, B. H., (4th ed. 1902[1890]), *Things Japanese Being Notes on Various Subjects Connected with Japan*, London: John Murray., p.253-254
- ⁴⁷ ファン・オーフェルメール・フィッセル(1978[1833])『日本風俗備考2』(庄司三男・沼田次郎訳) 平凡社、p.69
- ⁴⁸ 前掲 34)の出版と同年にニューヨークで G.P. Putnum 社から出された版のこと。
- ⁴⁹ 1856年にハートフォードの S. Andrus & Son.から出された版のこと。
- ⁵⁰ 前掲 34)、pp.356-357
- ⁵¹ Oliphant, Laurence, (1859), *Narrative of The Earl of Elgin's Mission Vol.II*, Edinburgh: William Blackwood and sons., p.207
- ⁵² 横山俊夫(1981)「ヴィクトリア期イギリスにおける日本像形成についての覚書-2- : L.オリファントとエディンバラの出版社ブラックウッド」『人文学報』50号、p.65
- ⁵³ オールコックの経歴は、佐野真由美(2003)『オールコックの江戸』(中公新書、p.7)による。
- ⁵⁴ 前掲 53)、p.114
- ⁵⁵ オールコックは、*Illustrations of Japan* について、ティチングの「見上げた努力 (laudable diligence)」によって編纂されたと言及している。また、オールコックはこの本をフランス語の題で呼称していることから、彼が読んだのはフランス語版であっただろうと推測される。(Alcock, Rutherford., (1863), *The Capital of Tycoon: a Narrative of Three Years' Residence in Japan*, New York: Harper and Brothers, p.184)
- ⁵⁶ オールコックからラッセルに宛てた 1860年4月2日付の手紙。(Alcock, Rutherford., (1860), "No.3", *Correspondence with Her Majesty's envoy extraordinary and minister plenipotentiary in Japan*, London: Harrison and Sons, p.10)
- ⁵⁷ Alcock, Rutherford., (1861), "Japan and the Japanese", *Edinburgh Review*, vol.113, pp.37-73.
- ⁵⁸ オールコックの解釈の方向性が定まった理由について、増田毅は、日本人に浸透している赤穂浪人の討ち入り事件への英雄視がオールコックの先入観を形成したとの考えを示しており、これは、本節の冒頭に紹介した佐野、コーエンと異なり、事件の全容を知るより

も先に「忠臣蔵」を知ったとする見方である。(増田毅(1980)『幕末期の英国人 : R・オールコック覚書』神戸大学研究双書刊行会、p.54)

⁵⁹ 前掲 57)、 p.62.

⁶⁰ Smith, George., (1861), *Ten Weeks in Japan*, London: Longman, pp.128-137.

⁶¹ Fortune, Robert, (1863), *Yedo and Peking; A Narrative of a Journey to the Capitals of Japan and China*, London: John Murray, p.242

第2章

⁶² エルギン卿の来日に随行し、サトウに影響を与えたオリファントの著作について考察した横山俊夫は、*Tales of Old Japan* 以前に日本に関する「スタンダード・ブック」となり得るものはなかったと述べている。(前掲 52)、 p.81)

⁶³ 外務省事務次官であった Edward Hammond に送った手紙による。(Edited by. A. H. H. Cortazzi, (1985), *Mitford's Japan: Memories and Recollections, 1866-1906*, London: Continuum International Publishing Group, p.34)

⁶⁴ アダムス(F. O. Adams)からミットフォードの父にあてた手紙による。ミットフォードから父に宛てられた手紙は、コータツツイが複写を作成し、ロンドンの日本協会(The Japan Society of London)とノーウィッチのセインズベリー日本芸術研究所とに収められている。本研究は日本協会蔵の複写資料を利用させていただいた。

⁶⁵ Mitford から父にあてた手紙 1869 年 3 月 24 日付。

⁶⁶ 前掲 22)、 p.8.

⁶⁷ Morton, Robert, (2017), *A. B. Mitford and the Birth of Japanese Modern State: Letters Home.*, Folkestone: Renaissance Books, p.34.

⁶⁸ 前掲 52)、 p.81.

⁶⁹ 前掲 63)、 p.34.

⁷⁰ Mitford から父にあてた手紙 1867 年 3 月 17 日付。

⁷¹ ミットフォードが最初に草稿を添付したのは 1868 年 7 月 4 日付けの手紙で、9 月 5 日、18 日付の手紙でも父や家族の感想を求めている。

⁷² 前掲 63)、 p. xxiv に引用されたミットフォードの孫ジョナサン・ギネス(Jonathan Guinness)の言葉。

⁷³ Ashton-Gwatkin, F. T.A., (1956), "*Tales of Old Japan*", *Bulletin of the Japanese Society of London*, vol. 18, p.13. なお、講演においてガトキンは、補助者の日本人はシラキ某であろうと推測していたが、このシラキという人物の名前は、ミットフォードの元雇い人のうちに見える。(グロスターシャー・レコードオフィス蔵の白木宗造からミットフォードへ宛てた手紙に基づく(所蔵番号 D2002/7/3/9))

⁷⁴ Morton, Robert, (2013), *A. B. Mitford (1837-1916)*, Edited by. A. H. H. Cortazzi, *Britain & Japan: Biographical Portraits*, vol. 8, Leiden: Global Oriental, p.125.

⁷⁵ ミットフォードから父に宛てた手紙 1866 年 8 月 24 日付。

⁷⁶ 前掲 67)、 pp.20-21

⁷⁷ Mitford, A. B., (1871), *Tales of Old Japan vol. II*, London: MacMillan, p.239

⁷⁸ 「薩摩の男(a Satsuma man)」として、村上喜剣の逸話が「日本の名誉に対する考え方の象徴(truly characteristic of Japanese ideas of honour)」として言及されていること、吉良邸近隣や吉良邸内の非武装の人たちに危害を加えないようにという旨の大石内蔵助の指示が描かれていることを指す。

⁷⁹ ミットフォードから父に宛てた手紙 1869 年 6 月 26 日付。

⁸⁰ 例えば、1868 年 6 月 19 日付の手紙には、「今のところ、日本について書いたものには、ほぼ正確といえる物すらないのです。そして、行儀や慣習の研究は非常に興味を惹かれるものです。(There is nothing at present written about it which is even approximately true, and it is such an interesting study of manners and customs.)」とある。

⁸¹ Edited by. Lequin, Frank, (1990), “Letter204”, *Private Correspondence of Isaac Titsingh vol. I*, Leiden: Brill, p.468

⁸² Screech, Timon., (2006), “Introduction”, *Secret Memoirs of the Shoguns: Isaac Titsingh and Japan, 1779-1822*, Edited by. Timon Screech, London: Routledge, p.2

⁸³ レミュザについては、エメリックがウィーンの東洋学者アウグスト・プフィッツマイヤーの『浮世形六枚屏風』について述べた中で引用した、プフィッツマイヤーが *The Athenaeum* の記事の執筆者に送った手紙の中で「傑出した学者の一人」として紹介されている。手紙によれば、レミュザですらあいうえおの仕組みを理解できず、これまで日本語からの翻訳として発表されたものも、長崎の通詞の手を借りたものであったという。(マイケル・エメリック (長瀬海訳) (2017)、pp.13-14) プフィッツマイヤーの手紙は未見。

⁸⁴ 前掲 82)、pp.65-67

⁸⁵ 前掲 82)、p.64

⁸⁶ 前掲 82)、p.71 一方、英語版にも掲載されている序文において、レミュザは、ティチング自身が日本語資料から訳したように解説している。(Rémusat, Jean-Pierre-Abel, (1822[1820]), “Preliminary Remarks to The Private Mamoirs of the Djogouns”, *Illustrations of Japan*, London: Ackermann, pp.xi-xvi)

⁸⁷ なお、日本協会蔵のミットフォードから彼の父に宛てた手紙においても、ティチングへの言及は確認できなかった。

⁸⁸ Mitford, A. B., (1871), *Tales of Old Japan vol. I*, London: MacMillan, p.147

⁸⁹ 西洋人たちが滞在中に見聞したものに基づいて日本の文化について判断を下す旅行記の類は資料として用いられていないが、日本に長期滞在し、日本研究を行ったヘボン(Hepburn)の成果は注などに活用されている。(前掲 88)、p.149)

⁹⁰ 前掲 55)、p.312-313

⁹¹ 前掲 88)、p.147

⁹² *Illustrations of Japan* の序文において、ネプブーがティチングの言葉を紹介している。「今現在、ヨーロッパには、この私を除いて、正確な歴史やこちらでほとんど知られていない国の行儀や慣習の状況に即した説明を行える人物はおりません。そして、これは非常

に多くの点で知られるに足るものなのです。(at the present moment, there is not in Europe a person besides myself who can furnish a faithful history and a circumstantial description of the manners and customs of a nation which is scarcely known here, and which, nevertheless, deserves to be known on so many accounts.)」(Nepveu, Augustine-Nicolas., (1822[1820]), “Manuscripts of M.Titsingh.”, In *Illustrations of Japan*, Isaac Titsingh(F. Shoberl. trans), London: Ackermann, p.ix)

⁹³ [unknown], (1822), “Titsingh’s *Illustrations of Japan*”, *Eclectic Review*, p.330

⁹⁴ ルドルフ・リンダウ (森本英夫訳) (1986[1864]) 『スイス領事の見た幕末日本』 新人物往来社、pp.167-168

⁹⁵ 前掲 55)、pp.357-358

⁹⁶ 前掲 55)、p.80

⁹⁷ ミットフォードが「忠臣蔵」についての自身の考えを記した部分は、わずかに、「壮絶な英雄像の衝撃的なイメージは、称賛せずにはいられない。(A terrible picture of fierce heroism which it is impossible not to admire.) (p.28)」という一文と、討ち入りのために妻と離縁した大石内蔵助を称賛した「あっぱれな忠義者よ！(Admirable and faithful man!)(p.16)」という感嘆くらいである。(前掲 67)、p.35)

⁹⁸ 前掲 88)、pp. 4-5

⁹⁹ モートンは、このような切腹にまつわる話題をミットフォードが多く紹介したことは、イギリス人のその後の日本人イメージに命を軽んじるという誤解を与えてしまったと指摘している。(前掲 67)、p. 161)

¹⁰⁰ たとえば、*The London and China Telegraph*, 13(389), (January 13, 1871), p.121 など。なお、本論文で引用するイギリスで発行された新聞記事の閲覧は、British Library 提供のデジタルアーカイブ The British Newspaper Archive (<https://www.britishnewspaperarchive.co.uk/>) を用いて行った。

¹⁰¹ [unknown], (1871), *The Illustrated London News*, (February 25, 1871),p.191 この書評の内容は、出版速報のようなもので、収録されている物語への言及はない。

¹⁰² [unknown], (1871), *The Athenaeum*, 2261, (February 25, 1871), pp.231-232

¹⁰³ [unknown], (1871), *The Saturday Review*, (March 11,1871), pp.317-318

¹⁰⁴ [unknown], (1871), *The Spectator*, (March 11, 1871), pp.289-291

¹⁰⁵ [unknown], *Notes and Queries 4th Series*, March 11(1871), p.227

¹⁰⁶ オズボーンやオリファントの日本旅行記の出版社である。

¹⁰⁷ [Oliphant, Margaret], *Blackwood's Edinburgh Magazine*, 109(256) (1871), Edinburgh: William Blackwood and Sons, pp.460-463 なお、Highlander と赤穂浪人たちとを重ねる見方については、*Tales of Old Japan* の熱心な読者であった Robert Louis Stevenson(1883)にも受け継がれている。(Stevenson, R. L., (1883), “*Byways of Book Illustration: Two Japanese Romances.*”, *Magazine of Art*, 6, London: Cassell, Petter, Galpin & Co. pp.8-15)

¹⁰⁸ *The Times* (London, England), Friday, May 26, (1871), Issue27073, p.5

¹⁰⁹ Dundes, Alan, (1999) “Folk-lore and the Origin of the Word: William Thoms”,
International Folkloristics, Lanham: Rowman & Littlefield. p.9.

¹¹⁰ 前掲 88)、p.3

第3章

¹¹¹ Dickins, F. V., ([1875] 3rd ed. 1880), *Chushingura: or the Loyal League: a Japanese Romance*, London: Allen& Unwin.

¹¹² 『読売新聞』 1893年3月16日、p.1

¹¹³ 川村ハツエ(1997)「第3章 『仮名手本忠臣蔵』の英訳」『F・V・ディキンズ：一日本文学英訳の先駆者一』七月堂、pp.58-82

¹¹⁴ 岩上はる子(2015)「F. V. ディキンズと日本文学：—『仮名手本忠臣蔵』の翻訳について—」『英学史研究』48, pp.1-16

¹¹⁵ Dickins, F. V., (1999), *Collected works of Frederick Victor Dickins: v. 2. Translations: 1*, Edited by P. F. Kornicki, Bristol: Ganesha.

¹¹⁶ 依拠したテキストへの言及の有無が19世紀末のイギリスにおける商業用の翻訳と学術的な翻訳とを区別する重要な指標であったことは、同時期のアイルランド文学の英訳について論じたマリア・ティモツコ(Maria Tymoczko)からも指摘がある。(Tymoczko, M., (1999), “The Two Traditions of Early Irish Literature”, *Translation in a Postcolonial Context*, Manchester: St. Jerome, pp.131-132)

¹¹⁷ Kornicki, Peter. F., (2004), *Oxford Dictionary of National Biography*, Edited by H.C.G. Matthew and Brian Harrison, Oxford: Oxford University Press, pp.86-87

¹¹⁸ ディキンズと熊楠との親交については、岩上はる子(2017)「『竹取物語』はいかに英訳されたか」(『英学史研究』50号, pp.3-22)に詳しい。

¹¹⁹ 1898年7月13日付、南方熊楠宛の手紙を指す。(岩上はる子、ピーター・コーニッキ編(2011)『F・V・ディキンズ書簡英文翻刻・邦訳集：アーネスト・サトウ、南方熊楠(他)宛』、エディション・シナプス、pp.228-229 (岩上による日本語訳は p.275))

¹²⁰ 前掲 23)、pp.153-185

¹²¹ 1877年から1880年までエドワード・ハウスが主幹をつとめた英字新聞である。松村正義によれば、「日本政府から毎月500円の補助と年間500円の郵送料とを受け取って」御用新聞として日本に好意的な情報を対外的に報じていたという。(松村正義(2002)『新版 国際交流史：近現代日本の広報文化外交と民間交流』、地人館、p.110)

¹²² *Japan Weekly Mail*の1876年11月29日号に書評が掲載され、翌12月6日号にディキンズからの反論が掲載された。本稿では、大英図書館が所蔵する、*Japan Weekly Mail*の2号分の記事をまとめた12月11日発行の*Japan Mail*を参照し、引用した。よって本稿で掲げる書評とディキンズの反論のページ数は、*Japan Mail*のものである。

¹²³ *Japan Weekly Mail*と日本アジア協会との密接な関係については、楠家重敏(1995)「日

本アジア協会の知的波紋」(『杏林大学外国語学部紀要』7, pp.123-142) に詳しい。

¹²⁴ Houghton, Walter E., (1959), “British Periodicals of the Victorian Age: Bibliographies and Indexes”, *Library Trends*, 7(4), pp.554-65

¹²⁵ [unknown], (1876), “Review”, *Japan Mail*, (December 11 1876), p.708

¹²⁶ Dickins, F. V., (1876), “The Chushingura: To the Editor of the ‘Japan Weekly Mail’”, *Japan Mail*, (December 11, 1876), p.715

¹²⁷ Dickins, F. V., (3rd ed. 1880[1875]), *Chushingura: or the Loyal League: a Japanese Romance*, London: Allen& Unwin, p. xv

¹²⁸ 前掲 127)、p.32

¹²⁹ 前掲 126)、p.715

¹³⁰ 前掲 127)、p. xiii

¹³¹ James Murdoch., (1926), *A History of Japan*, London: Kegan Paul, Trench, Trübner & Co, p. 235

¹³² Dickins, F. V., (1875), *Chushingura: or the Loyal League: a Japanese Romance*, Yokohama, p. iii

¹³³ 前掲 127)、p. xiii

¹³⁴ デイキンズが翻訳に用いたと思われる書き込み入りの旧蔵書が1999年時点でロンドンのデイキンズの孫宅に存在したことが牧田健史の研究メモから分かっている(2017年10月28日閲覧:「デイキンズの孫がロンドンに健在」

<http://www.aikis.or.jp/~kumagusu/articles/makita15.html>)。1880年版の巻末注にはデイキンズが用いたテキストについての説明があり、それによれば、版元が「大阪船町にある加島屋清助(partly at Ohosaka, by one Seisuke, at the sign of Kajima, in the Funa-machi)」のものと「江戸日本橋瀬戸物町(partly at Yedo, at a house in the Seto-mono-cho)」のものを用い、1880年版ではまた別の版本も用いているとある(前掲 127)、appendix p.

148)。神津武男がまとめた諸本の奥付の表によると、デイキンズが用いたテキストのうち版元が「加島屋清助」とあるものについては、七行本のうち大阪三版本もしくは四版本にあたりと見られる(神津武男(2009)『浄瑠璃本史研究:近松・義太夫から昭和の文楽まで』、八木書店)。本稿では、同じく七行本を底本とした藤野義雄校注(1974-1975)『仮名手本忠臣蔵: 解釈と研究』(桜楓社)を校訂本文として使用した。

¹³⁵ Keene, D., (1971), *Chushingura: the Treasury of Loyal Retainers: a Puppet Play*, New York: Columbia University Press.

¹³⁶ デイキンズの翻訳では、この箇所由良之助のセリフは訳さず、ただ抱きかかえた動作だけを訳出する。

¹³⁷ 藤野義雄校注(1974-1975)『仮名手本忠臣蔵: 解釈と研究(中)』(pp.546-547)によれば、「赤かうやくもいらぬ年シはい」とは「処女でもあるまいし、大きくまたいでもその為に裂傷を生じて赤こう薬を便わねばならない」年頃ではない、の意。「舟玉様」とは本来船舶の守り神のことをいうが、この場合は「お軽が「舟にのった様で」と言ったので、

「舟玉様」と女の陰部をしゃれて言った」もの。さらに「洞庭の秋の月」も本来は瀟湘八景の一つである洞庭秋月を指すが、ここでは「舟玉様」と同様に女性の陰部を指す。

¹³⁸ Pearsall, J., Hanks, P., Soanes, C., Stevenson, A., (2nd ed. Rev. 2005), *Oxford Dictionary of English*, Oxford: Oxford University Press, p.850

¹³⁹ 1898年7月13日付、南方熊楠宛の手紙を指す。(前掲119)、pp.228-229 (岩上による日本語訳は p.275))

¹⁴⁰ [unknown], “Review”, *Japan Mail*, (December 11, 1876), p.708

¹⁴¹ Tymoczko, M., (1999), “The Two Traditions of Translating Early Irish Literature”, *Translation in a Postcolonial Context*, Manchester: St. Jerome, 1999, pp. 122-145

¹⁴² 井上訳では依拠したテキストについて言及がなく、注も一般的な内容に留まっているため、ディキンズ訳とは異なり、ディキンズ訳とは対照的に商業的な翻訳であったと見なすことができる。

¹⁴³ 井上訳では、「本蔵が妻子を鐙で蹴ると、彼らは気を失い、仰向けに倒れていく。本蔵はそれを見向きもせず、ただ家来たちについてくるようにとだけ言い、馬を駆り、視界から遠ざかっていく。(He kicks them both with his stirrups, and fainting, they fall on their backs. He does not look at them; but telling his servants to follow, he urges his horse and gallops out of sight.)」となっている。(Inouye, Jukichi., (2nd ed.1910[1894]), *Chushingura, or the Treasury of Loyal Retainers*, Tokyo: Nakanishi-ya, p.22)

¹⁴⁴ 山川健次郎(1905)「武士道とゼントルマン」、『中央公論』、p.7

¹⁴⁵ メイソン・フィリップ (金谷展雄訳) (1991)『英国の紳士』晶文社、p.26

¹⁴⁶ Stevenson, R. L., (1883), “Byways of Book Illustration: Two Japanese Romances”, *Magazine of Art*, 6, pp. 8-15

¹⁴⁷ Wedderburn, David., (1879), “The Loyal League: A Japanese Romance”, *Fortnightly Review*, 25(146), pp.273-289

¹⁴⁸ [unknown], (1877), “Chushingura”, *Tokio Times*, (January 27, 1877), pp.43-44.

¹⁴⁹ [unknown], (1877), “Chushingura”, *Tokio Times*, (January 27, 1877) p.44.

¹⁵⁰ スミスの記述する劇の内容には所々『仮名手本忠臣蔵』と合致しない箇所があり、スミスが観た演目が具体的に何であったのか特定は難しい。

¹⁵¹ Smith, George., (1861), *Ten Weeks in Japan*, London: Longman, pp.128-137

¹⁵² スミスが参照したものが英語版であったか、1820年にパリで出版されたフランス語版であったかについては記述がない。

¹⁵³ 『東京朝日新聞』1888年7月27日朝刊、p.1

¹⁵⁴ Zoe Kincaid, *Japan Times*, (25 November 1900), p.3

¹⁵⁵ 園田英弘(2006)「横浜へのもう一つの道：太平洋航路をめぐるアメリカとイギリスの競合」In *Historical Consciousness, Historiography, and Modern Japanese Values*, Edited by James C. Baxter, Kyoto: International Research Center for Japanese Studies, pp.114-116

¹⁵⁶ De la Mare, Walter., (1915), “Mr. Masfield’s Japanese Tragedy”, *The Bookman*,

(September 1915), p.160

¹⁵⁷ 丸善株式会社編(1980)『丸善百年史：日本近代化のあゆみと共に 上』丸善、pp.381-388

第4章

¹⁵⁸ この取り組みの代表的なものは、上田萬年(1895)『国語論』(金港堂)、芳賀弥一(1899)『国文学史十講』(富山房)、三上参次、高津楯三郎(1900)『日本国文学史 上・下』(金港堂)があげられる。

¹⁵⁹ ハルオ・シラネ(1999)「総説 創造された古典」ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典：カノン形成・国民国家・日本文学』新曜社、p.38

¹⁶⁰ 前掲 88)、p.3

¹⁶¹ 例えば、井上哲次郎は、「忠臣蔵」の史実を虚構との峻別の必要性を次のように述べている。「赤穂四十七士に関する著述は、汗牛充棟、殆ど数ふ可らざる程である、自分が大学で講演する必要があると、四十七士に関する材料を蒐集した事があるが、其の手に入った書籍丈でも沢山である、然しどうも俗書——つまり事実として到底信ぜられぬ、虚構の伝説其他を元として書いた著述が多いので困った。」(井上哲次郎(1910)「秋霜烈日の心事」『日本及日本人』524号、p.58)

¹⁶² Kenchio Suyematz, trans., (1882), *Genji Monogatari: The Most Celebrated of the Classical Japanese Romances*. London: Trubner.

¹⁶³ Chozick, Matthew, (2017), “The First English Translation of Genji: from Victorian London to Meiji Era Tokyo”, *How English Translations of The Tale of Genji Helped to Popularize the Work in Japan*. PhD Thesis, University of Birmingham, Birmingham, United Kingdom, pp.104-153

¹⁶⁴ Tymoczko, Maria., (1999), “The Politics of Translating *Táin Bó Cúailnge* into English”, *Translation in a Postcolonial Context*, Manchester: St. Jerome Publishing. pp.62-89

¹⁶⁵ 『東京朝日新聞』、1883年4月17日、p.3

¹⁶⁶ 前田正名の略歴は、祖田修(1987)『前田正名』(人物叢書 / 日本歴史学会編、吉川弘文館)に拠る。

¹⁶⁷ 前田三介編(1937)「前田正名自序伝 下」(『社会及国家』252号)、p.93

¹⁶⁸ 前掲 23)、p.160

¹⁶⁹ 前田正名(1880)『日本美談』北畠茂兵衛、p.自叙1

¹⁷⁰ 前掲 166)、pp.102-103

¹⁷¹ 斎藤修一郎の略歴については、自伝である斎藤修一郎(1908)『懐旧談』(鷲津文三編、青木大成堂)に拠った。

¹⁷² Shuichiro, S., and Greey, E., (1880), *Loyal Ronins*, New York: Putnum., p.iv

¹⁷³ 川瀬健一 (2013) 「「いろは文庫の英訳③」：ーテキスト選択の謎ー」(第438回日本英文学史学会本部例会報告発表資料 (2013年7月6日))、[online] <http://kawa-k.vis.ne.jp/201376.pdf> (参照2018年11月10日)、pp.2-4

-
- 174 Benesch, Oleg, (2014), “First Explanations of *Bushido* in the Meiji Era”, *Inventing the Way of the Samurai*, Oxford: Oxford University Press., pp.43-44
- 175 Uchimura, Kanzo., (1886), “The Invention of a New Religion”, *The Methodist Review*, p.57
- 176 前掲 174)、p. 65
- 177 前掲 19)、pp.50-51
- 178 梅亭鶯叟(1884)「叙」(作者不明『絵本赤穂義士銘々伝』鶴声社)、pp.叙 2-3 (国立国会図書館蔵本 画像 URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/880015> (最終閲覧 2018/10/10))
- 179 三静(1888)「絵本楠公三代軍記序」『絵本楠公三代軍記』銀花堂、p.1
- 180 隅田了古(1883)「赤穂義士銘々伝序」(柳園美登里／尾形月耕／二世隅田了古／岡大次郎『赤穂義士銘々伝』錦耕堂)一丁オモテ (国文学研究資料館蔵本 画像 URL: <http://school.nijl.ac.jp/kindai/NIJL/NIJL-00660.html> (最終閲覧 2018/10/10))
- 181 隅田古雄 (了古) (1887)『赤穂義士之実伝』錦耕堂、p.1 (国立国会図書館蔵本 画像 URL: <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/879761>(最終閲覧 2018/10/10))
- 182 重野安繹 (西村天因記) (1899)『赤穂義士実話』大成館、p.2
- 183 雨谷幹一(1897)『大石義雄』民友社、p.4
- 184 福本日南(1909)『元禄快拳録』啓成社、p.1
- 185 Saito, S, Greey, E., (1880), *Loyal Ronins*, New York: Putnum, p.iv
- 186 斎藤修一郎(1910)「『いろは文庫』の英訳」『日本及日本人』524号、p.107
- 187 『読売新聞』、1891年1月27日、p.3
- 188 [unknown],(1872), *The Far East*, 3(3), July 1 1872, pp.25-28
- 189 Satow, E. and Hawes, A. G. S., (1884[1881]), *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan*, London: John Murray, p.19
- 190 『読売新聞』1895年7月14日付
- 191 Oxford Dictionary of National Biography (デジタル版) ,Keith Nalson, 2011
- 192 Magnus, Philip, (1968[1958]), *Kitchener: Portrait of an Imperialist*, Harmondsworth: Penguin Books, pp.289-292
- 193 例えば、スーダンでの戦績によって叙爵されたこと (『読売新聞』1898年9月25日、p.1) や、ボア戦争での戦況報告があげられる。(『読売新聞』1901年1月27日、p.5)
- 194 「演芸界だより」、『読売新聞』1909年11月8日、p.3
- 195 『東京日日新聞』、1909年11月12日、p.4
- 196 「吉元帥歓迎会」、『読売新聞』1909年11月12日、p.3
- 197 『東京朝日新聞』、1909年11月13日、p.4
- 198 “The Welcome to Lord Kitchener at Tokyo”, *The Graphic*, 11 December 1909,p.813
- 199 内川芳美「19世紀後半期の世界と日本の国際報道」『外国新聞に見る日本』、pp.vii-viii
- 200 “Lord Kitchener at Tokyo”, *Times*, November 12 1909

²⁰¹ 前掲 121)、p.110

²⁰² *Japan Times*, November 13 1909, p.3

²⁰³ “Lord Kitchener”, *The Japan Weekly Mail*, November 20 1909, p.639

²⁰⁴ 前掲 191)、p.292

第5章

²⁰⁵ 昭和女子大学近代文学研究室編(1969)『近代文学研究叢書 30』、昭和女子大学近代文化研究所、pp.289-327、井上琢智(2003)「幕末・明治・大正期イギリス日本人留学生資料(2)」『経済學論究』57(1), p.111

²⁰⁶ Inoue, J., (1895), *Sketches of Tokyo Life*, Yokohama: Torando および、Inoue, J., (1895), *A Concise History of the War between Japan and China*, Osaka: Z. Mayekawa, Tokyo: Y. Okura のこと。特に前者は、アメリカにおいてよく読まれた形跡がある。

²⁰⁷ 前掲 204)、pp.299-301

²⁰⁸ 佐光昭二(2007)『阿波洋学史の研究』徳島県教育印刷、p.366

²⁰⁹ 例えば、*The Oxford Guide to Literature In English Translation* (edited by. France, P., 2000, Oxford: Oxford University Press) の“Japanese Drama”の項目では『仮名手本忠臣蔵』の英訳についてまとめられており、1880年にロンドンで出版された Frederick Victor Dickins 訳と、1971年の Donald Keen 訳については具体的に言及している一方、その他の日本人による翻訳については、「日本人翻訳者によるいくつかの英語版が20世紀はじめに東京で出版されたが、西洋では限られた読者しか得られなかった(Several English versions by Japanese translators were published in Tokyo early in the century but gained limited circulation in the West.(p.247))」と、受容史に与えた影響は小さかったと評価している。また、西洋における忠臣蔵の受容について論じたコーエン(前掲 23)、pp.153-185)は、「しかし、井上の翻訳は大した注意を引いたようには思われない(but Inoue’s work does not appear to have received much attention.(p.166))」と評価を下している。

²¹⁰ Inoue, J., (1894), *Chushingura or the Loyal Retainers of Akao*, Tokyo: 博文館

²¹¹ Inoue, J., (1894), “Preface”, *Chushingura or the Loyal Retainers of Akao*, Tokyo: 博文館

²¹² 前掲 18)、p.200

²¹³ 井上訳『仮名手本忠臣蔵』の初出については、現段階では未確認で、先行研究においても諸説ある。磯部弥一郎「故井上十吉氏」(『英語青年』51(5)、1929年、pp.177-178)によれば、「井上氏の英文で書いた最も早いものには英文忠臣蔵や英文大岡政談などがある。此二書は英語雑誌にて発表された」(『英語青年』昭和4年)とあり、太田昭子は初版が1880年に横浜で出版されていると推定した(前掲 22))。ここでは、昭和12年に出版された版が第4版であるところから逆算し、1917年の版が第3版、1910年版が第2版となることから、1894年に出版されたものを初版とする。

²¹⁴ 高梨健吉(1985)『文明開化の英語』中公文庫、pp.162-176

²¹⁵ 『東京朝日新聞』(1894年3月27日朝刊、p.6)に掲載された初版の発売を知らせる新刊広告内で、「日本演劇の模範、日本人種忠義の典型として、之を宇内に誇揚するに足

る。今之を廣く海外へも示さんがために、英文に翻訳して、出版す訳者井上十吉君は…」とあり、国内向けの広告ではあるが、この英訳が外国人読者を見込んでいることを示している。

²¹⁶ 江見水蔭(1973[1927])「自己中心明治文壇史(抄)」『日本近代文学大系』60巻、角川書店

²¹⁷ Inoue, J., (2nd ed. 1910[1894]), *Chushingura, or the Treasury of Loyal Retainers*, Tokyo: Nakanishi-ya

²¹⁸ 『東京朝日新聞』1910目11月6日朝刊、p.1

²¹⁹ 前掲216)、“Preface”

²²⁰ 前掲216)

²²¹ [unknown], (1910), *The American Review of Reviews*, p.384

²²² Gatenby, E. V., (1937), “The Influence of Japan on English Literature”, *Transactions and Proceedings of the Japan Society London*, 34(46), London: Japan Society London, p.58

²²³ Wetmore, Jr., K. J., (2008), “The Play’s the Things”: Cross-cultural Adaptation of the Revenge Plays through Traditional Drama, In *Revenge Drama in European Renaissance and Japanese Theatre*, ed. Kevin J. Wetmore, Jr., New York: Palgrave Macmillan. p.250

²²⁴ Introduction に設けられた節の題は、次の通りである。「日本語の特異性(The Peculiarities of The Japanese Language.)」「赤穂の仇討ちの時代(The Period of the Ako Vendetta.)」「徳川幕府(The Tokugawa Shogunate.)」「朝廷(The Imperial Court.)」「侍(The Samurai.)」「庶民(The Common People.)」「武士道とその特性(Bushido and Its Characteristics.)」「切腹(“Seppuku.”)」「仇討ち(Vendetta.)」「徳川時代の初期(Early Years of the Tokugawa Period.)」「男伊達(The “Otokodate.”)」「元禄時代(The Genroku Period.)」「商人階級(The Merchant Class.)」「歓楽街(The Pleasure-quarters.)」「忠臣蔵(The “Chushingura.”)」「城内での刃傷(The Attack in the Palace.)」「内匠頭の死(Takumi-no-kami’s Death.)」「復讐の用意(Preparations for the Revenge.)」「三平の自死(The Suicide of Sampei.)」「天野屋利兵衛(Amanoya Rihei.)」「復讐(The Revenge.)」「結び(The Conclusion.)」

²²⁵ 前掲216)、p.vii

²²⁶ 前掲216)、pp.vii-xi

²²⁷ 前掲216)、p.vii

²²⁸ 前掲216)、p.viii

²²⁹ 前掲216)、p.viii

²³⁰ 戸水寛人(1904)「武士道と今後の教育」『中央公論』(1904年8月号)、p.7

²³¹ Nitobe, Inazo., (1899), *Bushido: the soul of Japan, an exposition of Japanese thought*, Philadelphia: The Leeds and Biddle Company.

²³² 井上哲次郎(1904)「時局より見たる武士道」『中央公論』(1904年7月号)、p.6

²³³ 戸水寛人(1904)「武士道と今後の教育」『中央公論』(1904年8月号)、p.4-5

-
- 234 天溪生(1904)「義務と名誉と」『中央公論』(1904年11月号)、pp.64-67
- 235 山川健次郎(1905)「武士道とゼントルマン」、『中央公論』(1905年4月)、p.7
- 236 井上哲次郎(1904)「時局より見たる武士道」『中央公論』(1904年7月号)、p.6
- 237 『外交余録』における石井菊次郎の記述に基づいた松村正義の定義によれば、対外広報における情報操作は、「野心や謀略・陰謀でもって独裁的あるいは言論統制的に紛争や侵略を意図するような情報の操作が「宣伝」となり、平和や親善・友好を意図した民主的なそれは「広報(文化)」であるといい得よう。」と述べている。(前掲121)、p.11) この定義を用いるならば、活動としては実質的に同じであっても、日本の武士道に関する理解を得ようとする『大和魂』は「広報」に、反独感情を煽ろうとする『新東洋』は「宣伝」ということになる。
- 238 『大和魂』本誌には主席・次席の区別はなく、2名の翻訳者がただ並べられているが、雑誌の刊行を報じた「東京朝日新聞」(1909年12月23日朝刊)には、「英文執筆は井上十吉氏之を担任し岡田陸軍大学教授之を補助せりと云ふ」とある。
- 239 軍事教育会編(1910)『大和魂』1号、軍事教育会
- 240 実際、井上は、井上十吉が翻訳を担当することになる軍事教育会発行の月刊誌『大和魂』の前身となる、日本国内で若い将校たちや兵士たちの士気高揚を目的として発行されていた同名の雑誌において「武士道の話」と題する講話を2号にわたって発表している。(井上哲次郎(1901)「武士道の話」『大和魂』第4号、pp.2-6、同第5号、pp.5-6)
- 241 Benesch, Oleg, (2014), "The Early Bushido Boom, 1894-1905", *Inventing the Way of the Samurai: Nationalism, Internationalism, and Bushido in modern Japan*, Oxford: Oxford University Press, pp.101-102
- 242 橋本順光(2017)「英国外交官の黄禍論小説：アシュトン=ガトキンの『キモノ』(1921)と裕仁親王の訪英」『大阪大学大学院文学研究科紀要』57、p.11
- 243 「『大和魂』の正体：英国にて評判の雑誌」『東京朝日新聞』(明治42年12月23日朝刊)
- 244 「『大和魂』の正体：英国にて評判の雑誌」『東京朝日新聞』(明治42年12月23日朝刊)
- 245 高橋静虎編(1910)『大和魂』第2号、同第3号、軍事教育会
- 246 内川芳美(1993)「ザ・ニューヨーク・タイムスとザ・タイムス」『外国新聞に見る日本：国際ニュース事典 第4巻(1906～1922) 本編 下』、毎日コミュニケーションズ、p.vii
- 247 橋本順光(2013)「日露戦争期の英国における武士道と柔術の流行」『阪大比較文学』7号、pp.178-198
- 248 前掲212)、ここに引用した雑誌の目的に関する高橋と磯部の理解から、「大和魂」と「武士道」とが同一視されていたことが見て取れることも付け加えておきたい。
- 249 前掲216)、見開き p.4
- 250 矢内原忠雄(1975)「訳者序」(新渡戸稲造『武士道』岩波文庫) p.3

-
- ²⁵¹ Nitobe, Inazo., (1907[1899]), “Preface to the First Edition”, *Bushido: the Soul of Japan*, New York: G. P. Putnam’s Sons, p.v.
- ²⁵² 前掲 249)、pp.11-22
- ²⁵³ 前掲 249)、p.25
- ²⁵⁴ 前掲 249)、pp.71-75
- ²⁵⁵ Things Japanese 改訂の様子は、楠家重敏(1986)『ネズミはまだ生きている—チェンバレンの伝記—』(東西交流叢書 2)、雄松堂、pp.289-321 に詳しい。
- ²⁵⁶ 前掲 46)、p.72
- ²⁵⁷ ただし、チェンバレンは、新渡戸が騎士道の東西比較において西洋の基準をアメリカに置いていたことに批判的(p.412)で、さらに「この階級(稿者注:知識層で海外留学した人々)の作品で近年最も巷を騒がせたもの(The work of this class that has made most noise of late years)」(p.72)という書きぶりからは、チェンバレンは新渡戸の著書について、影響力を認めながらも好感を持っていなかったのではないかと考えられる。“make most noise”という言い回しは、「言葉多きは品少なし(Empty vessels make the most noise)」のように、騒がしさに反して中身がないことを言う際に用いられる。
- ²⁵⁸ 前掲 46)、p.412
- ²⁵⁹ Chamberlain, B. H., (rev. 5th ed. 1927[1890]), *Things Japanese*, London: John Murray, pp.563-564
- ²⁶⁰ 佐藤 堅司(1939)「「武士道」といふ語の起原と發達:「武士道思想の發達」を傍系として」、『駒澤地歴學會誌』2、pp. 7-27
- ²⁶¹ *Bushido* の成功は、著者である新渡戸自身が「ある信頼すべき筋からえた報知であるが、ルーズヴェルト大統領がみずから本書を読まれ。かつ友人の間に配られたということを知るのは、私のこの上もなく光栄に感ずる次第である。」(増訂第十版序、p.14-15)と感嘆するほどであった。
- ²⁶² edited by. Stead, Alfred., (1906), *Japan by the Japanese: a Survey by Its Highest Authorities*, London: W Heinemann.
- ²⁶³ Nitobe, Inazo., (1906), “Bushido”, edited by. Alfred Stead., *e: a Survey by Its Highest Authorities*, London: W Heinemann., p.279
- ²⁶⁴ 橋本順光(2013)「日露戦争期の英国における武士道と柔術の流行」『阪大比較文学』7号、pp.180-181
- ²⁶⁵ Hearn, Lafcadio., (1907[1905]), *Japan: an Attempt at Interpretation*, New York: Macmillan, pp.311-330
- ²⁶⁶ Mitford, A. B., (1906), *The Garter Mission to Japan*, London: Macmillan, p. 89
- ²⁶⁷ 前掲 265)、pp.64, 248-252
- ²⁶⁸ 前掲 22)、p.2
- 第6章**
- ²⁶⁹ Hamilton, W. H., (1925[1922]), *John Masefield: A Critical Study*, London: George Allen

-
- & Unwin, Sternlicht, S., (1977), *John Masefield*, Boston: Twayne Publishers., Bhatnagar, L. K. (1983), *John Masefield: The Poetic Dramatist*. Meerut: Shalabh Book House, Mallik, U. N. (1983), *John Masefield: A Playwright*, Patna: Janaki Prakashan などがあげられる。
- ²⁷⁰ 佐藤秀也 (1983)「西洋の忠臣蔵--「仮名手本忠臣蔵」とその英訳「忠義」との比較研究」『演劇学』(24), pp.61-81、前掲 222), 佐伯順子(2011)「海外における「忠臣蔵」：—翻案と研究」『越境する言の葉：—世界と出会う日本文学』彩流社、pp.403-413
- ²⁷¹ 前掲 19)、 pp.129-130
- ²⁷² 中村哲郎(1998)「“日本劇”としての『修善寺物語』—フェルマン・ジェミエによる1927年のパリ上演をめぐる—」, *International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property; Kabuki: Changes and Prospects*, edited by. Tokyo National Research Institute of Cultural Properties, Tokyo: Tokyo National Research Institute of Cultural Properties, pp.62-63
- ²⁷³ Strong, L.A.G., (1952), *John Masefield*, London: Longmans
- ²⁷⁴ Masefield, John., (1918), *The Poems and Plays of John Masefield*, New York: Macmillan, p.vi
- ²⁷⁵ 前掲 19)、 pp.129-130
- ²⁷⁶ David Gervais, ‘Masefield, John Edward(1878–1967)’, *Oxford Dictionary of National Biography* [online], <https://doi.org/10.1093/ref:odnb/34915> (最終更新日：2013年10月3日、最終閲覧日：2018年1月29日)に基づく。
- ²⁷⁷ Masefield, John., (1911), *William Shakespeare*, London: William and Norgate.
- ²⁷⁸ 第1次世界大戦時に救護員として志願して西部戦線へ赴いた詩人はメイスフィールドだけではなく、ヘンリー・トンクス(Henry Tonks)やローレンス・ビニヨン(Laurence Binyon)も戦地に身を置いていた。(Hatcher, John., (1955), *Laurence Binyon*, Oxford: Clarendon Press, p.198.)
- ²⁷⁹ Hamilton, (1925[1922]), *John Masefield*, p.158 および Hatcher, John, (1955), p.191-192 また、メイスフィールドの作品が中立国へ参戦を促すためにウェリントン・ハウスから数多くスペイン語訳が出されていたことが報告されている。(Tato, M. I., (2014), “Luring Neutrals”, *World War I and Propaganda*, edited by. Tony Paddock, Leiden: Brill pp.326-327)
- ²⁸⁰ Masefield, John., (1918), *The Poems and Plays of John Masefield*, New York: Macmillan, p.vi
- ²⁸¹ Hamilton, W. H., (1925[1922]), *John Masefield: A Critical Study*, London: George Allen & Unwin, p.150
- ²⁸² 前掲 277)、 pp.192-193
- ²⁸³ Patterson, Ian., (2012), “Pacifists and Conscientious Objectors”, In *Edinburgh Companion to Twentieth-Century British and American War Literature*, Edited by Adam Piette and Mark Rawlinson, Edinburgh University Press, pp.304-305

-
- ²⁸⁴ Mallik, U. N. (1983), *John Masefield: A Playwright*, Patna: Janaki Prakashan, p.6
- ²⁸⁵ “August 1914”の *The Faithful* との共通点として、国土の表象（どちらも丘と谷が象徴的で先祖代々受け継がれた土地であることを強調している点）、戦争の訪れをまず噂が報せ、同士の喪失を描く点があげられる。
- ²⁸⁶ Rees, R.W.F., (1915), “A Mark Antony of Nippon: Masefield’s Genius and Eastern Tragedy”, *Globe*, (July 17 1915), p.8., Walter de la Mare, (1915), “Mr. Masefield’s Japanese Tragedy”, *The Bookman*, (September 1915), p.160.
- ²⁸⁷ [unknown], (1915), *The Saturday Review*, (August 7, 1915), p.139
- ²⁸⁸ [unknown], (1915), *Birmingham Mail*, (December 6 1915), p.5
- ²⁸⁹ [unknown], (1919), “Masefield's Japanese Play: First Performance”, *The Manchester Guardian*, (April 16 1919), p.9
- ²⁹⁰ [unknown], (1919), “At the Play: Stage Society ‘The Faithful’”, *The Observer*, (April 20 1919), p.7
- ²⁹¹ Woollcott, Alexander., (1919), “The Play”, *New York Times*, (Oct 14 1919), p.14
- ²⁹² 飯倉章(2013)『黄禍論と日本人』中公新書、 p.141
- ²⁹³ 前掲 191)、 p.292

表 1) Japan Weekly Mail の書評者とディキンズの論争および 1880 年版での改訂の様子

番号	Japan Weekly Mail 書評者の指摘	ディキンズの反論	1880 年版での改訂
①	『仮名手本忠臣蔵』は文学的価値が低く、残酷で血なまぐさい封建制度下の日本に関する資料というくらいの価値しかない。	英語圏の読者に、再び現れるとは思えない旧時代の日本の社会状況を伝える材料として、広く知られた作品を翻訳に選択した。	
②	原典は芝居であるにもかかわらず「一種の演劇的な散文のロマンス (a sort of dramatic prose romance)」として位置づけ、一方で翻訳自体は戯曲の体裁でなされている。『仮名手本忠臣蔵』は散文ではなく不規則な韻文である。	『仮名手本忠臣蔵』は文学的な形式としては対話で構成された芝居だが、浄瑠璃は多様な性格を持ち、流浪の吟遊詩人に歌われることも多く、西洋のバラッドに相当する。八段目以外は韻文調とは程遠い。	初版： a sort of dramatic prose romance (p. appendix 3) →1880 年版： a sort of dramatic part-prose part-metrical romance (p.148)
③	大序はいわゆる序文のことではないにも関わらず、大序の冒頭の数行を「著者の序文 (author's preface)」として訳出し、なおかつ誤訳が多くある (書評者の私訳を初版訳文と並記：国が平和な時は、良い侍の忠義や武勇は秘められるが、夜の混乱の中では目に見えるようになる (Thus when a country is at peace, the loyalty	「著者の序文」として Book I とは別に訳出した大序の数行は、調子の上で他の部分と異なっているため、翻訳で施した処置は間違っていない。むしろ、草稿段階でドラマチックに訳出した“Prologue”のままにしていたほうがふさわしかったかもしれない。大序の内容の誤訳については	初版： … the confusion of a country where the loyal and brave deeds of worthy samurai remain unnoticed is like that of a dark night, when not so much as a star-twinkle is to be seen… (p. iv) 脚注なし →1880 年版： …and so, in piping times of peace, the loyalty and

	and valour of good samurai are concealed, lie the stars which are unseen in the day time, but become visible in the confusion of night.)。	認める。	bravery of valiant samurahi remain unnoticed, like as the light of the stars, unseen in the day-time, becomes visible only in the darkness and confusion of night … (p. xv)脚注： In the text the whole of the First Book is dignified by the name of "daijo" or "preface"; but the introductory sentence here translated alone deserves that title, the rest of the book being, in reality, a portion of the narrative.
④	将軍に対して “Imperial” “Majesty”といった皇室や王室に対して用いる言葉を選ぶような低レベルのミスを犯している。	足利将軍家に対して “Imperial”や “Majesty”という言葉を用いることは、14世紀当時足利家が有していた権威を考えると誤りではない。	初版：足利将軍家に対しても帝に対しても “His Majesty”。「御上使」の訳 “Imperial Commissioner” → 1880年版：将軍に対しては “His Highness”。「御上使」は “Commissioner”。
⑤	「御馳走の役人」は「鎌倉を訪れる将軍の弟を歓迎する宴に参加		初版：「在鎌倉の執事」は Prime Councillor under

	<p>するよう指名された役人たち (officers appointed to attend to the reception of the Shogun's brother on the occasion of his visit to Kamukura)」のこ とである。</p>		<p>His Majesty the Shogun(p.2)、「御馳走の役人」は gentlemen-in-waiting to His Highness (p.13) →1880 年版：chief representative of the Shogun at the Eastern capital(p.2)、the duty of receiving guests (p.11)。</p>
⑥	<p>三段目に登場する烏の鳴き声に「日本人は、奇妙なことに、烏の鳴き声に愛の調べを感じ取る (The Japanese, strangely enough as it appear to us, detect in the hoarse tones of the crow the note of love.)」と注が付されているが、それには『仮名手本忠臣蔵』本文中にある「かう」と「可愛い」との掛詞しか根拠がない。</p>		<p>1880 年版： There is a sort of appropriateness in mentioning the crows here. The caw or croak of these birds is supposed to resemble in sound the repetition of the word Kawai (pronounced “kah why”, “love.”) (p.32)</p>
⑦	<p>七段目に出てくる「くつわ」を「鐙 (stirrup)」と訳出している。</p>	<p>「くつわ」の訳は確かに誤りだった。</p>	<p>初版：stirrup→1880 年版：bridle-ring</p>
⑧	<p>武士と町人との間に厳然とした身分の違いがあったことを説明する際に、「町人」の中に農民が</p>		<p>初版： the Chonin (lit. “street people”), or citizens, artisans, and peasants)</p>

	含まれている。		(p.134)→1880年版:同じ注から“peasant”だけを削除。
⑨	十一段目に出てくる「御免」の注について、「御免」の「免」は「許し(permission)」の意味であって「顔(face)」の意味ではない。	「御免」の「免」が許可の意味を持つことは知っているが「面」の用法も何例か知っているため不適合とは思わない。	初版： Lit. “honourable face,” “lending me your honourable countenance,” i.e., “with your permission” →1880年版： i.e., “with your august permission” (p.143)
⑩	吉田兼好について「二流のへぼ詩人(a mediocre versifier)」としか紹介せず、より広く知られている『徒然草』に言及していない。		1880年版： He was also the author of a collection of essays on all sorts of subjects of very little intrinsic interest or value, known as the Tsure-dzure-gusa (p.159)
⑪	巻末注において伴内を人の名前ではなく「衛兵の頭」と役職として解説している。	「伴内」を役職として訳出したのは誤りだが、文脈から誰かの名前を指していることは読者には明白だろう。	1880年版：この注は削除。
⑫	「うつうつつ」を「眠ること、夢を見ること」と訳出している。		1880年版：この注は削除。

本論文で言及した「忠臣蔵」の海外受容に関係する出来事まとめ

西暦	欧米で	日本で	関連する事項
1820	イザーク・ティチングの <i>Mémoires et Anecdotes sur la Dynastie régnante des Djogouns</i> (英語版タイトル <i>Illustration of Japan</i> (1822)) の中で討ち入り事件の梗概 が言及される。ティチングは オランダ商館長。		
1848		泉岳寺御開帳。	
1854			日本とアメリカ、イギリス、 ロシアとの間に、それぞれ、 日米和親条約、日英和親条 約、日露和親条約が締結され る。
1860			桜田門外で大老井伊直弼が 水戸浪人らによって殺害さ れる (桜田門外の変)。
1861	ジョージ・スミスの <i>Ten Weeks in Japan</i> で梗概が言及 される。ジョージ・スミスは、 イギリス人宣教師。		
1863	ラザフォード・オールコック の <i>The Capital of the Tycoon</i>		

	<p>で梗概が言及される。オー ルコックは、イギリスの初代 日本公使。</p>		
	<p>ルドルフ・リンダウ <i>Un Voyage autour du Japon</i> で忠 臣蔵に言及。リンダウは、ス イス来日外交団の一員。</p>		
1868			明治元年。
1869			アメリカ初の大陸横断鉄道 が開通。
1871	<p>A.B. ミットフォード “The Forty-seven Ronins” が <i>Tales of Old Japan</i> に収録され、出 版。ミットフォードは、イギ リス公使館員。</p>		
1874			外国人の内地旅行が許可制 のもと解禁される。
1875		F.V.ディキンズ「仮名手本忠 臣蔵」を英訳し、横浜で出版。	
1876	<p>F.V.ディキンズの英訳「仮名 手本忠臣蔵」がニューヨーク で出版される。</p>		
1877- 79	<p>前田正名の「忠臣蔵」翻案劇 <i>Yamato</i> がパリ万博の前後に</p>		

	上演される。		
1880	F.V.ディキンズの英訳「仮名手本忠臣蔵」がロンドンで出版される。	パリ万博で上演された <i>Yamato</i> の、前田本人による日本語訳である『日本美談』が出版される。	
	斎藤修一郎、エドワード・グリーイによる為永春水『いろは文庫』の英訳である <i>Loyal Ronins</i> がニューヨークで出版される。		
1887			カナダ太平洋鉄道が開通。
1889		重野安績の『赤穂義士実話』が出版される。	
1894			外国人の内地旅行の制限がなくなる。
1892		富田源太郎の序文を付し、作者などの訂正が加えられたディキンズ訳「仮名手本忠臣蔵」が丸善から出版される。	
1894		井上十吉の「仮名手本忠臣蔵」の英訳が博文館から出版される。	
1894-			日清戦争勃発。

1895			
1899	新渡戸稲造の <i>Bushido</i> がアメリカで出版される。		
1902			日英、攻守同盟条約を締結 (日英同盟)。
1904- 1905			日露戦争勃発。
1905	ラフカディオ・ハーンの <i>Japan: an Attempt at Interpretation</i> がアメリカ、イギリスで出版される。		
1906	新渡戸稲造の「忠臣蔵」への言及を掲載した <i>Japan by the Japanese</i> がイギリスで出版される。		
1909		福本日南『元禄快拳録』が出版される。	
		イギリス陸軍キッチナー元帥が来日。歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」を観覧。	
1910		『日本及日本人』で「四十七名士四十七士観」の題で「忠臣蔵」特集が組まれる。	
		軍事教育会が和文・英文併記	

		<p>の雑誌『大和魂』を発刊。</p> <p>井上十吉の英訳「仮名手本忠臣蔵」の第2版が中西屋から出版される。</p>	
1914- 1918			第一次世界大戦勃発。
1915	<p>ジョン・メイスフィールドの「忠臣蔵」翻案戯曲 <i>The Faithful</i> が7月にロンドンで出版され、同年12月にバーミンガムで初演される。</p>		
1917			新東洋社によって和文・英文併記の雑誌『新東洋』が発行される。
1919	<p>ジョン・メイスフィールドの戯曲 <i>The Faithful</i> がロンドン、ニューヨークで上演される。</p>		

参考文献

・ 英語文献

- Chamberlain, B. H., (4th ed. 1902[1890]), *Things Japanese Being Notes on Various Subjects Connected with Japan*, London: John Murray.
- Kaempfer, Engelbert., (1906[1727]), *The History of Japan*, London: Printed for the Translator.
- Mitford, A. B., (1906), *The Garter Mission to Japan*, London: Macmillan.
- Edited by Stead, Alfred., (1906), *Japan by the Japanese : a Survey by Its Highest Authorities*, London: Heinemann.
- Hearn, Lafcadio., (1907[1905]), *Japan: an Attempt at Interpretation*, New York: Macmillan
- Hamilton, W. H., (1925[1922]), *John Masefield: A Critical Study*, London: George Allen & Unwin.
- Gatenby, E. V., (1937), "The Influence of Japan on English Literature", *Transactions and Proceedings of the Japan Society London*, 34(46), London: Japan Society London, pp.37-64
- Strong, L.A.G., (1952), *John Masefield.*, London: Longmans.
- Ashton-Gwatkin, F. T.A., (1956), "Tales of Old Japan", *Bulletin of the Japanese Society of London*, vol. 18, pp.7-16
- Hatcher, John., (1955), *Laurence Binyon*, Oxford: Clarendon Press
- Miner, Earl., (1958), *The Japanese Tradition in British and American Literature*, Princeton: Princeton University Press.
- Magnus, Philip, (1968[1958]), *Kitchener: Portrait of an Imperialist*, Harmondsworth: Penguin Books.
- Sternlicht, S., (1977), *John Masefield*, Boston: Twayne Publishers.
- Kornicki, Peter., (1981), "The Survival of Tokugawa Fiction in The Meiji Period", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 41(2), (December 1981), pp.461-482.
- Bhatnagar, L. K. (1983), John Masefield: *The Poetic Dramatist*. Meerut: Shalabh Book House.
- Mallik, U. N. (1983), *John Masefield: A Playwright*, Patna: Janaki Prakashan.
- Edited by Cortazzi, A. H. H., (1985), *Mitford's Japan: Memories and Recollections, 1866-1906*, London: Continuum International Publishing Group.
- Toshio Yokoyama, (1987), *Japan in the Victorian Mind: A Study of Stereotyped Images of a Nation 1850-1880*, London: Macmillan.
- Friday, K. F., (1994), "Bushido or Bull? A Medieval Historian's Perspective on the Imperial Army and the Japanese Warrior Tradition", *The History Teacher*, 27(3), (May 1994), pp.339-349

-
- Tymoczko, Maria., (1999), *Translation in a Postcolonial Context*, Manchester: St. Jerome Publishing.
- Smith II, H. D., (2003), “The Capacity of Chūshingura”, *Monumenta Nipponica*, 58(1), (Spring 2003), pp. 1-42
- (2006), “The Media and Politics of Japanese Popular History: The Case of the Akō Gishi.”, edited by. James C. Baxter, *Historical Consciousness, Historiography, and Modern Japanese Values*, Kyoto: International Research Center for Japanese Studies, pp. 75-97
- Hyōdō Hiromi and Henry D. Smith II, (2006), “Singing Tales of the Gishi: Naniwabushi and the Forty-seven Rōnin in Late Meiji Japan”, *Monumenta Nipponica*, 61(4), (Winter 2006), pp. 459-508
- edited by. Timon Screech, (2006), *Secret Memoirs of the Shoguns: Isaac Titsingh and Japan, 1779-1822*, London: Routledge
- edited by. K. J. Wetmore, Jr., (2008), *Revenge Drama in European Renaissance and Japanese Theatre*, New York: Palgrave Macmillan.
- Patterson, Ian., (2012), “Pacifists and Conscientious Objectors”, In *Edinburgh Companion to Twentieth-Century British and American War Literature*, Edited by Adam Piette and Mark Rawlinson, Edinburgh University Press, pp.304-316
- Edited by. A. H. H. Cortazzi, (2013), *Britain & Japan: Biographical Portraits*, vol. 8, Leiden: Global Oriental
- Benesch, Oleg, (2014), *Inventing the Way of the Samurai: Nationalism, Internationalism, and Bushido in modern Japan*, Oxford: Oxford University Press
- Chozick, Matthew., (2017), *How English Translations of The Tale of Genji Helped to Popularize the Work in Japan*, Ph.D. Thesis, University of Birmingham, Birmingham, United Kingdom.
- Morton, Robert, (2017), *A. B. Mitford and the Birth of Japanese Modern State: Letters Home.*, Folkestone: Renaissance Books

・日本語文献

- 武藤長蔵(1942)『日英交通史之研究』内外出版印刷
- 木村毅(1960)『日米文学交流史の研究』講談社
- 松島栄一(1964)『忠臣蔵—その成立と展開—』岩波新書
- 大村喜吉(1965)「井上十吉研究序説」『日本英学史研究会研究報告』25号、pp.1-9
- 田鍋幸信(1966)「スティーヴンソンの忠臣蔵論」『法学紀要』8号、pp.493-526
- 昭和女子大学近代文学研究室編(1969)『近代文学研究叢書 30』、昭和女子大学近代文化研究所、pp.289-327
- ファン・オーフェルメール・フィッセル(1978[1833])『日本風俗備考 2』(庄司三男・沼田

次郎訳) 平凡社

- 増田毅(1980)『幕末期の英国人 : R・オールコック覚書』神戸大学研究双書刊行会
- 横山俊夫(1980)「ヴィクトリア期イギリスにおける日本像形成についての覚書-1- : S.オズボーンとエディンバラの出版社ブラックウッド」『人文学報』48号、pp.1-24
- (1981)「ヴィクトリア期イギリスにおける日本像形成についての覚書-2- : L.オリファントとエディンバラの出版社ブラックウッド」『人文学報』50号、pp.55-83
- 野田正彰(1982)「忠臣蔵の受容—集团的陶醉として—」『国文学：解釈と教材の研究』31巻15号、pp.92-97
- 横山俊夫(1982)「A.B.ミットフォードによるイギリスへの日本紹介：--1869年～72年を中心に」『人文学報』51号、pp.47-72.
- 丸谷才一(1984)『忠臣蔵とは何か』講談社
- 楠家重敏(1986)『ネズミはまだ生きている—チェンバレンの伝記—』(東西交流叢書 2)、雄松堂
- ルドルフ・リンダウ (森本英夫訳) (1986[1864])『スイス領事の見た幕末日本』新人物往来社
- 大西俊男(1988)「タイムズを中心とした新聞記事の A.B.ミットフォードの評価」『英学史研究』(20)、pp.85-95.
- 赤穂市教育委員会市史編さん室編(1989)『忠臣蔵 第一巻』兵庫県赤穂市
- 太田昭子(1991)「忠臣蔵の世界--英語訳にみられる変容過程」『教養論叢』88号、pp.1-28
- 赤間亮(1992)「最初の赤穂義士劇に関する憶説—江戸版絵入狂言本の語りかけるもの—」
- 鳥越文蔵編『歌舞伎と狂言—言語表現の追及—』 pp.92-115
- 内川芳美(1993)「ザ・ニューヨーク・タイムスとザ・タイムス」『外国新聞に見る日本 : 国際ニュース事典 第4巻 (1906～1922) 本編 下』、毎日コミュニケーションズ、pp.vi-ix.
- 大西俊男(1993)『A.B.ミットフォード』近代文芸社
- 太田昭子(1995)「オールコック「大君の都」」『国文学解釈と鑑賞』60(3)、p82-89
- 楠家重敏(1995)「日本アジア協会の知的波紋」(『杏林大学外国語学部紀要』7、pp.123-142
- 川村ハツエ(1997)「第3章 『仮名手本忠臣蔵』の英訳」『F・V・ディキンズ：—日本文学英訳の先駆者—』七月堂、pp.58-82
- 中村哲郎(1998)「“日本劇”としての『修善寺物語』—フェルマン・ジェミエによる1927年のパリ上演をめぐる—」, *International Symposium on the Conservation and Restoration of Cultural Property; Kabuki : Changes and Prospects*, edited by. Tokyo National Research Institute of Cultural Properties, Tokyo: Tokyo National Research Institute of Cultural Properties, pp.61-72
- 速川和男(1999)「英学史の中の『忠臣蔵』」『立正大学人文科学研究所年報』36号、pp.14-28
- ハルオ・シラネ、鈴木登美編(1999)『創造された古典：カノン形成・国民国家・日本文

学』新曜社

- 宮澤誠一(2001a)「近代「忠臣蔵」の諸類型」『歴史評論』617号、pp.43-57
-----(2001b)『近代日本の「忠臣蔵」幻想』、青木書店
- 鵜飼政志(2001)「忠臣蔵が英訳されるまで」『歴史評論』617号、pp.72-79
- 奥村佳代子(2002)『「忠臣蔵演義」と『海外奇談』』『中国語研究』44号、pp.65-80
- 松村正義(2002)『新版 国際交流史：近現代日本の広報文化外交と民間交流』、地人館
- 佐野真由美(2003)『オールコックの江戸』中公新書
- 石沢小枝子(2004)「A. B. MITFORD: TALES OF OLD JAPAN について」『ちりめん本のすべて：—明治の欧文挿絵本』三弥井書店、pp.475-499
- 秋山勇造(2005)『新しい日本のかたち——明治開明の諸相』お茶の水書房
- 園田英弘(2006)「横浜へのもう一つの道：太平洋航路をめぐるアメリカとイギリスの競合」In *Historical Consciousness, Historiography, and Modern Japanese Values*, Edited by James C. Baxter, Kyoto: International Research Center for Japanese Studies, pp.113-127
- 佐光昭二(2007)『阿波洋学史の研究』、徳島県教育印刷、pp.343-369
- 神山彰(2008)「忠臣蔵の近代：「実録」と「外伝」の命運」『仮名手本忠臣蔵を読む』吉川弘文館、pp.203-205
- 古今いろは評林をよむ会編(2008)『古今いろは評林—本文と注釈—』
- ハルオ・シラネ編(2009)『越境する日本文学研究：カノン形成・ジェンダー・メディア』勉誠出版
- 奥村佳代子(2010)「中国語訳「忠臣蔵」の諸相：『海外奇談』の翻訳者像と翻訳態度初探」『関西大学東西学術研究所紀要』43号、pp.131-142
- 赤穂市教育委員会市史編さん室編(2011)『忠臣蔵 第二巻』兵庫県赤穂市
- 岩上はる子、ピーター・コーニッキ編(2011)『F・V・ディキンズ書簡英文翻刻・邦訳集：アーネスト・サトウ、南方熊楠（他）宛』、エディション・シナプス
- 佐伯順子(2011)「海外における「忠臣蔵」：—翻案と研究」『越境する言の葉：—世界と出会う日本文学』彩流社、pp.403-413
- 緑川真知子(2011)、『『源氏物語』英訳についての研究：翻訳された『源氏物語』の捉え方についての細密なる検証』武蔵野書院
- 飯倉章(2013)『黄禍論と日本人』中公新書
- 川瀬健一(2013)「「いろは文庫の英訳③」：—テキスト選択の謎—」(第438回日本英学史学会本部例会報告発表資料(2013年7月6日))、[online] <http://kawa-k.vis.ne.jp/201376.pdf> (参照2018年11月10日)
- モナ・ベイカー、ガブエラ・サルダーニャ編(藤濤文子監修・編訳)(2013)『翻訳研究のキーワード』研究社
- 岩上はる子(2015)「F. V. ディキンズと日本文学：—『仮名手本忠臣蔵』の翻訳について—」『英学史研究』48, pp.1-16

奥村佳代子(2015)「『海外奇談』の語句の来歴と翻訳者」『関西大学東西学術研究所紀要』
48号、pp.29-42

武田悠一(2017)『読むことの可能性——文学理論の招待』彩流社

橋本順光(2017)「英国外交官の黄禍論小説：アシュトン=ガトキンの『キモノ』(1921)と
裕仁親王の訪英」『大阪大学大学院文学研究科紀要』57、pp.1-19

マイケル・エメリック (2018)「日本文学の発見：和文英訳黎明期に関する試論」(長瀬海
訳)、河野至恩・村井則子編『日本文学の翻訳と流通：近代世界のネットワークへ』
勉誠出版、pp.9-30

謝辞

本論文は、筆者が立命館大学大学院文学研究科行動文化情報学専攻文化情報学専修博士後期課程に在籍中の研究成果をまとめたものです。本論文を提出するにあたって、多くの方々のご指導とご助力をいただきました。この場を借りて、感謝の意を述べさせていただきますと思います。

文学部教授赤間亮先生には、指導教員として、躓く度に歩みを止めてしまう私を辛抱強くご指導戴きました。博士前期課程在籍時、受講生の1人にすぎなかった私にイギリスでの研修の機会を与え、私の日本文学の海外受容への関心を研究へと繋げる道を示して戴いて以来、後期課程から翻訳という新しいテーマに取り組み始め、右も左も分からず足踏みを続けていた私には、先生も随分歯がゆい思いをされたことだろうと思います。それにも関わらず、自分なりの道を見つけるまで、試行錯誤を繰り返す機会と自由を惜しみなく与えてくださいましたこと、深謝申し上げます。衣笠研究機構教授鈴木桂子先生、並びに、文学部教授矢野桂司先生には、副査として常日頃から親身にご助言を戴くとともに、本論文の細部にわたりご指導を戴きました。

また、ケンブリッジ大学図書館日本部長でいらっしゃった小山騰先生、ロンドン大学SOAS 東アジア言語文化学部教授 Andrew Gerstle 先生には、イギリスでの資料調査の際、私の研究へご助言をいただき、また、関係する研究分野の先生方へご紹介いただくなど、大変お世話になりました。

加えて、Marek Mikes さんや Vanessa Tothill さんには、在学中、英文の解釈や国際学会での発表などについて、幾度も相談に乗ってもらいました。

最後に、研究生活を支え、いつも私の一番の理解者でいてくれた両親に、厚く、深く、感謝の意を表します。

2018年11月20日

川内有子

本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費（特別研究員 No. 742619）および日本学術振興会若手研究者海外挑戦プログラムによった。